忍法川中島

早乙女貢

時代小説文庫

忍法川中島

天文22年、武田勢が信濃の葛尾城を攻略した折、敗残の城主村上義清を武田方に売り渡す牢人がいた——。身のこなし、鋭い眼光に伊賀の下忍天耳と見抜いた軍師山本勘助は妖艶な甲州くの一を天耳のもとに送り込むが……。野望に燃える希代の忍者天耳を主人公に歴史の裏で暗躍する甲斐忍衆黄金虫と北越かまいたちの熾烈な死闘を妖美なエロティシズムで描く忍法帖。

カバー装画　西のぼる
カバーデザイン　熊谷博人

早乙女貢
忍法川中島

時代小説文庫

忍法川中島
早乙女貢

時代小説文庫 18—1
470円

富士見書房
ISBN4-8291-1100-3 C0193 P470E 定価470円
（本体456円）

—時代小説文庫—
早乙女貢作品集

忍法川中島
秘剣鱗返し
南海に叫ぶ
忍法くノ一
忍法くノ一・続
甲賀くノ一(上)(下)
死神伝奇
かげろう伝奇
花笛伝奇
緋牡丹伝奇
猫魔岳伝奇

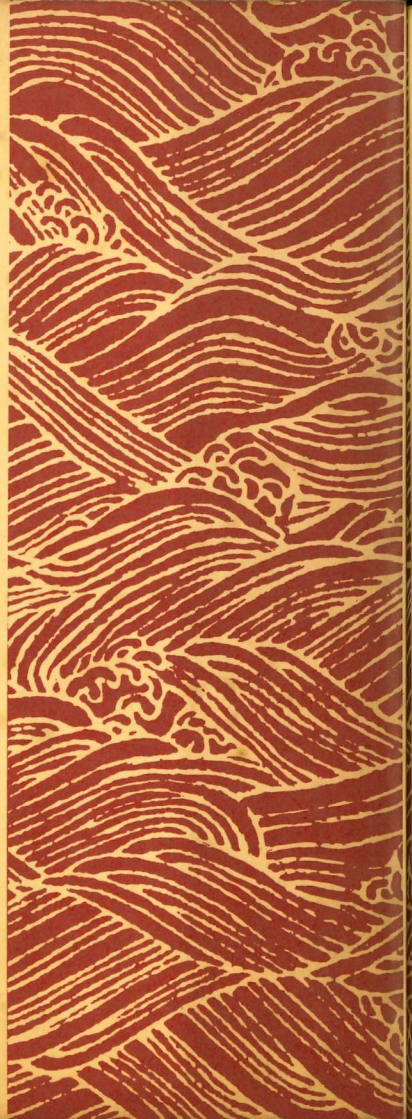
旭印刷

忍法川中島

早乙女 貢

時代小説文庫 100

富士見書房



忍法川中島

早乙女 貢

時代小説文庫 100

時代小説文庫　100

富士見書房

忍法川中島

早乙女貢

目次

夜の忍者　六
忍法皮つるみ　三七
異相の兄弟　六一
ふぐり問答　七五
悪血　九
くノ一狂い　一一八
不倫の城　一五五
忍び卍（まんじ）　一八一
血どろ風　二〇七
秋風川中島　三一八
解説　清原康正　二四九

忍法川中島

夜の忍者

一

夜に入って風が出た。信州の高原を吹く風にはもう秋の気配が濃い。戦場のなまぐさい血の臭い、死体の腐りはじめた臭いを吹き消そうとするかのように、風は颯々と虚空に唸り、尾花を泣かせて地上を掃いた。

五日ばかりの月が城の肩に落ちかけている。

火をかけたのは城兵のほうである。戦さが敗色濃くなってくると、自ら火を放って、混乱の中に逃亡をはかるのが、戦の常識であった。あるいは城主とその家族たちが、死ざまを曝さないためでもある。首級が敵の手に渡り、梟首される恥をさけるのだ。

半焼けの城は、まだぶすぶすと燻っていた。

その煙りが、月の面を掠め、蒼い光りを時々昏くした。煙りがとぎれると、戦場のるいるいたる屍が浮き上る。まだ呻きを洩らして動いている影もある。

櫓が凄まじい音をたてて崩れおち、どっと黒煙が噴き上った。

月が隠れた。

まるで、そのときを待っていたように、黒い風が尾花の影を走った。一陣の黒風と見えた影は平地を走り、坂の下に来た。

山城である。城郭は傾斜にある。死闘が激しかったのは、大手より搦手であった。数十を算える死体の多くは、城から脱出しようとして囲み討ちに斃れた城兵のものである。

首のない死体もあった。それらは、あるいは鎧を剝がれ、刀や胴巻がなかった。兜首ほど——というのは身分のある者ほど金目のものを持っているからである。

戦場には、戦場荒しがつきものであった。

その影もあるいはそれか。

影はばったり、倒れた。身を伏せたのだ。月が顔を出し、さっと蒼い光りが流れた。

「ひっひひ、月はやがて沈むわな。ま、急ぐこともあンめい」

枯葉の重なりこすれるような笑い声を洩らした影は、ひょいと顔をだした。

死体と死体の間である。

顔だけを出して、あたりを見まわしている。

奇怪な顔であった。山犬の凶々しさと、猿の剽軽さをかけ合わせて梟の夜眼を与えればこうもなろうか？　年齢の見当もつかぬ。顔は毛ぎれ猿のように灰色の毛がすり切れて老爺のようでもあるし、その軽捷できびきびした動作は青年のものなのだ。

奇怪というしかない。だらりと半びらきの唇はてかてかに光り、涎れが白く垂れている。まるで、牛のような。いや、餓狼が餌を見つけたときの、表情というほうがいいかもしれぬ。

美味い食物を発見したのか。

とすれば、その餌は、どこにあるのか？

呻きが聞えてくる。手が動いている。助けをもとめているのであろうが。もはや、苦悶のあまり言葉をなさない。

ぱっと、跳んだ。野兎の洞穴から飛びだすように。死体を三つほど、一気に飛び越えて、その断末魔の男のそばへうずくまる。

一瞬の飛影を見とがめた者はいない。

「う、う……うっ」

唇をふるわして、その重傷者は何か言おうとしている。血で真っ赤な顔だ。兜はなく乱髪どめの鉢巻の上から、ざくりと一太刀浴びたのが致命傷であろう、脳漿が吹きだしていて、月光に蒼白く流れていた。

「ひひひッ、うらの来るのを待っちょってかや。好えとも、楽にしてやるがの」

影はその傷口に両手をかけ、ぐいと押しひらくようにした。そして、なんと顔を寄せた。長い舌でべろべろと血糊を舐めたではないか。

それだけではない。身を飜えすと、鎧通しを抜き取った。

腰を蔽った草摺を一気に切り放して袴を引き剝ぎにかかっている。

それにさからう力はもう武士にはなかった。死期は迫っている。呻きも水の引くように細まり、手も動かなくなっている。

おそらく、苦しみももう無いのではないか。

「急がにゃァの……」

誰に言うのか。独りごとのようである。

袴の紐はきつく縛ってある。ちえッと舌打ちした。鎧通しの鋭利な刃がサクリと紐を切った。袴を引きおろす。下帯まで切りとってとうとう下腹部を月光に曝してしまった。まるで母親が赤児の下の始末をするような有様だ。手つきも馴れている。

いま将に死なんとする男の下半身を、どう扱おうとするのか。

奇怪な男は、ムズとそれを摑んだ。すでに死の淵にのぞんで、だらりと垂れてはいるが、狎れた掌のなかで、ひくひく断末魔のいのちのあえぎを伝えている。

「――熟れたわえ、いひひッ」

血ぬれた刃を下肢の間に入れる。陰茎を切るのではなかった。それは邪魔っけに上へあげ、サクリと切ったのは、なんと陰嚢である。

ぐにゃりとしたものを摑みあげると、嬉しそうに奇妙な声をあげた。待ちかねた宝物を手に入れたような喜悦ぶりである。血まみれた陰嚢を掌の上で二、三度踊らせると、あざやかな手

ぎわで、スーッと一線を引き、皮をべろりと剝く。切尖をくるりとまわすようにして、玉を抜きとるや、包み嚢は無用だとばかりぽいと捨てる。掌に残ったのは睾丸である。

二

人声がした。

嬉し気に掌に睾丸を乗せて、にたにたと涎を垂らしていた男は、あわてて、死体の下肢の中に沈んだ。

声は戦場見廻りの足軽であろう。五人ほどが組みになって、弓矢を持ち、槍をかいこんで通りかかった。穂先と、抜身の刀がぎらりと光った。

松明は二つ、そこらを照らしながら、動いている者は足で蹴りかえしてみたり、槍の先で小突いてみている。

「息があるか？」

「ウム。少しな、だが、どうせ助からぬさ」

「面倒だ。とどめを刺してやれ」

ぶすりと、穂先が咽喉を貫く音がした。

（――勿体ねや……）

うっかり声を洩らしそうになって、ひたと顔を叢に埋めた。二箇の睾丸だけはつぶさぬように握っている。死んでも離すまい。

昼日中は、まだ暑気がはげしいから、小者や雑兵は半裸体で闘った者も尠くないし、前述したように鎧を剝がれた者もいる。服装はまちまちだから、この男の姿だけ見たのでは怪しまない。

動きさえしなければ、目は止めぬ。

足軽たちが通りすぎると、ほっとしたように顔をあげて、

「早いとこ食わにゃの、取り上げられては、こっちゃひもじ腹じゃけの」

べろりと掌を舐めるようにして、食った。

本来なら、ゆっくりと味わうところだが、しかたがない。一箇もぐもぐとやると、嚥みくださないうちに、もう一箇。しこしこの張りのある肉塊が、口の中で嚙み砕かれ、溶けて甘酸っぱくひろがってゆく。この醜怪な容貌が、世にも嬉しげに弛んでいる。

だが、所詮は一人の睾丸だ。ゆっくり食べてもたちまちおしまいになる。舌舐めずりして、またキョトキョトとその梟の眼が見まわしたのは、食べたりぬのであろう。

かれは立ち上った。

ぴょんとはねた。幸いと、見張りの眼はない。焼け残った廓のほうでは、酔い痴れた唄声やざわめきが聞こえている。勝利の酒盛りをつづけているのだ。

月はいよいよ傾き、沈もうとしていた。蒼い光りのなかに、頭だけ大きな奇妙な小男の跳び

はねる姿は、さながら、怨みをのんで討死した強者たちの霊魂が、執念ぶかく死体から抜け出てきたかのようであった。

この男、遊んでいるのではない。

ぴょんぴょんはねて死体から死体へ飛び渡るのは、仮死している者を捜すためであった。

激痛や頭の傷やショックで一時的に気を失っている者がある。

それを捜そうというのだ。してみると、死体の睾丸は美味くないのか。

はねながら、踊りながら、何やら口誦さんでいる。しわがれた声で唄っているのだ。楽しそうな、おもしろい節廻しである。

へホーイホイ、ホーイホイ
目ェさませ、目ェあけろ
死んだ奴でも、目ェあけろ
大事な物をぶら下げて
閻魔の庁へ行く気けェ
ああ勿体なや、勿体なや……

楽しげだ。醜怪な容貌も姿体も、この幻想的な雰囲気の中では奇妙にぴったりと合うのである。

どうせ、こんな変な唄は、即興であろう。

涎れをくりくり、唄い、踊り、死体の一つ一つを足で蹴ってたしかめてゆく。

へホーイホイ、ホーイホイ
起きあがれ、起きてけれ
死んだ奴でも、起きてけれ
ムクロジ様が待っちょるで
ふぐりを、ちゃっと差し上げろ
ああ美味いぞな、美味いぞな……

効果はあったらしい。男は、ぱっと死体から飛びおりた。足の裏に、ぐにゃりと柔らかい肉体が動いたのだ。驚ろいたのは、その肉の柔らかさのせいもある。

おりると同時に這いつくばった。

「ふえッ……吃驚させるでねえ」

稚児衆か？　と思った。小具足の色目は燃えるような緋縅である。

死体はもぞもぞと動き、また、動かなくなった。稚児でも老人でも、かれの言う《熟れたふぐり》に変りはない。果物のもっとも食べごろは、腐りかけの一歩手前だという。つまり熟しどころである。もっとも厳密にはちがう。成人して、且つ、未だ女を知らぬ睾丸だという。

さて、二人目の犠牲者、つまり、三箇と四箇のふぐりにありついたムクロジ様は、れいによって素早く、ぐいと下肢をひろげ、袴の紐をほどいて、ほたほたしながら、ずりおろした。下

は腰布を巻いている。

はて？　と不審顔になったのは、このまだ温い死体は、下帯をつけておらぬ。褌――踏み通し、である。

顔を近づけて、あっ、と言った。たらたらと垂れかけた白い涎れが、ぴたりと止る。なんと目あてのものがない。白い下肢のつけ根に、うず高く盛り上った丘があるきりで、ちぎれた律が奇妙な柔らかさで、かれのあぐらをかいた鼻頭をくすぐった。

「けッ、お、女じゃないけ」

緋縅の小具足をつけた凛々しい若武者と見えたのは、若い女の男装だったのである。

普通の男だったら、思いがけないことに喜ぐところが、この男は、がっかりしたようにぴしゃりと、陰阜を平手で打った。

「つまらねえ……」

そのぼやきに、応じるように、どこかで声がした。

〈女で悪かったな、ムクロジよ〉

耳のそばで聞えた。

男ははね上った。しゃがんでいたのが、そのままはね上った。驚愕がそのまま無意識に、反射的に、かれの矮軀を跳躍させたようである。

どさりと、女の剝きだしのふとももの上におちた。女は、微かに呻いた。が、かれの関心は、

その風の吹き抜けるような、奇怪な声にある。

血ぬられた鎧通しを構えて、キョトキョトとあたりを見まわして、

「な、なんじゃって？　なんと言うたのけ」

〈女武者で気の毒した……〉

その声は言った。

三

姿は見えぬ。声ばかりである。どこから聞こえるのか。尋常の発声ではない。声といえば声、音といえば音――颯々たる風が、死体の鬢髪を吹きあげ、折れた指物などをはためかして吹きすぎる。その夜風にも、声は消されぬ。奇体なのはその点にある。揶揄するようなその声は、夜風を裂いて、まっすぐにかれの耳に入ってくる。

「ど、どこに居るんじゃい、面ァ見せんけ」

〈止そう〉

と、あくまでも、からかうように、

〈わしのふぐりは、まだやれぬ〉

「ちえッ……ゆ、幽霊のふぐりは、このムクロジ様は食わねえわい。し、死んだら死んだように、ものを言うなてや」

姿が見えないのだから、死人の声としか聞えない。死体の間に隠れているのだろうか？　負傷して動けない者の声にしては、しっかりし過ぎているし、そんな余裕などないはずだ。それに、どうやら、その奇体な声は上のほうから聞える。

ひょうひょうと、暗空の風は地上よりも強い。その天から聞えてくるというのも不思議なことである。

ムクロジの言葉を聞いて、その声は、ふふふ……と含み笑いした。

〈死ぬのは、汝れが先じゃ〉

「なんじゃて！」

〈汝れに先に死んでもらわねば、わしのふぐりが心配じゃでのう……〉

それっきり、声は絶えた。

ムクロジは落着かなくなった。誰かが、どこかで見ている——ひそかに見られているというのは気味のいいものではない。死臭も腐肉も気にならぬ、化物のようなムクロジも、正体不明の〝声〟には、落着けというほうが無理なのか。

熟れ睾丸には未練が残るが、その〝影〟に皮肉な眼で見られていると思うと、気持が悪くなる。単純な男だったが、去のう、と思った。

そのとき、女武者が、う、う……と呻き声をあげた。

からだを苦しげによじらせた。下半身——下腹部からふとももまで剝きだしたままである。

ムクロジはあわてて、腰布をあわせ、袴をあげ、紐を結んだ。

いままで、こんなことはしたことがない。ふぐりを食べてしまった相手は、むろん死骸だから捨てっ放し。血の臭いと、そして侍従を失ってなんとも恰好のつかぬ陰茎のむざんな姿を目がけて、禿鷹が飛んでくるのがいつものことで、むしろ後始末をしてくれるのを、腹ごなしに石をぶっつけながら見物していたものだ。

袴を脱がせるのはうまいが、穿かせるのは下手だ。これくれい我慢してけれや。乱暴にあつかったせいだろうか、女は眼をあけた。

「そなた……救けてくれたのかえ？」

苦しげに顔をしかめながら言う。

「え？……へ、へえ」と、ムクロジはあわてた。まさか、男と思って股をさぐったとは言えない。

「気がついて好がったわの」

「忝けない、礼をいいます、う……」

痛みが襲ってきたらしい。身をよじった。

傷は左のふとももと、右の肩だった。ふとものほうはさっき目撃している。膝の少し上を、かなり深い槍傷であった。

武田信玄には天下に聞えた長槍隊がいる。まず一突きを入れられて、倒れるところを叩き斬

られたのであろう。槍は突くばかりではない。殴りつけるのも、当時の槍づかいである。千段巻か石突をかえしての一撃なら傷は受けぬが、ふとももを突いた穂先をひきぬくや、一歩退って、薙刀づかいに叩き斬られたにちがいない。

ムクロジは女のふとももに口をつけた。傷口をぺろぺろと舐めた。こんどは血を吸うのが目的ではない。傷口を洗うのだ。そして腰につけた小さな割籠をあけると、味噌が詰めてある。それを指ですくって、傷口にぺったりつけた。なぜ味噌を携帯していたかは後に述べる。

傍の死体の腹帯をほどき引き裂いて繃帯にした。次は肩の傷だ。これは具足を剝がさなければならない。緋縅のみごとなものだ。武田方の贅婪な足軽たちの目を免れたのは幸運というべきだろう。この若武者が、女ざかりの美しい容姿と知ったら、どんな目にあったかしれぬ。

ムクロジは小袖を剝ぎ肌着を脱がした。傷は肩の骨を傷つけている。この傷もふとももと同じく手当てをした。肌着をとったあとの柔肌は、この女に関心のない化物ですらはっとするほどの美しさだった。

まだ二十歳そこそこであろう。娘とは思えないが、ぐったりとなって仰向いた肌の乳房は月に挑むようにつんと盛りあがり、たるみがない。ムクロジは血を舐めたついでに、乳房も舐めてみた。

可愛いい。ほんのりと桃色の乳首はまだ黒味を帯びていない。人妻になって、間がないのであろう。肌の白さが、その色あいと関係があるのだろうか。

ムクロジが乳房に示した関心は、かならずしも性的な衝動ではない。赤ん坊を愛撫するようなものだ。この男、子供が大好きである。ふぐりと血汐の次に。

繃帯をし終えると、

「行くけ？」

と、起こした。

「あ……連れて行っておくれかえ」

「いつまでもここには居れねえ、お天道さまがあがれば、とっ捕まっちまうがの」

ムクロジは女を背負った。

矮軀だが、肩幅は広い。骨組みもがっしりしている。これもふぐり啖いのたまものだろうか。軽々と女を背負って、母衣を背にしたほどにも感じない。

「どっちゃへ行くけ」

「北へ……乾のほうへ」

そして、女はあとは口のなかで呟いた。

（夫もきっと、脱けでたはず……あなた、千世はすぐにお傍へ参りますわ）

だが、武田方もそれほど甘くはなかった。

搦手前の坂から疎林に入り、沢をぬけて、空濠を渡ろうとしたとき、鳴子が音を立てた。ムクロジは一跳した。が、軽いといっても一人背負っているのだ。灌木に足をとられた。

「逃がすな！」

松明を投げたやつがいる。ムクロジの顔を正面からはたいた。わッと、のけぞる足を長槍が殴りつけた。向う脛が折れたかと思った。ムクロジはお千世を背負ったまま、どさりと転った。

「捕った！」

「女じゃあ、女じゃあ！」

足軽たちは、歓乎に似た声をあげて、餓狼のように殺到した。

四

「――ほう、女武者か。勇ましいの」

武田方の足軽大将はもう酒の廻った赭ら顔を平手で撫でながら、にたりとした。髭が濃い。篝火の明りのもとに浮び上ったお千世の姿は勝利者の眼には、眩しいほど美しい。

「巴御前か静御前といいたいところじゃ、さても、村上殿は果報者だったな」

左右をかえり見て笑った。

「どうだ、城は陥ちた、夫も行方知れずとなって、虚しくやもめで生きていてもつまるまい。おれが可愛がってくれようか」

お千世は、烈しい眼で睨みつけていたが、角のついた動作で、つと横をむいた。口をきくのさえ、穢らわしい、という顔だ。

「ふむ、そのように怒ったところも、なんともいえぬわい、おりゃ強い女が好みじゃ」

「……」

「ははは、怒れ、怒れ、その怒った顔がさ、おれに抱かれて、味を知ると、ヨガリ泣きすることじゃて。ははは、北信で豪ノ者といわれた村上義清が若女房をこの手で抱けようとは、甲州を出るときは夢にも思わなんだぞ……」

この葛尾城の侍たちも、この悲運に見舞われようとは、夢にも思わぬことだった。

甲斐の武田晴信、入道して信玄が甲斐一国では満足できずに、信濃へ浸蝕の手を伸してきたのは、十年以上も前からであった。

もっとも応仁の大乱以来、六十余州が乱れ豪族大名たちの争いには、口実があるだけで正も邪もない。領国を守るためには、攻めるに如くはない、のが乱世の常識と言える。攻めなければ攻められる。力が正義であり、強者が歴史を作る。甲斐に興った武田氏は、信玄の父信虎は名前の通り猛虎と称され近隣、ことに信濃では恐れられた猛将で、度々信濃へ攻めこみ、隣接の佐久、小県の両郡は常に苦しめられていたのだが、殊に信玄の代になってから、それに一層拍車がかかった。

地理的に見ても、甲斐は古府中（甲府）を中心に盆地で四辺は山に囲まれ、攻めるに難く守るに易い地形だ。したがって守るよりも、外へ向う力が強くなる。

気候的には寒冷で、人々は剛強、頑迷。武辺者が多く、その鉄騎と槍隊を遮る者は唐天竺よ

り襲来してもおぼつかない、とさえ四辺に恐れられていた。だが、南の東海には強大な今川義元が居り、東――つまり関東には早雲長氏以来の北条氏が数代にわたって勢力を張っている。武田氏が伸びるには、北と西しかない。いずれも信濃である。

信濃も地理的に寒冷痩土で、気質が頑迷にして強靱なのも共通している。違う点は、広さも広いせいもあるが、理屈っぽくてまとまりが悪い。小豪族が蟠居して、それだけに連帯感がうすい。

もともと信濃の豪族といえば、四家があげられる。

村上、小笠原、諏訪、木曾の四豪族である。

信濃攻略の駒を進めるには、二通りの路がある。一は甲府から韮崎、台ヶ原から諏訪に至り、いま一つは韮崎から若神子、平沢をへて海尻、海ノ口を過ぎる――現在の小海線。つまり八ヶ岳を通って小諸へ出る。

信玄は諏訪路をとった。諏訪頼重を攻めるのに謀略をもって一族に内応させ、大軍をもって襲った。頼重には妹を輿入らせて安心させていたのも政略である。

諏訪の領分が武田方に塗りかえられて、恐怖した豪族たちは、連合して当ることになった。小笠原長時と村上義清は手を結んだ。村上のほうは北信だから早急のことではないが、小笠原氏の本拠は深志（今の松本）だから、狼狽した。村上義清を引きずりこんだといってよい。

これが天文十一年のことである。

この緒戦に於て、連合軍の欠点がもろくも露呈し、連合の不備から、村上軍は大敗を喫している。小笠原勢もうち負け、徒らに武田方に気勢をあげさせることになった。

これを手はじめに数年間にわたって甲信の軍勢は火花を散らして戦さに明け暮れた。武田方は着実に一砦を陥し一城をぬき、信濃の豪族たちは侵蝕されてゆく。一城が落ちるということは、一城のマイナスではない。その分だけ勝者にはプラスになってゆくのだからその差は大きい。

武田信玄の風林火山の旗が見えると、信濃勢はおぞ気をふるった。これは現存しているが、長さ一丈八尺（約五メートル）、幅三尺三寸（一メートル）の絹の紺地に金箔で、

疾　如　風　徐　如　林
侵　掠　如　火　不　動　如　山

と認めたものであった。孫子の文章から採ったものである。

さらに諏訪を奪ってからは、諏訪の上社に詣でて武運長久を祈願し、武田家の武神とした。隣邦を攻略してそのくにの武神に祈ったり自分の護り神にするなど、考えてみれば面妖な話だが、こうしたことが不思議でもなんでもなく罷り通ったところに、戦国時代の単純無暴でおおらかな一面がある。

甲斐にも一ノ宮の浅間神社など信虎以来信仰していたのだが、特にこの諏訪神社が上古からの古い武神であった故もあろう。香取や鹿島の神人から剣法の流祖たちが出ているように、武士と神道信仰は切り放せない。信玄は孫子の旗と同じように、ふた流れの旗を作らせた。

南無諏訪南宮法性上下大明神
諏訪南宮上下大明神

と大書した。

これを諏訪神号の旗と呼んだだけでなく、この旗の下の大将たるにふさわしい鎧を明珍に鍛えさせた。天谷山十二筋金星打った兜の前立に満月の白銅板を打ち、旗と同じく諏訪南宮上下大明神と彫った。世に謂う諏訪法性の兜だ。信玄はこれを終生愛用した。

甲斐の猛虎信虎の凛姿に上廻る荒大将の用兵と大明神の加護を信じた甲兵の進撃ぶりは凄まじかった。

伊奈を攻め箕輪城を陥し志賀城を焼き、小笠原の本拠深志城を奪い、武田二十四将の一人馬場信春を守将に置いた。

武田晴信が入道して信玄と号したのはこのころからである。天文十九年、まだ三十歳の壮年だ。薙髪は世をはかなんでの仏心からではない。若年から禅に傾倒していた上に、古来から出家入道は新しく生れ変ることを意味する習慣がある。信玄の入道頭にならって、部将たち、小幡虎盛、真田幸隆など続々と僧形になった。

こうして益々強大なる甲軍の侵掠の炎は村上義清の領地にも当然のびてくる。

数度の戦いのうち村上軍の勝利と呼べるものもある。葛尾城に初めて攻めよせた甲軍を千曲川畔の上田ノ原で迎え撃ったとき、巧妙な用兵で武田の主力を包みこみ、部将の板垣駿河守信

形を討死させている。

深志城を奪われた小笠原長時は村上義清に救いをもとめ再三に渡って逆襲したが、名にし負う鉄騎の前には徒らに傷口を深くするばかりだった。遂に小笠原長時は越後に長尾景虎を頼って走った。後の上杉謙信である。

残るは葛尾城の村上義清ばかりとなった。

むろん村上氏の被官として群少豪族はそれぞれ砦を守っているが、これらはイザとなっては猛強甲軍の前に砂城でしかない。話が戻るが信虎が連戦連勝に砂塵の巻くが如く信濃を蹂躙していたときの記録として妙法寺記があるが、その中に『天文九年五月より武田信虎殿信州へ取り掛られ候。一日三十六城を落したまうと聞く云々』とある。これなど安土城以後の城構えとは大いに異なる。小城というにも及ばぬ、ちょっとした丘に空濠をめぐらし、土を掻き上げ、板塀で囲い丸太の櫓を組んだだけでも、城と呼んだ。今日の常識では砦にすぎないが。

五

お千世は村上氏の支族東条遠江守信広の娘である。

村上氏は武田と同じく遠い祖先は清和源氏だが、代々北信にあって、威をふるっていた。義清の代になっても信州四郡、越後二郡を有していたが、佐久から侵蝕されて、小城が武田に属してしまうと、しだいに勢力範囲が絞られてくる。

他にもまだ、山田・高梨・島津・栗田・落合などが傘下にいるが、いずれも村上氏あってのものだ。この天文二十二年八月、

「葛尾城を陥さずば信濃の経営成り難し」

として、武田信玄は大軍を擁して押し寄せてきた。

すでに砥石城は武田方になった真田幸隆に陥され、上田の虚空蔵山の伊勢崎城、摺鉢山村上氏の出浦城、上山田の荒砥城と、葛尾城の東南西三方の城砦を陥されると、葛尾城は文字通り袋の鼠となって孤立した。

現在の上田市との境界をなす虚空蔵山、摺鉢山の山頂に立つと、葛尾城のあった坂城町が一望のもとに俯瞰される。

この峰々に武田方の長旒大旆がほうはいとして立つのだ。葛尾城内が動顚したのも頷ける。攻防三日にして敗れ、混乱のうちに義清とお千世は離ればなれになってしまったのである。

葛尾城攻略は武田信玄は出馬せず、大旆を預ったのは小諸城代たる小山田備中守昌辰。真田幸隆、高坂弾正が前衛となっていた。焼け残った一室ではこの三将に交って軍師たる山本勘助が絵図を拡げて、軍駒と小旗を配置していた。

絵図は、義清の手文庫の中から出て来たもので、美濃紙を貼り合わせた大形の、畳二帖に及ぶ。淡彩で山、野、川を色わけし、城砦と人数などが書きこんである。

武田方が攻めおとし、あるいは降伏を申し出た砦などを小旗で潰してゆくと、村上氏の所領

の半ばを埋めた。

「長い間、手を焼かしたが、これで、村上氏も終りじゃな」

と、小山田が言った。

「左様、諏訪法性の御威光を知らぬゆえ、こうなる。それがしの諫言を聞き入れざったゆえにのう」

幸隆は同情を寄せているような口吻であったが、これは表面だけだった。勝者のゆとりが言わせた。内心は、ざまあみろ、という気持だ。真田氏は代々信州真田に住み、村上氏の家来筋だったのである。

それが義清に諫言して入れられず、土地を追われた。名流だから牢人しても家ノ子郎党は扈従している。上州辺を彷徨して、暫く箕輪にとどまっていたことがある。そのころ、やはり牢々の身の山本勘助と知りあっている。

いずれ時が来らば功名して大を成そうと語り合った仲である。

山本勘助の出自が明らかでないように、真田も判然としない。寛政重修諸家譜や新井白石の藩翰譜では、清和天皇第五の皇子貞保親王から出ているとか、いや惟彦親王だとか書いているが、大名になってからは系図作りに箔をつけているから信は置けない。

近世の幸隆の父に就いてさえ、寛永に幕府に提出したものでは棟綱とあり、寛政のときの書類には幸義としているほどだ。棟綱と幸義は親子である。そんなあやふやなことでは信用しろ

というほうが無理だ。山本勘助も生きながらえて小大名の一人くらいになっていたら、先祖は清和天皇になっていたろう。

ともあれ、山本勘助の前歴は不明だ。一応三河の出身で祖父は加茂村の加茂神社の神官ということになっているが、その真偽はどうでもよい。長じて諸国を遍歴といえば聞えはよいが、おそらく戦国浮浪児の一人に過ぎまい。乱世が産んだ浮浪児が、飢えに泣きながら、野良犬のように彷徨したにちがいない。

かれが隻眼の上に足が不自由な身で、巧妙に信玄に取入って、軍師にのぼったのも、陰惨な過去と幼児からの生活力のあらわれである。その点では後年の秀吉なども類似している。

生れながらの大名である信玄など、瞞すのは雑作はない。雑草のようにたくましい生活力は、刀槍のワザも身につけさせたろうし、人情の機微にもふれ、人を知って人に溺れず、目的のためには、どこまでも残忍になれる性格につくりあげたにちがいない。

かれの言うところによれば、四国、九州、山陰、山陽を経めぐり、毛利や尼子氏にも仕えたことがあるという。近畿五ヶ国、関東十州は言うまでもない。

諸国を見聞すること半生に及ぶというのはそれだけ城攻めも見、産業の推移も見、殊に方言なども多く知ったということである。山本勘助の場合、軍師とは戦さの用兵だけではなかった。忍者の総帥を兼ねた。

甲州の忍びノ者は、世に謂所《黄金虫(こがねむし)》と呼ばれる。

六

《黄金虫》と奇妙な名が甲斐忍衆に冠せられたのは、戯れではない。

甲斐は金山が多い。いかに武勇あり、兵略にたけても、戦さに軍用金が必要なのは、古今洋の東西を問うまでもなく自明である。

武田の勢力が驚異的に伸長したのには、この黄金の威力が大いにあった。金山には鉱夫がいる。この鉱山業に従事する者が、流れ者が多いのも、その落盤などによる危険なせいもあるが、他の職手に比べて収入がよいからでもある。

命知らずの強者が集る。その中には、他国からの忍びノ者が混っている。忍びノ者ばかりではない。まずたいていの鉱夫が、隙さえあれば、採掘の金をごまかそうとする。これを発見するために、心利いた者を紛れこませたのが最初である。この者たちは、信虎直属の者で宿老ら数人しか知らずひそかに《黄金虫》なる陰語を用いた。これが発祥である。

これらの者はまた他国へ鉱夫として潜入し銀山、銅山などでも細作したりしたが、又、甲斐金山に潜入した他国の忍者を捕えて逆利用したりした。全面的に信じるのではない。逆手もまた忍法であるが、あくまでその得意とする所を利用し、使嗾するに過ぎぬ。

《忍衆》の中核をなしているのは、これらではない。困苦に耐え、坑道の暗闇に馴れて夜目を利かしめて敵地に侵入し、乱波透波(らっぱすっぱ)、反問細作に活躍する。

これらの《黄金虫》たちが、伊賀や甲賀の忍びノ者のワザをおのれのものとし、甲州忍法を確立するに至ったのは、さして古い昔ではない。

諸国の忍者たちの間で、

《甲斐の檜猿(ひきざる)》

なる言葉が畏怖をもって囁かれるようになったのは、近々十年を出でぬ。

山本勘助が瓢然と古府中にあらわれ、板垣信形の推輓を得て武田家に仕えるようになったのは、天文十三年である。

《甲斐忍衆黄金虫》がその活躍目ざましくなったのは、この一、二年後だから、明らかに山本勘助の組織力とその博識調略の妙が生かされたことは疑いをいれない。

いまも北信の絵図を拡げて、灯を集め、まじまじと見ていた。

「なるほどな、細かく描いてあるわ、わしの調べたものより数段とよい」

「ははは、それは当然じゃよ、軍師」と、幸隆が応(こた)えた。「地元じゃ。いかにおぬしの細作の目がすぐれていようとも、地元にはかなわぬわさ」

「それではならぬ」勘助は隻眼をむけて、「忍びノ目たる者、土地者とひとしき目を持たずば、御役をつとめたとは申せぬ……」

そう言ったとき、ことり、と音がした。

はっと勘助が顔をあげた。隻眼が光った。

音は一度きりである。他の者には聞えなかった。勘助は急にあくびをした。

「何やら眠うなったわい。軍議はこれくらいにして眠るといたしましょうかな」

「左様。明朝は辰ノ下刻」

「屋代辺の地豪どもはわれらを見ただけで尻尾を巻いて逃げようが、尼飾城(あまかざり)は、ちと手強いやもしれませぬぞ」

三将がそれぞれの持場を引き上げたあと、勘助は絵図を折りたたむと荒莚の上にごろりと横になった。

灯をほそめにきた郎党に、

「夜七を呼べ」

顎をしゃくった。

ほどなく入ってきたのは小具足に身を固めた五十がらみの男である。片腕がない。勘助が絵図面を経机の上に置いて振りかえってみると、柱の蔭にうずくまっていた。

足音も立てぬ。ひそりと影のように入ってきていた。

「……」

勘助はこれを咎めようとせず、何か言った。饒舌ったのである。声は洩れぬ。急に声を失ったようであった。唇だけが動いている。声を失ったのではなく、唇だけで語っているのだ。

「……」

夜七も答えぬ。

その下三白の黄色い眼は、凝っと唇を読んでいる。夜七こそ《黄金虫》十人衆の一人。ワザ者だ。片手で泳ぎ、いかにきり立った断崖も石崖も容易に攀じる。

勘助の言葉を読み終えると、黙然としたまま拝揖した。坐ったまま、すっと背後に滑るように退った。そのまま暗い蔭に消えるように去った。

命令を伝えると、勘助は安堵したように、肩で息をして、隻眼を閉じた。長い間の懸案であった北信の八分通りを収めたのだ。一段階終えたような気持である。

（村上義清を討ち漏らしたのだけが、残念であったわい……）

それを思うと、眠れなかった。

からだは綿のように疲れている。どっと疲労が出たようである。そのくせ頭は冴えて眼の奥が痛い。

（来るか？……）

微かな期待と、それがもたらす昂奮に似た感情が、睡魔を妨げているのかもしれなかった。

（たしかに、忍びノ者……たしかだ）

さっきの音を思いだそうとした。音とも言えない音である。その音は天井でした。

（聞き違いではない……たしかに、天井に居た！　鼠ではない）

昂ぶった神経が、ただの鼠でも走った音を怪しいと感じたのだろうか。攻め落された城内に

忍びノ者がひそんでいるなどとは、まず考えられないことである。かれの輩下の黄金虫ではない。黄金虫なら主人の頭上は歩かぬ。

（とすれば、やはり、村上の残党か？　いや、あるいは……越後のかまいたち!!）

七

越後の忍衆を〝かまいたち〟と呼称する所以は後に説く。

いま。

壁に沿って影が行く。

その影は、あるいはそれか。影は闇から闇へ走り、月の光りをさけた。篝火が火ノ粉を飛ばし、地上の闇を払っている。

足軽たちはまだ起きている者もいた。酒を飲んでいるやつ、博奕を打っているやつ。さては昼間の傷が痛み出して呻いているやつ。

「おい、いつまで呻いて居る。うるさいぞ」

「う、うるさいと申しても、たまらぬ。う、うッ、痛う！」

「ちえっ、誰かこいつの口に馬糞でも突っこんでやれ、うるさくてかなわん。それまた負けたではないか」

戦場に博奕はつきものだ。劫掠がつきもののように。金銀銅――貨幣はいうまでもないが、

それも死人の肌付金から、引き剝いだ具足、大小、何でも賭ける。

暗がりでは、逃げおくれた女たち、城中の女から城下、郊外の村々の娘、人妻を手あたり次第にひっ攫って来て、勝者の愉悦を味わっている。それらの悲鳴や、泣き声や、なかには嬉しげな嬌声をあげ、ヨガリ泣きする後家などもいる。

そうした声もまた戦勝の夜を彩るには欠くべからざるものだ。

この乱痴気騒ぎの中に入ると、影は平然と歩いた。誰も見咎める者はいない。小具足をまとい、陣笠をかむって手槍を持っている。

雑兵の群れをぬけて、物蔭へ入った。そこにも一組み、うごめく影を見たからである。

「どうだ、ほれ、好い気持であろう」

女を抱いた雑兵は布子姿であった。その汚れた襟から汗臭い匂いがたちのぼっている。

「おりゃ、この戦さで兜首を三つもとったぞ、おい、どうだ」

「は、はい……」

「どうじゃ、こんな豪ノ者に抱かれて果報であろうが、それ、それ、それ」

女もほとんど半裸になっていた。いや、させられているのだ。若い娘だ。城者であろう。逃げ遅れて捕まったのであろう。雑兵はこれほどな女は、生れて始めて抱くのであろうか、我を忘れてうつつになっている。

「おい……」

肩を叩いた者がある。

「なんじゃ、うるせい」

「おい、呼んでいるぞ」

「うるせい……ヘッ、誰が呼んでいると？　小頭か」

渋々と身を起こした。

「おれさ……」

影は言った。

「なに！」

ぎょっと目を瞠った雑兵の顔は次の瞬間、あ……と仰天したまま動かなくなった。叫ぼうとする口中に鋭利な刃物が突き刺さり、襟くびに切尖が抜けた。

仰むけになったまま、腕も腹も剝きだしにされて、ぐたりとなっていた女は、腹の上にぴちゃりと生温い血がおちて、ひえっと、声をあげた。

「仇を討ってやった」その影は言った。

「……」

「その代り、というのはおかしいが、その小袖、借りる」

「え？……」

まだ、うつつと現実の区別がつかないようだ。さんざんに凌辱されても、悲しい女の性はそ

れなりに、陶酔があったのだろうか。下腹部の痛みと、全身を弛緩させた快感とは、女を呆然とさせている。

「脱げ」時間が惜しそうに、影は言った、「小袖を借りる」

女は下ぶくれの、ちょっと愛らしい顔をしている。男には馴れていない。あったとしても二、三度のことであろう。それを敗戦と不安と恐怖の中に、雑兵に散々乱暴に扱われて、怒る気力もなくなっている。むしろ飽くなき男に弄ばれて、まるで、そのためだけに生れてきたような、とろりとした眼つき、半びらきの唇——ひどく淫靡な表情、姿体だった。

影は無言で、しかし、手は荒々しく、帯を解きにかかっている。雑兵は女の帯も解かず前をはだけて裾をおしひらいて、おのれを入れていたのである。

小袖にはいい匂いがした。若い女の柔肌と淫らな体液の匂いがまじって、夜気のなかに漂っている。むろん、それを愉しむのではない。影は帯をとくと、小袖を脱がせ、中着を脱がせ、襦袢までひき剝いだ。いや、腹布までだ。

「寒い……」

抗いもせず、女は全裸をちぢめた。

「寒くないようにしてやる」

影は引き寄せ、抱きすくめた。唇をあわせる。舌がからんだ。何が口から口へ移されたのか。女はそのまま、崩れた。気を失っている。秋風の夜陰にも寒気を意識せずに済むだろう。

影は、襦袢をつけ、腰のものを巻きつけ、素早く女装してゆく。速い。まるで、おのれの小袖に袖を通すように馴れている。前を合わせ、腰骨のあたりに帯をしめる。きゅきゅっと締めて、手を元結いにやったと思うと、ぱらりと髪が垂れた。たちまち、女の姿が出来上った。

そのころ——

足軽大将の柏原運平は盃を捨て、お千世の縄に手をかけていた。

忍法皮つるみ

一

酔いのために、とろんとした眼には、縛られた女の姿というのは、一種異様に艶めいて見える。

ムクロジが応急に手当てをしたのも、雑兵らと揉みあったときに繃帯がゆるみ、傷口がひらいて血がにじみ出ている。その上から容赦なく縄をかけているのだ。縄は二の腕に食いこみ、故意のように乳房の上下を締めつけ、眩しいばかりにふくらみを強調している。襟もはだけて、その隆起は半ばが露わだった。

運平は盃を置いて、藁座から腰をあげた。

「いい肌だ……」

と、手をのばした。

「けがらわしい！」

お千世は柳眉をしかめ、身をよじって、手をさけようとしたが、横坐りになったままでは、のけぞるくらいが関の山だった。

無骨な手はふくらみをさわった。露わな玉の肌である。肌理のこまかな乳白色の肌は荒々しい武辺者の食指をそそらずにいない。

「何を拒む？　男が女を可愛がってくれようというのに、嫌がることがあるか」

「無礼な！」

きりりっと目尻が吊り上った。

「お下り！　雑兵輩が……」

「何じゃと！　この女っちょが」

雑兵呼ばわりされたことが、この蛮勇の甲州武士にはよほどかんにさわったらしい。革足袋でどしんと床を踏み叩いた。

「柏原運平は足軽大将じゃぞ！　曳かれ者めが、女の分際で、よくも嘲弄しおる」

「足軽大将なれば、それらしゅう、お振舞なされませ」

と、お千世はひるまない。

どうせ、捕われの身だ。磔刑か打首は覚悟している。夫義清に逢えぬなら死んだがましだと思っていた。できる限り、葛尾城の奥方として誇りを持って死に臨みたいと思った。

「女子の身を、深傷を負うている身を、このように縄を掛けるさえあるに、悪口雑言とは武田家の足軽大将のなされようとも思いませぬ。青銭一緡貰うての陣場稼ぎの牢人衆、たかだかそのようなお顔でございます」

言葉半ばに、唇には軽侮の嗤いさえ浮べての言葉であった。

運平は唸った。次の瞬間、その巨きな手は刀に走るかと思われたが、その気配もなく、まじまじとお千世を見、目尻がやわやわとたるんでくるではないか。

「なるほどのう、聞きしにまさる村上義清が御内室だ。こりゃ、いよいよ、わしは果報者じゃて、なんと好い肌をしていることよのう」

髭面を差しのべて、くんくん甘肌の香りを嗅ぎ、そのしっとりと潤んで白い皮膚に、しきりとくっつけようとする。

お千世はぱっと立ち上った。が、縄尻は足軽が握っている。反射的に引かれて、どさっと転がった。

「手荒にするな」憐れむような口調で、「この傷口が見えんのか」

気丈な女の歯をくいしばった無念の形相もまた心をそそるのだ。昼間の戦いと血と泥にまみれた顔を拭かせたとき、まるで里芋の皮でも剝くように、目醒めるような白い肌があらわれて、

運平は唸ってしまったのだ。

軍師にも、主君小山田備中守にも報告しなかったのは、その美しさに触れずに渡してしまうことが惜しくなったからである。

にやりと髭面が弛んだ。淫らな光りをたたえた眼が舐めるようにお千世の肌を這う。胸から胴のくびれ、腰、ふとももへ——

ぐびりと咽喉が鳴った。同じように足軽も生唾をのみこんだ。かれらの表情も尋常ではない。その目つきは、飢えた獣のように眼を血走らせ、欲情に生臭い息を洩らしている。急に運平はこの連中の眼に曝しておくのさえ惜しい気がした。

（おれひとりのものだ……一晩中、可愛がってやる。軍師には明朝報告すればよい。義清の御寮人だとは気がつかなかったと、言えばよいのだ。そうだ、それがよい、武者姿だったのだからな……つまり、おれがこの肌を嬲って、悶えさせた後に女のほうで身分を明かしたということにする。ふふふふ、一石二鳥というわけじゃ……）

運平はもう待てなくなってきた。

「汝らは去ね」

憎々しげに顎をしゃくった。足軽たちがいまにもお千世の肌にむしゃぶりつきそうな様子に憎しみを感じたのだ。

「へい……その……」

「何を愚図愚図しておる」

「その、できることなら」と、二人は顔を見合わせて、以心伝心の疼きを確かめあった。

「お流れを頂戴したいので……」

「たわけ！」くわッと怒りが噴き上って、「汝らには勿体ないわい。これほどの玉の肌を、汝らのようなどぶ鼠に触れさせてたまろうかい。そこらで、がったい女でも抱いてけつかれ」

大喝を喰って、足軽二人は倉皇と立った。

ここは糒蔵（ほしいぐら）だから、文字通り鼠が走りまわっている。それだけに運平が夜の白むまで、お千世の肌をどう扱おうと、のぞき見される心配はない。

外に出た二人が、

「くそ！　いめいめしいの」

「ひとり占めしおって、ちょッ、同じ人間なら足軽大将になれ、か……」

語尾を呑んだ。

暗がりに何やら白いものが見える。

「あれは……女じゃ」

女の白い小袖姿。どうせ、誰かが弄んだあとであろう。が、飢えたかれらには恰好な相手だ。

「おれが先に見つけたのじゃ、悪いが先にイタダきだぞ」

「ちえっ、仕様がねいわい。早く済ませろやい」

「鶏ではないからな。まあ、あせらずに待っちょれやい、ふふふふ、やっとこれで眠れる
て」
にたにたしながら樹の蔭へ入っていった男は、やにわに女を抱きすくめた。刹那、声もなく四肢が萎え、ずるずるとその場に崩れた。
暗い木蔭だし、篝火の明りもとどかぬ。が、こちらに待っている方では、気になっていたから、その異様な感じはわかったのである。
「おい、どうした?……」
同僚の名を呼んだ。
「……」
はっきりとは聞えぬ。が、何か応えた。
「何だというのだ」
女体はすでにひらいたか。近づくのは憚かられた。ド突かれてはたまらぬ。
「おい、どうした、女がいやだと言っているのか」
それなら、おれが代るぜ、と言う心算であろう。
「来てくれ……」
木の蔭の返事はそう聞えた。
「いいのか?」

のこのこと近づいた胸がときめいている。あいつ、凋んで役立たぬのかもしれぬ。近ごろ悪い酒を飲み過ぎておるでの、先に譲るというのであろ。頬の筋が弛んでくるのを撫でまわしながら近づいた。むしろこの男、倖せというべきかもしれぬ。その期待は裏切られることがなかった。なぜなら、その幸福感が消されないうちに、かれの心ノ臓は動きを熄めていたのである。殆ど一瞬といってよかった。かれ自身、何がどうなったか、理解するひまもなく、おそらく痛みも感じなかったろう。一分の狂いもなく、心臓の弁膜をその鋭利な刃物は貫ぬいていた。
女は——いや、女装した〈影〉はすっと引き抜いている。夜目の判く者がいても、それが何であるかはわからなかったろう。
鎧通しではない。錐のような細さ、五寸釘に似ている。いや、針なのだ。伊賀か甲賀の忍びノ者にはわかる。忍具十種之内、《シラズ》血を知らぬ、血知らずの意であろう。そのほそさの故に、出血は少なく、殆ど血を見ることがない。

二

足軽二人が、あざやかなまでに木蔭で息の音を止められたのを誰も知らぬ。柏原運平は、お千世の縄を解きにかかっていた。
「ははは、いやがるな、おれはこう見えても、女には優しい男だぞ、おれに抱かれた女で、怨むやつなどひとりも居らぬ」

「無礼な！　お放し」

「まだわからぬか。怨む女は居らんと申しておる。かえって悦んどるわい。そなたもすぐによくしてやるぞ。義清と比べてみるがよいわさ」

自慢であろうか、運平は前をさぐりながら立った。お千世の前で仁王立ちになった。かなり酒が入っている。よろよろとなりながら両足を踏んばろうとしている。

「見せてくれよう、男はな、男の価いは、これできまるものじゃ、さ、目を開けろやい」

袴の紐に手をかけていた。

お千世は目を伏せた。縄はゆるんでいた。じりじりと退りながらほどこうとしている。

運平は焦った。足がすべり、どさっと倒れた。その拍子に燭が倒れた。入口の近くにあったものである。急にうす暗くなったなかで運平はよろよろと立ち上っている。

かれは酔った、と思った。酔いのために、昏く感じられるのだと思った。

「やい、誰か、灯を……」返事はない。運平はそのとき、夜気に何か異様な匂いが流れこんできたような気がした。

（何の匂いか？）

糖蔵だから、五穀を貯蔵するばかりでない。干魚なども蔵っていたらしい。それらの臭いがいりまじって、壁や天井にしみこんでいる。

その臭気を吹き払うように、さわやかな匂いが吹きこんできたのだ。

運平の鼻先にたゆたい、かれをとらえた。

さわやかというには、少し強烈だったようである。一口に言って、何かの花の匂い——栗の花か、梔子の花の、陽にむれたような、性的なものであった。酒に痺れた頭には、それは妖しい蠱惑を秘めて運平をとりまき、とりこめ、うつつにしてゆくのだ。

燭が一つ消え、残った一つの淡い明りのなかで、お千世がうごめいているのが見える。

目の前に霞がかかったようであった。目が霞んだのか、濃い霧に包みこまれたのか、運平には前後のことはわからなくなっていた。

ただ、その強烈なまでに情慾的な匂いにそそのかされて袴をおろしている。お千世のおぼろに見える姿態が、いうばかり嬌めかしく運平の手はあさましく動きはじめていた。

「さ、見るがよい。義清とどっちゃが大きいか、ははは、これほどの品物はざらにあるまいぞ、ほれ、見よ、見よ」

仁王立ちになって、お千世の目に見せようとつまみ出してしまった。

お千世は、笑ったようである。そう見えた。

妖しい匂いにくるまれて運平にはもはや、何をしているのかさえ、意識にはなかったろう。その愚かな行為をさせているのが、心気を囚えた匂いだとは、むろん知らぬ。運平はさながら妖雲のなかで弄ばれているようなものであった。

妖雲をなす淫気は、どこから流れてくるのか。おぼろなお千世の顔が笑うごとに、その匂い

は濃くなり、運平を狂わせてゆく。

運平の手は、さながら誰かに命じられたかのように、動きをやめぬ。女に飢えた囚獄での行為か、十戒に縛られた沙門のそれか。

怒漲した陰茎は、熱を帯び真赤に灼けた棒状となって、この足軽大将の股間に屹立していた。運平のどろんと濁った眼のなかに、お千世の美しい姿態がある。

かれの手ははげしく動いている。自由を奪われた美女と二人きりの糒蔵で、自らを慰める愚しさも、その意識にはないのだ。自慢の逸物を誇ろうとしたことは、否めない。客観的には普通のそれも、本人には巨大に思えるのか。自慢したい気持には露出症的なものもある。

が、見せる、という行為には、村上義清の若妻の心を惹こうという工作の意味があったのも また事実である。尠くとも、半裸の美女を前にして、愚行を演じる気持は、この勝利に酔う足軽大将にはなかったはずだ。

おのれの肉体を夜気のなかに曝したとき、妖気が漂よってきている。淫風といってもよい。淫らで悩ましい栗の花の匂いが、かれの手を動かしめていたのだ。

たけりにたけって熱した局部は、それ以上膨張すれば血を噴くかと思われるばかりに醜毛の葎のように群れ生えた逞しい両腿のつけねにそびえ、男の誇りに応えんとしていた。

手は動き、速度をあげる。さながら、いま将に発射されんとする南蛮渡来の大筒でもあるかのように。

お千世は——いやその姿が、すでにお千世ではないことは、賢明な読者は気がついていよう。然り、あの〈影〉が変化したところの〝お千世〟にすぎない。

いわば虚。

忍法の虚像にすぎぬ。〈影〉は影となり、運平のどろりとした眼の中で、不思議な通力をさえ持った。いましも、しきりに手を前後させ、上下させて昂奮の極に辿りつかんとするさまも、嘲けりと蔑すみで見まもりつつ、

〈熄まぬ……〉

と、洩らした。

その声は、運平に聞える。いや運平の心に映じ、手に命じた、と言ってよかった。一弾指の後に、せきあぐるような呻きに運平の唇はふるえ、体液が宙におどった。

三

白濁の液体が勢いよく淫ノ気のうちに奔出するのを、〈影〉のお千世は、凝っと妖眼を据えて見まもっている。

その唇は動くともなく動き、声ともいえぬ声が洩れている。風の吹くような、木の洞に籠るような、異様な声である。その声は、ほそい一条の気息となって、運平の耳に入る。いや、それは犯し難い命令であった。

〈熄めるでないぞ、熄めるでないぞ……〉

その声に操られて、運平の手は止まらない。

怒張と熱棍は依然としてつづいている。すでに一度び噴いた亀頭は、濡れたまま、てらてらと輝やき、はげしい手の動きに応えて、さらなる情念のもとに、いきりたっていた。

妖異というしかないこの有様は、他の目がないからこそ在り得るのであろうか。運平の表情は恍惚に弛緩し、血風の中に獅子吼し、砂塵を蹴立てて大太刀を振りまわし城兵を斬りまくった大将とも思えぬ。

愚かしい痴呆の髭男というしかなかった。

〈熄めまいぞ、熄めまいぞ〉

風声はかれを囚え、その手に命じる。

〈極楽じゃ、極楽じゃ……〉

情意ふたたび昂揚し、二度目の射精があった。が、なおも、手は鎮まらぬ。もはや、その手は、運平の五体の部分ではないかの如くであった。別の手が、背後から前へまわされて、熱して濡れた肉茎を支配しているとしか見えぬ。

やがて三度び、いのちが奔った。

ぐらりと、仁王立ちのからだが揺れた。雄牛の唸りとともに、腰がぶるぶる顫え、濡れた肉を三度び濡らした。

だが、なお、熄めぬ。〈影〉の風声は休息をさえ許さぬ。手は前と変らぬ速度で動いている。不思議なのは、冷めるを知らぬ陰茎である。

三度も洩らしてなおも、赫炎たるさまを誇っているのは、もはや永遠に軟体に戻ることがないのか。

〝お千世〟と変化した〈影〉は、濡れるほどに滑らかさを増して、ますます烈しく行う運平を見守りながら、

〈ふふふふ、熄めるなよ、死ぬまでつづけるのじゃ、よくぞ罹ったわい、それそれ、それそれ、四度目！〉

風声に誘われるが如く、またもや白いものが噴き出た。明らかに、その量は減っている。あたかも、おのれの体内の血液のすべてをその一点に凝集し、白濁せしめて噴き出す。喜悦に憑かれているようであった。まことに罹った。恐るべき忍法である。この巨軀の血の一滴まで自ら放出し終るまでその動作は熄むまい。

〈ふふふふ、これぞ忍法《皮つるみ》こそぐがよい。出すがよい、まだ出るぞまだ出るぞ〉

さてはこの奇怪な忍法をなすは伊賀者か。

伊賀忍法《皮つるみ》は、甲賀にもある。殆ど等しいが、これを《濁酒倒し》と称う。甲賀忍者を育んだ恩人と伝えられる佐々木道誉の手記に、

《――濁酒一升、ソノ止ル処ヲ知ラズ、快ヲ識リ彩雲ニ遊ビ、甚ダ虚トナリ、仆レテ後熄ム

……》と。

この文章だけでは、判然としない。古来忍びノ者の記す所、他に膾炙されることを畏れて、故意に主語を省く。この濁酒と称するもの、白濁にして精液を意味すること、改めて言うまでもない。止るところを知らぬ射精が急性の甚虚羸眊を招き、あたかも牡蠣の夏日に萎むが如くになって死ぬという。

武田方の宿将小山田備中麾下にあって蛮勇を謳われた足軽大将柏原運平が、いま将にその道を辿っていた。

〈ふふふふ、夜明けまでは間がある。存分に扱くがよいわさ……〉

五度目の排泄をせっせと励んでいるのを尻目に〝お千世〟の虚像はお千世を促すようにして、糟蔵から出た。

もはや聾眊の身となった運平の瞼には、お千世の虚影が残像を灼きつけていて、仆れるまで消えることはないのである。

そのころ——

山本勘助はまだ眠れずにいた。心気が昂ぶっている。かれが甲斐忍衆《黄金虫》の総帥であることは、前に述べた。無声によって輩下の黄金虫十人衆の一人たる夜七に伝えたことは、天井に潜んだ〝怪しの鼠〟を捕えよというのである。

その鼠は、とっくに抜け出て、お千世を救け出していることを、知る由もない。

こうして見れば、この伊賀者が、先刻、ムクロジを驚ろかした〈声〉であることに読者は気がつくだろう。だが、かれの目的はどこにあるのか。村上義清は忍者嫌いで、一度も使ったことはない。重臣がその必要性を説くのを、

「化性の者を用いるほど落魄してはおらぬ」

恬として肯じなかった。

村上義清には名流の誇りがある。かれもまた清和源氏を称しているが、これは鎮守府将軍河内守頼信からといい頼信の二男頼清村上源氏憲定の養子となって以来、村上氏を名乗ったというに始まる。

頼清の子仲宗に惟清、顕清、仲清の三子あり、惟清の養子盛清（実は仲清の子）が罪を得て信濃に配流され、更級郡村上郷に住んだ。盛清九世の孫義国、安曇郡の豪族仁科等と南朝に屈し、征夷大将軍宗良親王を奉じて王事に勤め、元中元年始めて居を埴科郡坂城郷に移し、城を築いた、というのが、葛尾城の由来であり、村上氏の先祖のあらましである。

真田氏よりも信がおけるし、その名流の末裔という誇りが、落城を招いたといえる。忍びノ者を魔性と嫌い夜盗の類いと忌んではこの時代におくれをとることは明らかだ。また一本気で権謀術数に弱い。

後に述べるが、剛直清廉をうたわれる上杉謙信でさえ、夜盗を捕えては忍びノ者として使っているのである。

話がそれたが、ではこの妖異の伊賀者を使うのは誰であろうか。暫く、先を急ごう。

異変が起ったのは山本勘助の寝所である。ぶすぶすと燻りつづける厩のわきから、その影は走り出た。闇に消され、闇に呑まれて、影は屋形に近づいた。

甲斐忍衆は何人いるのか、影がそれと見たのは、塀の上に貼りついた黒いものだ。影と影が闘うとき、どちらが先に発見するかが、死命を制する。

塀の上に貼りついた男は、この城内のことには通じていた。本隊が深志に立ち寄り、北上したころから、城内に忍び込んでいた。

いまも、塀の上から、猫目を光らして怪しい影を見つけ出そうとしている。

篝火が燃え、女に戯れる男たちの姿、酒に足をとられて蹌踉と歩いている者。高歌放吟したり、博奕から喧嘩が始まったり、それらのなかから、怪しい素振りを発見することは容易ではない。

ひゅッ

口笛が聞えた。合図だった。夜七の姿が虎口のあたりに見えた。手を振っている。振り方で話が出来る。こちらでも応えた。夜七は意を伝えると、また闇に沈んだ。

次の瞬間である。塀の上に平蛛蜘のように伏せたまま、

「う……」

四肢がびりびりっと顫え、背に重くのしかかられたように、はね起きようとしていたが、や

がて、そのまま、動かなくなった。

〈——黄金虫、一匹……〉

陰湿な笑いが低く、塀の上を這った。

四

それから百を数えぬうちに夜七も目くらましにかかっている。夜七のからだには深傷浅傷あわせ三十幾つの刀痕がある。鉱夫上りの《黄金虫》で、これまでも、多くの城攻めにそのワザをふるっている。かれが山本勘助の信頼を得ているのは、共通の秘密を一つ持っているからであった。

前に述べた上田ノ原の合戦は五年前のことだが、この戦さで板垣駿河守信形が討死したのは、第一戦をうち破り、勢いに乗って追撃に移ったからだと言われている。

村上勢は逃げると見せて、後備えの須田、小田切などの諸隊が包みこむ態勢になって逆襲して来たからであった。その事は伝えられる通りだ。板垣隊は散々になった。半数ほどはこのとき討死している。が、信形は退却できたはずであった。

「退け、退け」

信形は采配を振って馬首を返した。敵の矢が雨のように降ってき、馬は恐怖したように棒立ちになった。信形は老境ではあったが、戦場往来の強者である。馬の馭し方は馴れている。如

何なる場合でも落馬することはない。それがもんどり打って転落したのは、鞍が馬の背から滑り落ちたからだ。転落した信形には村上勢が殺到した。

鞍の腹帯に傷をつけておいたのは、夜七である。

山本勘助の命を受けてのことは言うまでもない。なぜなら腹帯の切れ口は戦後に調べると裏側から切られており、戦闘のあいだに、敵の刃が触れたのでないことは明らかだった。

夜七の口は固かったし、山本勘助を疑う者は一人もいなかった。なぜなら、勘助は信形の推挙で信玄に仕官が出来たからである。

その、いわば恩人である信形を暗殺したのは、信形が勘助の秘密を知ったからにほかならぬ。夜七は甲斐の忍衆ではあるが、また勘助の輩下でもある。夜七は若年のころ女を殺した。罪囚として金山に一生土竜であらねばならなかったのを、勘助に素質を認められて忍びの修業をするようになったのである。

阪東武士は古来、主あるを知って、主に主あるを知らぬという。夜七は武士ではなかったが阪東者である。義を知る。夜七という名も《黄金虫》十人衆の一人に加えられての名前である。かれにとって、勘助の命令は絶対であり、他にかえり見ることがなかった。

その夜七。

怪しの影を見張る眼は、闇に馴れ、何物をも見逃さぬ。が、かれには一つの疑問があった。

（義清は忍びを使わぬというのに……）

忍者が入っているなど、考えられぬ。もはや使いものにならぬほど半焼している。あとは真田幸隆が支城にするだろう。

（越後の忍び……かまいたちか？）

義清と前に同盟した小笠原長時が、越後春日山城に走って旧領奪還の与力を頼みこんでいるのは、筒抜けになっている。

勘助が憂慮していたのは、そのことによって長尾景虎（後の上杉謙信）が、どう出るか、出陣はもはや時間の問題だった。

その動向を適確に把握せねばならなかった。

もしも近々に出陣してくるなら、当然、諜報の細作は多数送りこまれている。

勘助にしても、夜七にしても、第三の忍びなど考えられなかったのである。

勘助が絵図面を故意に経机の上に放置したのも、つまりは、罠であった。

（入っているとすれば、何人か？）夜七は用心深く、一木一草のそよぎをも見逃すまいとして、五官を働かせていた。

（一人でも、捕えさえすれば、吐かせてやる）

その夜七の眼に、するするっと、壁際を走る影が見えた。

（鼠？）

見た。が、動かぬ。

忍法にあっては、目くらましに鼠や蛇など用いるのは珍らしくない。蛙や蜥蜴もよく使われる。夜七が見て、動かなかったのは、それと察したからである。

かれの夜目は、あらぬ方に向けられた。

鼠を虚とすれば、実体は別の方角にある。兵法に《矢切り》のワザがあり、忍法には、《弓切り》のワザがある。矢切りとは飛来する矢を、如何なる続け矢でも切り払い、打ち落し、身に一創をも受けぬことである。

忍法の謂う弓切りは、矢を飛ばした者を、それを撃つ。弓切りの前に、《矢取り》のワザがある。これは飛来する矢を、摑む。片手で摑むと同時に、その向きによって矢筈の方角射手の隠れ場を見つけて手裡剣を飛ばすのだ。失敗したと思って第二の矢をつがえる。その引き絞った弓を目がけて手裡剣は走り、弦を切断するのである。これを弓切りと称う。

兵法の場合、消極的だが、忍法は積極的に大本を撃つ。戦闘力を奪うのである。

いま。

夜七が、あらぬ方向を見たのは、これにひとしい。

鼠を化姿であり、〝虚〟と見たとき、これを放った影を探したのである。

（居た！）

夜七は走った。いや、跳ねた、というほうがいい、五間のかなた、鼠を放った影を見た。

飛びかかりざまに忍び刀を抜き放ったのは夜七にしては卒爾であった。かれの足が、二転して、大地につきざまに拝み討ちに斬りおろした刃が、虚しく黒い影を切ったとき、

（敗れた）

瞬間に感じた。

〝虚〟の〝虚〟といえる。裏を衝いたつもりが、もう一つ裏があった。その影は紫蘇染めの黒衣だけ。忍び刀は滑稽にもこれを切り、かえって衣に刃を巻きこまれている。

（しまった！）

身を立てなおそうとするひまはなかった。大地におりた瞬間、かれの両足は、きりりッと縄に締められた。罠——両足が宙におどった。夜七は両足が天に冲するように、引っ張られた瞬間、脳震盪をおこして失神している。

縄は屋上から引き絞られたのである。完全に逆さ吊りにされて、大きく揺れたとき、もう夜七は呼吸をしていなかった。

呼気を知るに狎れた忍びには、夜七の意識が失われたことを察知できる。

夜七を、まるで酔い潰れた足軽かのように叢へ寝かせたあと、この不敵な〈影〉は山本勘助の寝所へするりと忍び入っていた。

五

勘助は、絵図面が気になっていた。

（ひっかかるかな？）

罠を仕掛けて、鼠が近づくのを待つ気持だ。

（思う通り、北越忍者かまいたちならば、この絵図が欲しいはず……）

長尾景虎とても、隣国の様子は気にかかっていよう。武田の勢力範囲が、そこまで伸びてくることに虚心ではいられない。必ず出てくる。村上家の所領が、北越の蛟竜との一大決戦の場になることは、誰の目にも予測できる。

決戦場となれば、いやが上にも精緻な絵図面が必要となる。山の高低、丘の有無、森林耕地の段落小溝までも作戦用兵にはおろそかにできないし、敵がそれを利用することも等閑に附せないのである。小溝だけでも、伏勢に使える。川の深さ、広さはいうまでもない。

（どんな奴か？）

おそらく大胆不敵な忍者。

（使えるじゃろうが……）

と、もう勘助は、捕えた上で説得して輩下にすることを考えている。口説きおとすことなら自信がある。伊賀者なら伊賀の方言をつかう。越後のかまいたちなら、囲炉裡をかこんでの親しみの方言で気を柔らげる。たいてい失敗はない。

この勘助が、裸にさせられたのは、笑止なことであった。

虚を衝かれた。かれには、安心がある。

《黄金虫》を信頼している。そのワザを信じている。そこに抜かりがあった。

勘助は張りつめた神経に眼が冴えて、薬湯を飲んだ。生姜湯である。

この異相の軍師、酒は飲まぬ。酒は五官を麻痺し、心気を昂らせ、適確な判断を誤らせる、と信じている。かれのめぐまれない半生は焦慮の連続であった。寛いで酒に浸るだけの余裕がなかった。出世の願望が、かれを酒から遠ざけ、今の身分になっても、親しむことがなかったといえる。

したがって、常にひね生姜。持参している。生姜湯は心身ともに爽かとなり、頭脳のために良いと信じている。その湯の中に、異物が混じられているのを知らぬ。

（妙に咽喉がかわく）

そう思ったときは、もうかかっている。

軀の芯から妙に熱くなってきた。本来ならそこで気づく。ただの生姜湯でも発汗作用はあるが、異常な熱さになった。すでに季節は初秋。北信濃の高原の夜だ。夜気は涼しすぎるくらいだ。にも関らず、熱い。

勘助は衾を剝いだ。具足を脱いだ。鎖帷子を脱ぎ筒袖の鎧下を脱いだ。それでも暑い。

（どうしたことだ？）

異様、と感じなかったのは、

（夜七どもが固めているのだ）

その安心感があまりに強かったからである。

生姜湯の中に混ぜられたのは、何か。ただの湯や水では臭いがあったはずだ。生姜はその臭いを消してしまう。忍法には《色合せ》ということがある。秘薬を投ずるときのみではない。相手の嗜好、習慣に合わせて術を掛ける。そこには既に、虚がある。おのれの行動半径が、習慣や好みで支えられていることには安心感がある。それが〝虚〟となる。

越前の朝倉家に鬼作左の異名がある菅作左衛門という男がいた。刺殺の任を帯びた伊賀者が終日、つけ狙ったが隙がない。戦場でも帰路でも隙がない。凱陣して自宅に寛ぎ湯殿に入った。妻は居ず、老母に背を流して貰う。幼時よりの習慣は恐ろしい。老母が入って来たと思い、背を向けた。〝幼な児の甘ゆるに等しければ……〟米俵に検差し（俵の中の米の品質を検査する細竹）を突込むより楽に刺せたという。そこには一分の警戒心も働いていなかったからである。

忍者に忍耐が要求されるのは、この点にある。人間の緊張には限度がある。緊張が解かれたとき、弛緩がもたらす隙は、小児よく巨漢を仆す。その虚を、時に待つ。時に《作る》秘薬もその一つである。勘助が生姜湯を好むという習慣を見抜かれたとき、その虚は隙であり、鎧の合わせ目をかき拡げて見せたに等しい。もっともこのころには胴丸が流行しはじめている。

勘助は、かっかと火照る軀に命じられるように、とうとう下帯一本になってしまった。

秘薬は、生姜湯だけではなく、持参させた水にまで入っていたのである。それを持って来たのが、《黄金虫》の一人、夜七の右腕として物の用に立つ、杉という男だと思っていたのだが、

目くらましにかかったのだ、と気がついたのは半刻ほども経ってからである。

下帯一つになった直後、勘助の脱いだものは、大小や陣羽織とともに、かき消すように身辺から消えていた。

そして、それらをそっくり纏った、虚影の〝軍師勘助〟が、見張りの眼の前を堂々と脱け出している。従者二人を連れて。そのニセモノがお千世を助け出そうとしたムクロジだとわかったのは、勘助が正気に還ってからである。

異相の兄弟

一

隻眼で足が不自由、という点だけが違う、とその忍者は思った。ムクロジは牛小屋に繋がれていた。むさい下人としてほうりこまれたのは捕虜となった雑兵や、真田幸隆の家人がお千世を記憶していたからである。

身分ちがいということは、責任の比重も大いに相違する。下人は人間扱いされないのだ。

牛の糞と同居しながら、ムクロジはしかし平気で眠っていた。かれには汚穢を意識する感覚がない。

〈いつまで寝ている心算だ、ムクロジ〉

その声で、ぱっと梟の目があいた。

「誰だ！　いんにゃ、その声は聞いたでえ、さっきの和郎じゃの、ど、何処にいくさる。隠れていくさらんで、これへ出てけつかれや」

「ここに居る」

影が立っていた。

「救けてやろうというのだ、大きな声を立てまいぞ」

「うひひ、忝けねだでや。救けてくれるどけ」

「そうじゃ。おれの言う通りにすれば、またふぐりが食えるぞ」

さくりと縄を切った。

「これを着込め……」

勘助の着衣、鎧、大小、そして陣羽織。すっかり身につけさせてから、

（思った通りだ……よく似ている）

背の低さも、頭でっかちも、醜怪な容貌は獅子っ鼻やまくれた大きな唇、左右不揃に歪った眼まで同じである。片目をつぶらせ片足を曳きずって歩かせる。さらに酷似してくる。

一点、違ったところは、頭だ。以前の勘助だったら似ていたろう。武田晴信が入道して信玄と号したとき、諸将がそれにならって入道頭が増えた。勘助も真っ先に髪を剪った。このムクロジの頭を見れば、懐しいだろう。同じように赤茶けて棕梠のような毛だったから、むしろ無いほうが清潔なくらいであった。勘助は法号を〝道鬼〟とした。したがって、厳密には山本勘助入道道鬼である。

この頭のちがいは兜で誤魔化せる。勘助の兜は珍らしい突盔と呼ばれる椎形のものである。鉢は十二間、腰板高く、下に鞠をつけ、杏葉の吹返しに梅鉢の透し。水平に突き出た眉庇と腰巻板には金箔が貼ってある。

お千世は陣笠をふかく被らせて足軽に仕立てるのは雑作はなかった。ただ、ふとももの傷が難儀だった。人目のないところは影がささえ、木戸では足を曳きずって歩いた。

〈片目をつむれ〉

「こうけ？」

〈反対だ〉

「早よ言わんけよ」

〈片足を曳きずれ〉

「どっちゃ側だ、これでいいのけ」

〈よし……忘れまい〉

ムクロジを勘助に仕立てるのは、容貌姿態は酷似しているから、口を利きさえせねばよい。

〈何か聞かれても、黙って口だけ動かせ〉

「へ？　口だけかね」

〈おれが、声を出す……〉

偽声もまた忍法に必須のものである。影は自信あり気だった。矮軀で頭ばかり大きく跛者という影は、遠くから見ても、山本勘助とわかる。

篝火のあかりに、ぎろりと隻眼が光ればなおさらである。

「軍師のお見廻りだ」

と、哨兵たちは緊張した。

ムクロジはうしろから小突かれて、唇を動かした——

〈変りはないかの……〉

「はあ、何も」

〈よろしい、しかと見張っておれ〉

一行は通り過ぎた。

木戸は三つあった。脱出した村上勢が尼飾城や葛尾城の援軍と合して逆襲の夜討を慮って、特に西南には木戸を厳重にしている。

これは城を完全に占領した直後に行うのを軍学で説いている。鹿柴、柵など、時に石積みしたりする。場合によっては、城兵の死体を積みあげて、反攻を牽制することさえある。

磯部、戸倉、十夜河原と三つの木戸を抜けてやっと愁眉をひらいたのは、千本柳のあたりまで来てからである。

「やれ、ここまでくれば安心だわな」

ムクロジは、兜を投げ捨てるように脱いだ。

「いまごろは、城内ではたんと吃驚こいちょるぞ、いひひッ」

「おかげで虎口を脱することが出来ました」

と、お千世は言った。

そういう間も、立っているのが辛そうに、叢へ坐りこむ。

「まだ安心なるまいが……」と、影は雑兵の陣笠を脱ごうともせず、「これから、どちらへ行きなさる」

「わたくしは、尼飾城へ参りとう存じています。夫がいまだ生死もわからぬならば、一応東条へ戻って傷養生を……」

「なるほど、東条遠州が姫君であったな」

何やら考えている様子だ。

東条氏は村上氏の一族で、尼飾城も村上の持城六ヶ所の一と称われている。

驚いたのはムクロジである。ひえっと、声をあげて平伏してしまった。葛尾城主村上義清の妻であり尼飾城主東条遠江守の姫と聞いては、如何に人間離れしたムクロジでも無礼な振舞の詫びの言葉もない。

（もしも、この姫にふぐりがあったら、わしゃ啖うていたところじゃって……）

女体に陰嚢はないが、若君であっても、驚愕は同じである。お千世はしかし、そうとは知らぬ。

「いいえ、そちはわたくしを救うてくれました。改めて礼を言います。尼飾城へ戻った上で父からも何分のことを」

「うへえ、そがいなことは、わっしゃ何もしちょらんで、わっしゃ、その……」

ますます顔があげられぬ。まさか袴をおろし、腰布をひらき、真っ白なすべすべしたふとももに触れ、陰阜のちぢれまで眺められたと知れば、おそらくお千世は自害してしまうだろう。ふぐり抜きするつもりが、彼女を蘇生させたことをこの忍者は知っているはずだ。どこからか、目撃していたはずだ。

ムクロジはそれを言い出されはせぬかと、矮軀をますますちぢめて、這いつくばっていたが、かれは何も言わぬ。一言でも、そのことに触れられたら、横っ飛びに逃げ出すつもりであった。土竜か子熊のような男で、穴掘りもうまいが、坐ったまま助走なしで二間も前後左右へ跳ぶ。忍者ではない。特別に鍛練したのではない。生存本能がそれを会得させた。

二

（なんちゅう奴じゃろ、これが忍者ちゅうものかいな。甲斐の黄金虫とは、だいぶんと違うだども……こいつのふぐりは、大けえかもしんねえがの）

想像した。ふっと食欲が湧く。が、まずこれは諦めねばなるまい。この大胆で巧妙な忍者には逆立ちしても及びもつかぬ。二間を跳んだとしても、この男なら踵を接して追ってくるだろう。逃げるなら、まず、ふぐりを一刺ししてからだ。ムクロジの考えは、何にしても、すぐふぐりに結びつく。

恐る恐る顔をあげる。見上げた眼と、ふっと見おろした男の眼とぴたりとあった。

「――ムクロジ、といったな？」

「へ……」

「妙な名だな。おれの名も妙だが……ムクロジとはどんな意味だ」

「知らねへ」

「無患子は三年磨いても黒い、というな、あのムクロジか？」

「へへ、そうかもしんねい」

「土竜のことをムクロジと呼ぶところもあるが」

「へへへ、それかもしんねい」

どうせ名前など符牒だから、どっちでもかまわないという気持だろう。

「おれの名は天耳」

「天と耳と書くのですね」と、お千世が言った。

「お坊さまから教わりました。色界の諸天人の有する六道衆生の言葉と一切の麁細な音をも能く聞くことのできる耳を持つという」

「さすがに村上どのが御寮人じゃ。生れは伊賀の喰代……」

口にしてしまってから、言い過ぎた、と感じたようである。忍者は如何なる場合でも、おのれを明かすことを嫌う。況んや、この場合。

だが、お千世は嬉しそうに復唱している。

「喰代ノ天耳さま……」

「ははは、やくたいもない。夜に生き、闇に忍ぶ身の名など……忘れて頂こう」

「いいえ、恩人の名は忘れませぬ。千世はそのような女ではありませぬえ」

「言うても詮ない。これは相手を間違えたようだ。ここで別れよう」

「あれ、尼飾城へはお出で下さいませぬか、このままでは御礼のしようが……」

「要らぬ」

と、歩き出したが、つと立ち止まって、

「欲しいときは、盗る」

「……」

「忍びノ者は賤しいものよ、信じぬことだ」

「天耳さま！」

追いすがるようなお千世の声を、虚しく川風がさらった。伊賀者の姿は闇に呑まれている。

お千世の胸の中にどのような想いが生じているか、ムクロジの理解のほかだ。単純で、その上、色欲というものがまるきり無いこの男にとっては、ただ、ふぐり、唆いのことと、股のぞきの件を暴らされることだけが心配だったから、ほっとした。にたりと笑った。

「礼は要らんがの、わっしゃ味噌が貰いたいで、おまえさまを送って行くがの」

「お味噌を？」

お千世に意味がわからぬ。これは割籠の中の味噌を殆どお千世の傷口をふさぐのに費消してしまったからであろう。

「城へ戻れば、お味噌など大甕にあげましょう」

「ほっほ、そげいに要らんがの、小甕でえいがの。さ、乗ってけれ」

と背をむけた。

お千世を軽々と背負って歩きだす。

もうここまでくれば、武田勢が追ってくる心配はない。たとえ追跡してきても、馬蹄の音なら数町先からわかるし、徒士なら、ムクロジの足は奴等を引き離すだろう。そう思うと安心で一度に疲れが出て来た。

あの糒蔵での奇妙幻妖な情景も、何か悪夢のなかでのことのような気もする。喰代ノ天耳に〈影〉を奪われたお千世はあの時間、夢幻のなかにあった。彼女自身も、目前が霞にへだてら

れて、朧明での奇怪な出来事としか言いようはない。そこで行われたことは、あまりにも淫らで卑猥なことだった。

お千世ももはや娘ではない。子は出来なかったが、男女のことはひと通り知っている。義清とは父娘ほどの年のひらきはあったが、情は通った。義清は優しく女体をいたわってくれた。彼女の知るかぎり輿入れしてから他の女に手は出していない。

自らを慰める男の所作を目撃したのははじめてである。それだけでも驚愕したのに、熄むことなく、二度三度、いや四度五度までもそれは行っていた。そして、天耳の言葉を聞いたところでは、死ぬまでつづけるのだという。

悪夢としか言いようはない。

思い出しても、悪寒がするような、淫らがましさであり、おぞましさであった。その妖異の術を施した〝喰代ノ天耳〟という男をしかし、恐怖や厭わしさで眺めることが出来ないのは何故であろうか。

忍法の不思議さ、あるいは素晴しさに、うたれたわけでもない。忍者という特殊な存在からくる性格の取りつきにくさ、どこか虚無の翳りを漂わせたところに惹かれたのであろうか。

（そんな！）

お千世はかぶりを振る。

（あたしには夫がいる。村上義清という立派な夫が……北信濃で六郡の主だった夫が。化性の忍びノ者なぞに、心惹かれるはずはない。ただ恩は忘れてはいけないと……そう思っているだけ）

弁解じみた思いが、なにかうしろめたい。

三

その悲念をぶち破るように、前方で声がした。

「御寮人さまか」

「お千世さまではござりませぬか」

松明が数本、いや十本がほども、白煙を闇に曳き、火ノ粉を散らして駈け寄ってくる。

手に手に刀槍を携え、小具足で足ごしらえも厳重な人々。なかに屋代郷の触れ頭左衛門尉の顔も見えた。

「おう、おう、御無事で。よくお城から脱けだせまいたな。もはや安堵なされませい。佐次馬が尼飾の方へ馬を走らせましたゆえ、お迎えが間もなく参ることでございましょう。この者は？」

「わっしゃムクロジじゃ」

「変な名だな」

「大きなお世話だでや。それ、お姫さまをお渡しするで……」

「ムクロジ、このまま連れていっておくれ」
「御寮人さま、こげな化物、いや、妙な家来をお使いなさらないでも、屋代ノ者一統が」
「いいえ、この者は、わたしが死にかけていたのを救うてくれた者。たんと礼をせねばなりませぬ」
「いんや、味噌だけで好がの」
これは屋代の連中にはわからない。
が、御寮人様がそう言うのなら、しかたはない。左衛門尉の屋敷で手や顔を洗い、濃茶で息をととのえる間も惜しく、水青の馬に乗った。
大腿部の傷の手当てをしたので横坐りである。馬の口取りはムクロジがした。余人に手綱は渡さないのである。その前後を屋代郷士が守って道を急ぐ。
屋代から尼飾城までおよそ二里半。千曲川と平行して北上すると、善光寺平へ入ってゆく。長野盆地である。東方に現在、松代町がある。これは後に出来たもので、尼飾城は、尼厳山と書く山頂にあった。山城である。飾も厳も発音は同じくカザリと読ませる。城下町もこの山麓——松代町側の加賀井、長礼、田中のあたりにひろがっていて殷賑ぶりは、すでに葛尾城下を凌いでいたという。
松代町あたりは、東方に聳える四阿連山の高遠山から流れる関屋、神田の両川に灌漑される千拓地だった。先年の数ヶ月に及ぶ連続地震もこうした土地の故であろうか。

尼飾城の出来るまでは、楮、芦萩などが生い茂る平坦な荒野で、狐狸や獺の棲家となっていたが、天文のころには河原の楮を生業のタネとして紙漉をする家が増えて、その聚落は紙屋村という名になっていた。
屋代と妻女山の中ほど、篠井の辺で千曲川は大きくねじ曲っているのだが、ここを扇の要として北東に末広がりに広がった千拓地一帯が所謂川中島である。
妻女山からは一望のもとに見える。千曲川と犀川が合して東北に流した。長流は越後山脈の西、魚沼丘陵と東頸城丘陵をかたちづくる信濃川となって日本海へそそいでいる。
この川中島が、越後勢の南進あらば決戦場になるであろうことは、地理的に見ても、予測されるところである。
さればこそ、武田信玄は厳命を発して、村上一族殲滅を急がせていたのだ。川中島を扼せば、越後勢の信濃侵入を食い止めることが出来る。ここで食い止めねば、せっかく南諏訪から城を一つ一つ潰していっても、信濃経営は成り難く、山本勘助が大任を負わされているのも、その故であった。
さて、女の身には、お千世はそこまではわからない。いまはひたすらに実家たる東条一族と顔を合わせる喜びを抱いて、泥葦毛の馬上にあった。
（ひょっとしたら、夫は……先に来ているかもしれない。あの方が、敵の刃にかかって果てるなど、そんなことはあるはずがないもの……）

このあたりなら、村上一族の恩顧を代々に受け継いでいる者が多い。間違っても、落武者狩りなどの錆槍にかけられることはあるまい。

だが、人心の向背ほど、はかり難いものはないのだ。下剋上が常態になっている乱世では、先祖どころか、おのれの恩ですら平然と踏みにじって兇刃を向ける者が尠くない。

武田勢の強力さを目のあたりにすればするほど、寝返りをうたれる可能性は大になってゆく。こうして、いま、送ってくれる屋代郷士とても、明日はどう変わるかしれたものではなかった。

一度、はなれた川が、薬師山の鼻にさしかかって、切通しでふたたび迫り、潺々たる音のなかで、ふっとお千世は不審を甦えらした。

「左衛門尉どの」

「これに……」と、馬を寄せてくる。

「いま思いだしたのだけれど、どうしてわたくしが落ちてきたのがわかったのですか」

「あ、それなら。実は、あの少し前に、そう伝えに来た者がいましてな。御寮人が下人を連れて参られる。砦の衆でお供をして、お屋形のもとへ案内されよ、と……」

「……」

お千世は遠い目になった。

「その者の名は？」

「さ、それが。それだけ申すと、煙のように消えて終うて」

喰代ノ天耳にちがいない。そこまで案じてくれたのか。涙のにじむほど嬉しさがこみあげたが、ちょっと気になったことがある。

「お屋形のもとへ、とこう申されたのですね」

「はあ、たしかに」

御寮人、と呼び、お屋形のもとへ、といえば夫たる村上義清を意味する。東条氏の勢力圏でも、〝お屋形〟といえば義清をさす。

天耳がそう言ったのは、事情を知らずして尼飾城の主を称ったのか？　いや、そうではない。そんなはずはない。とすれば、天耳は夫の行方を知っているのだろうか。

知っていれば、しかし伴って行ったはずだ。屋代衆が知っているのかもしれぬ、と期待しての好意的な発言だと思った。

そう思いながら、しかしお千世の胸に一抹の暗い澱りが残ったのは事実である。

妻女山について迂回し、象山の渡しまで来ると、尼飾城から迎えの武者が大勢出迎えてい、叔父の民部広太や尼飾七騎たる吉池、野村などを見て、まず聞いたのは、義清の安否であった。民部広太は精悍な唇を歪めて、

「お行方は知れぬ。多分……落ちられたとは思うが」

と、言った。

送って来た屋代衆のなかから、誰の目にもふれず、象山の茂みに消えていった影がある。

その顔をお千世とムクロジが見たら啞然としたにちがいない。これは喰代ノ天耳にまぎれもなかった。

ふぐり問答

一

尼飾城と葛尾城は同じ千曲川沿岸の上流と下流にあるが、その名の如く川は曲りくねっているので、直線にすれば、半分ちょっとの距離だ。

つまり四阿山を頂点として西へ伸びている連山が屋根をなして南北にへだてていて、両者を短距離に結ぶ山道もない。間に横たわる高山は、千五百メートルの保基谷岳から高遠山、鏡台山、五里ヶ峰と連なり、山越えして上田、小諸に出るには、わずかに一か所、神田川ぞいに遡って、峠を越え、小県郡に入って神川沿岸をおりる。これとて地蔵峠は千百メートルの標高だ。

葛尾城はこうした高山を北に背負っていて前面には千曲の流れがあり、文字通りの天塹を誇っていたのである。この天然の要害としては、五里ヶ峰の南端に築城したのだから、城はすでに八百メートルの高さに本丸を持っている。崖は急坂でよく石を落すだけで攀じる敵を仆すことができる。

余談になるが、筆者はむかし、イタリアを旅行したとき今次大戦の南伊に於ける最大の激戦地となったモンテ・カシーノの僧院を見て、この葛尾城址を思いだしたほどである。ローマから太陽道路をナポリへ向う途中、カシーノ村の辺から左手に見た突兀たる小山の姿と、上山田温泉の方から千曲川越しに見る葛尾城址の山容とは非常によく似ている。多数の負傷者を出して攻めあぐねた米軍は空からの応援を得て独軍のトーチカ化した僧院を爆撃して漸くここを奪取し、ローマへの道を拓いたのだが、葛尾城攻めもまた困難だったにちがいない。武田軍は未だ火器を使用していない。弓矢の応酬では、上からの方が数倍有利であることはいうまでもない。

葛尾城の落城は甲斐忍衆《黄金虫》の働きによる城内攪乱と、三方からする大軍勢の威容のゆえである。

葛尾城の重臣額岩寺右馬助、依田右近進、布下左衛門、和田修理太夫らがおのれの持場を捨てて降人となったのは、義清と意見が相違したからであった。

三方を囲まれ、一方は嶮峻の崖という地ノ利は落城の際に逃走の足枷となる。村上義清は一体どこから逃げたのか。城裏から尾根伝いに行くのは容易なことではない。だからこそ搦手になっている。寄手にもまさか、と思われた。裏山に捜索の手が伸びなかったのはそのためであった。

お千世が脱出した翌日のことである。

関屋川沿いの細径を、調子っぱずれの唄声がのぼってゆく。あの唄である。

〽ホーイホイ、ホーイホイ
味噌もろた、味噌くれた
たんとのふぐりは、味噌づけじゃ
ムクロジ様の味噌甕にゃ
涎くりくり待ってござる
ああ、嬉しやな、嬉しやな……

涎くりながら待っているのはムクロジの方なのだが、そんなことは気にかけない。即興的に、口から出まかせに唄ってゆく。

その肩に自分の頭がすっぽり入るほどの甕を担いでいる。尼飾城でたっぷり味噌を詰めてくれたのだ。

ほかには慾も得もないムクロジだ。関屋川を遡ってゆく顔はほたほたしている。

いまの関屋の聚落をすぎてから山峡はせまくなり坂も嶮しくなってくる。赤柴のあたりで川はほそく烈しくなって、四方に岐れている。そのひとつ、右側のひとすじの傍に木樵のつけた杣道がある。このあたりの者はそれを〝鹿道〟などと呼ぶ。ムクロジはそこをどんどんのぼっていった。真っ直ぐゆけば地蔵峠へ誘われるのだが、のぼるほどに径は草に蔽われ、あるかなしになる。

峠が近づいてきたとき、杉林のなかで、煙がひとすじたちのぼっているのが見えた。

「……」

ムクロジは立ち止った。

獅子鼻が動いた。それは炊事の煙による匂いが、食欲をそそったのではない。ムクロジの顔は嬉しそうにゆがみ、それから、小甕を愛撫するように叩いた。

「詰めてやるでエ」

あるいは、その獅子鼻に漂って来た匂いはおそらく動物的嗅覚でしか感得されない程度の、ごく微量の血の臭いだったかもしれぬ。

林の中に流土地があった。大雨などで土が流れ山肌がえぐられていて、里人は〝竜人の爪あと〟などと子供たちを怖がらせる。

その下の棚に、武士が二人。

一人は長々と横たわり、死んでいるかのように動かない。もう一人の方が、火を熾していた。具足は裂け、泥と血にまみれ、一目で落武者としれる。葛尾城から落ちて来たのであろう。尼飾城へおりてゆくには、道がない。

夜に紛れての脱走が、あやまって踏みはずし転落したのにちがいない。

丁度、井戸の底のようになっているし、這い上れないのは、深傷の故か。ここで大声で呼んでも、徒らに山気に吹き消されるばかりだ。里人の耳にはとどかない。途方にくれているので

あろう。

（まだ死んでねや……）

ムクロジはにたりとした。横たわった男が苦しげに身を動かすのが見えたのである。

二

それからムクロジは急がしく働きだした。そこらを走りまわって、葛かずらを切り集め蔓をつないで、長いロープを作った。それを作る間のかれの表情といったら登山前夜のザイルの点検にも似た、いや、飯の前の米研ぎか薪とりというほうが適切だろう。

醜怪な顔を伸ばしたり歪めたり、鼻を鳴らしたり、れいの即興詩を口誦さんだり……ふぐりを見ィつけた、美味いやつを見ィつけた、そんな言葉があった。

下をのぞいて、長さをはかったりするムクロジの姿は、落武者にとっての救いの神だ。

「おう、おぬし助けてくれるか、足を痛めてあがれぬのじゃ、頼むぞ」

欣喜して、手を振るのを見ても、ムクロジは返事をするでもない。自分のペースで作業を進めてゆき、やがて、一端を太い杉にくくりつけると、するすると伝わりおりてきた。むろん、背には小甕を負ったままである。

「おお、よく来てくれたぞ」

武士は這った。這い寄ろうとする手には血が流れ、顔色は土気を帯びている。

「丁度好え」

ムクロジはにたりとした。唇の端から白いものが垂れた。

「何が丁度好え、じゃ、さ、肩を貸してくれい……」

「無駄ぞな」

「なに!?」

「お迎えが来るぞな」

「……そうか、わしを迎えに来てくれたのか」

うんにゃ、と重い巨きな首を振って、

「お迎えぞな」

繰りかえした。

この男に感情のデリカシーを求めるのは無理だし、余分な感情は持ち合わせない。持たない者が表現することはなお不可能だ。ムクロジの関心事は、破傷風で腐りはじめた武士の肉体にしかない。武士自身が気がつかない、いのちの終息を、すでにムクロジの動物的嗅覚は察知している。あるいは死の臭いがたっているのか。

武士は眉をしかめた。

痛みが、頬をひくひくさせている。

「きさま……何を言うのだ」

愕然としたのは、その言葉が、仏界からの冥土の迎え、つまり死期の迫ったのを告げるものだと悟ったときだ。

「うぬ！　化物めが」

咄嗟に、この奇怪な男を殺しても、地上へのいのち蔓は残る、と判断したのであろう。かっと咽喉を鳴らせて、抜き討っていた。片膝ついたままである。最後の気力をふり絞っての抜討ちである。適確に弧を描き、ムクロジは胴切りされたはずであった。

その刀は、しかし虚しく嵐気を切って流れている。ムクロジの矮軀は宙にあった。

「おのれ」

流れた刀を小手返しに、下から掬い斬りにはねた。蛙股の中央を走ったはずであった。が、この二刃もまた、流れている。けけけっと、奇声が、頭上を超えたとき、武士は、はっきりと動物のむかつくような臭いを嗅いだのである。

それが、この男の六感の最後だった。頭上を超えながら、ムクロジの手に抜き放たれた小さな刀は武士の耳を——右の耳の穴から左の耳の穴まで一刺しに貫ぬいていたのである。

どさりと前のめりになったとき、もはや呼吸はない。

ぴりぴりっと四肢が断末魔にふるえるのを見ながら、ムクロジは刃物を抜きとろうとした。抜けない。鎚（はばき）もとまで入っている。ムクロジは片足で頭を踏んづけて、ぐいと引き抜いた。しゅッと血が噴いた。刃についた血汐をペロリと舐めたムクロジがはじめたのは、昨夜と同じような順序である。草摺をはずし、袴を引きずりおろす。下帯をひき千切る。陰茎を持つ必要がなかったのは、背後からだったからである。

股が裂けるほど両脚をひらかせて、サクリと陰嚢を切りとる。うす皮を切り開く、ふぐりをとり出す。この順序に、一瞬の遅滞も逡巡もない。

美味そうに舌を鳴らせて平らげると、はじめて、背負っていた甕をおろした。蓋がついている。

三

一度に二箇。つまり一人分でムクロジは満足する。ところが、もう一人いる。これを放棄するほど贅沢ではない。

いま一人は失神しているようであった。傷を負っていた上に、崖から転落したのがこたえたのであろう。武将である。具足も立派だ。

ムクロジには、武将も足軽もない。これも同じように袴をずらして、陰茎を持ちあげ、陰嚢を切る。その瞬間、凄い叫びが武将の口から奔った。身を起そうとする。これを、肘で一撃ちに倒した。

切りとったやつは、こんどは玉だけとり出さぬ。袋のまま、ずぶりと甕の中へ——味噌の中へ突っこんだのである。

なんと味噌はこの用のためだったのである。つまり貯蔵用。ムクロジに言わせれば、味噌漬けにしておけば、食いたいときに食えるという。味噌がないときは、日干しにすることもある。もっともふぐりの干物は携帯には便利だが、やはり味噌漬けにはかなわない。

さて、切り取ってしまうと、もう用はない。

ひょいと味噌甕を担ぐと、また葛かずらを伝って、するすると崖を上る。速い。急いでいる。何を急ぐのか。すでに死臭を嗅ぎつけたように、禿鷹が空に舞っている。そのせいかどうか。ムクロジの姿が峠の方へ消え去ると、サーっと黒い影が空を滑って、死体の上に降りてくる。一丈ほど真上に来たときである。

ひゅッ!! 空が哭いた。

礫だ。黒い礫が禿鷹へ吸い寄せられるように走った。禿鷹のどこを打ったのか、一声、押し潰されたような悲鳴をあげて、ばさりっと翼をうちふるわせて、死体の上に落ちた。

向うの峰から、鳥か獣を思わせる速さで、駈けおりて来た者がある。

一陣の黒風が、かれを包み、崖を飛んだ。葛かづらに頼るのではない。一気に飛び降りたのである。

「しまった!」

一瞬にかれは、武将の股間を見てとった。

「血を止めねば……」

呟やきながら、死体の刀から小柄を抜きとると焚火の中に突っ込んだ。

これは喰代ノ天耳だった。

真赤に灼けた小柄を、陰嚢の切口にあてた。ジュジュ! と血が燃え、肉が焦げる。

異様な臭いが漂った。武将は、そのショックで甦った。奥歯を軋らせて、呻いた。だが、すぐにまた、悶絶している。

血は止った。癒着した傷口に丁寧に何かの膏を塗りこめた。それは黄色く濁ったもので蛤貝に入っていた。荒療治は終った。天耳はそれが終ると、武将を担ぎあげた。

具足のままだから、かなり重い。それを軽々と担ぎあげて、葛かずらを攀じった。

この武将は葛尾城から落ちてきた村上義清だったのである。

ムクロジはもとより知らぬ。

まさか村上義清の生ふぐりを味噌漬けにしたとは。お千世の夫だということをたとえ知ってもしかし、ムクロジには別段の感慨はなかったかもしれない。ふぐりが大きいか小さいか、味が良いか悪いか、だけだ。やはり日ごろの健康さのちがいで、ふぐりの味もちがう。

ムクロジの小屋は地蔵峠を越えて、二丁ばかり沢をおりた渓流の畔りにあった。

小屋というより洞穴である。

渓流に望む岩だらけの一か所に、奥深い穴がえぐれている。入口は狭く、すでに紅葉しはじめた楓が岩の間から枝を拡げていたし板廂が出て支柱が立って、なかなか風雅な棲家だ。渓流

沿いの杣路はこの岩の上を通っているので樵夫でもちょっと気がつかない。

ムクロジが、口のまわりを血だらけにしたまま味噌甕を担いで、岩穴の方へ降りてゆく姿を見た者があったらしい。

落武者狩りは、農民らに許された当時の風習だ。武田方ではこの地方の農民らを威嚇し落武者を匿う者などを厳罰に処すむね布告していたし、胡乱の者を発見したら、すべて届出るように命じていた。

そんなことは、ムクロジは知らぬ。生ふぐりは食べたし、味噌漬けにはしたし、これで昼寝からさめたときの楽しみがある。

岩穴に帰ると、干草の寝床で丸くなって寝た。倖せそのものであった。五穀を啖う人間たちが国盗り城攻めにやっきとなっているあいだは、ムクロジの胃の腑は充たされ、口栄耀は許されるだろう。地上から兵火が絶え、殺し合いがなくなると、ムクロジは困るのだ。平和なくらいふぐりの入手に困難なことはない。

その幸福の夢が破られた。

ムクロジの動物的六感は、すべて空腹と関係がある。たっぷり味噌を舐めて生ふぐりにありついて、ぐっすり寝込んでいたから、多少、鈍っていた。

四

気がついたときは、洞穴の入口は雑兵らでとり囲まれていたのである。

「――この穴だな。みんな用心せい」

「とり逃してはならんぞ、弓組、矢の用意はいいか。獣みたいな奴じゃ、素走っこい。早くしろ」

何を早くしろというのか。ムクロジは動顚した。はね起きた。狭い穴の中だ。入口の狭さから見ると、中は一応広く、四、五人は入れるくらいだが、味噌甕や具足や着物や、脇差、鎧通しなどが沢山ある。みんな戦場から拾って来たものだ。研石があるのは、刃物を鋭利にしないと、ふぐりのような柔らかいものを切るのに難かしいからだ。

ムクロジがうろうろしていると、頭上にぶら下っていた蝙蝠が、まるで心中を察したように、ばたばたとそこらを飛び廻った。

この蝙蝠は七、八羽いる。ムクロジが飼っているのではない。ムクロジがこの穴を発見したとき、すでに棲みついていた。先住者は蝙蝠のほうなのだが、ムクロジとはウマが合うのか、迷惑がるふうもなく、同居するようになっていた。もっとも、蛇や蛙など蝙蝠の好きな餌は、ムクロジがとってきてやることが多い。

いま。

ムクロジに迫った危難を、蝙蝠たちも感じるのであろうか。大きなやつは羽を広げると二尺もある。小さいのは半分くらい。そいつらがばたばた騒ぎまわるのが、一層、ムクロジの不安

を煽った。ふぐりの味噌甕を背負ったり考えなおして置いたり、刀を五、六本つかんでみたり、落着かない。

そのうちに穴の外では何を始めたのか。

がやがやしていたと思うと、ぱちぱちと、火のはぜる音がした。

「もっと集めろ、もっとだ」

「枯木だけでなく、青いやつも持ってこい、火を熾すのが目的ではないぞ、煙りじゃ、燻し出すのだ」

煙り——

ぱちぱち小枝がはね、炎がはげしくなって熱気とともに、濃濁の煙りが吹きこんできたではないか。

「うひゃあ、甚いぞな」

ムクロジは仰天した。蝙蝠たちは一層、キイキイ叫んで、飛びまわる。

外では鉄扇では効果が少ないと、楯や、陣羽織まで団扇の代りにして炎を煽り、煙りを洞穴に吹きなびかせるのだからたまらない。

濛々と流れこんだ濁煙は、煤を含み火ノ粉さえ躍らせて、洞窟内に渦を巻いた。渦は渦を生み、熱気の逃げ場がないままに中に籠って、狂い廻るのだ。

「出て来い！」

外では、なおも陣羽織を両手にもってばたばたとあおりながら、怒鳴る。

「出て来い、化物め」

「ふらちな奴め！　そこで蒸し殺されたいのか、出てくれば助けてやるぞ」

「そうだ、刀を捨てて出て来い。外には大鏑矢が五張もうぬを狙っているのじゃ。逃げられぬところぞ」

熱気と煙りには、蝙蝠が先に悲鳴をあげた。わらわらと穴から飛び出す。

「出た！」

弦が鳴った。ひょう！　と矢が走った。大きな蝙蝠の羽を掠め、岩に当って折れるのが見えた。

「射るな」陣羽織を手にした小頭が叫んだ。

「蝙蝠は目くらましかもしれぬ。何せ、化物じゃ、やつが出てくるまで、ムダ矢をするな」

寄手は慎重だった。逃れるすべはなかった。

「いま出るでエ」

ついにムクロジは外へ叫んだ。目からぼろぼろ泪を流しながら、胸をあえがした。常人よりも動物に近い感じだけに、息苦しいのは耐えられない。

「いま出るでエ」

「刃物は捨てろ、刀を持っていると、射るぞ針鼠にしてくれるぞ」

「持たねえ、何にも持たねえ、救けてくれゃあ」

その声とともに、ぼわっと濃煙のかたまりが吐きだされた。ムクロジが転がり出たのである。

「それ、捕えろ」

どっと足軽たちが殺到した。

腕を摑むやつ、足をとるやつ、頭を抱えこむやつ、まるで、各々の分担が決っていたように蝗のように飛びついた。

普通なら、五人や六人の手に負えるムクロジではない。だが、熱風と煤煙に燻されて呼吸も苦しく、眼もやられて、日ごろの動きは全く失われ、二、三人を投げ飛ばしたのが関の山で、荒縄でぎりぎり巻きに縛りあげられてしまった。

それだけでは、しかし、かれらは満足しなかった。

「四ツ足吊りにしろ。狐狸のたぐいの運び方だ。魔性の獣はそうやる。魔性が抜けるそうじゃ」

何処で聞いたことか。ムクロジは手足を縛られて一つにまとめて吊り下げられた。長槍を五、六本まとめて束ね、急ごしらえの天秤棒をこしらえた。ムクロジは、狸か貉のようにぶら下げられて、城へ運ばれた。

葛尾城では、山本勘助が沈鬱な顔に、隻眼を光らせて、報告を待っていた。

五

もともと山本勘助は性格も内向型だ。悪くいえば陰鬱で、底が知れない。そうした性格は、心から溶けあえる友人を作れぬ。

諸将も必要以上に近よろうとしないし、本人も又、もとめようとせぬ。そこには信玄ひとりの信頼を得た才能を認めないわけにはゆかない。

この突然のように出現した、素姓も定かならぬ男が軍師にのし上ったのは、ひとえに、その博識とずばぬけた才覚のたまものだ。

醜怪な容貌も、親しめないだけに、権威を得さえすれば、威厳となってプラスする。だが、その心の奥深くに沈殿した孤独癖は、ただに正視されない容姿の醜悪さや、そのゆえもあって永い浪牢の生活をおくらざるを得なかった半生のゆえではない。

暗い運命は生れながらに定っていた。人にはそれぞれ〝星〟があるという。陰陽五行説から来たものだが、星には逆えぬ、と当時の人々は思っていたし、勘助は、その出自から脱却するために、人一倍の努力をしてきたのだ。

勘助の特徴である肉体的欠陥でさえも、かれは、出世の手段にした。かれは、ある大名に仕えようとしたとき、目はこれこれの戦さで矢を受けしもの、足はしかじかの夜討ちで薙刀を喰いしもの、といった。

「矢を受けたときは、痛いなどというどころではない。痛みというやつは甚くなると感ぜぬものでな、ただ、目の前が真っ暗になったわい……」

それでどうなされました。と、視線が集中するなかで、かれは得意そうに言った。

「やむを得ぬ。引き抜き申したわ」

御自分で？　驚きは畏敬に変る。

「ヤッとばかりに引き抜くとな、眼玉がくっついて来たので、食べてしもうた。身体これ父母に受くもの、粗末にはできぬでな」

一夜、これに疑いを抱いた者が、熟睡中にそっと瞼をひらいてみた。黒い眼窩がぽかりとあいているかと思ったが、そこには眼球があった。死んだ眼球である。瞳は青白く死んでいる。

その噂がひろまると勘助は弁解した。

「これはギヤマンじゃ、義眼じゃ」

脚の場合もそうである。京の寺で蒸風呂に入ったとき、短かい脚には刀傷も槍傷もなかった。片眼が光りもなく生れたように、片足もまた曲ったなりであった。

人口に膾炙しているのは、その二か所だが、他にもまだ異常なところがあった。足の指が六本あったという。また別の説によると、足ではなく手の指だという。真偽のほどはわからないが、手の指だったら多くの目にたつはずである。

ともあれ、この肉体の欠陥は、生れたときから、すでにかれに刻せられた免れ難いものであった。性格が陰に籠ったものになるのはやむを得ない。山本勘助に於ては、おのれの努力で、この生れながらに科せられた荊棘の道を切り拓こうとした。その努力は並々ではない。が、幸運の星のもとに生れた人々に比べて、あまりにも神は片手落ちであった。勘助はこの老齢になるまで、一日として、心からなる愉悦も平安も味わったことはない。

人嫌いな勘助の楽しみは、戦さだ。戦さは最大の昂奮であり、情熱である。特に大軍の死命を制する用兵こそは、その最たるものだ。

かれは人生の大半を費す努力の後に漸く、望みの地位を手に入れた。

天下の大国たる甲斐の武田家の軍師――信玄入道晴信の謀臣にまでのし上った。

いまや、かれは信州という広大な大地をその欲望のままに、戦場として、大軍を采配する地位を得たのである。

信玄の信任を得るだけでは、それが如何にけたはずれの信頼と心服によるものでも、宿老重臣の多い大国で、数年でこの地位に就くのは尋常ではない。

この間にあって、巧妙な忍衆の働きもまたかなりのものであったことは、想像に難くない。この意味からでも、甲斐武田の子飼いの忍びノ者《黄金虫》をあたかも、おのれの家来の如くに走狗としていることが頷けるのである。

（邪魔な者は……死なねばならぬ）

世間どもは。

と、勘助は考える。

（おれを容れなかった……）

非情なのが世の中であった。よそは知らぬ。尠くとも、かれの半生は、非情冷酷がついてまわった。かれにとって世間は冷たく、情けの一片もなかったのだ。

（今度は、おれが返す番じゃ！）

出世のために、非情冷酷に徹した。

そうして、ここまで来た。

（それでよかったのだ）

勘助はおのれの生き方を——武田家に仕官してからの来し方をふりかえって、肯定する。

（おれの働きは大きい。甲斐一国の武田氏に信濃の大部分を附与することが出来た。おれが存在する限り、ますます、武田家は大きくなるだろう。やがては美濃を、尾張を、越後を、東海を、関東を——そして、京へ上る。天下をとる！）

そこまで考えるとき、醜怪な容貌にも、ほのぼのとした希望の光りがさして、和んでくるのだ。

（信玄公に天下をとらせたい！）

心からそう思った。

（信玄公だけは、おれを信頼した。この信頼にだけは応える。他の老臣どもは道具じゃ。邪

魔になれば始末するに限る。おれが非情であるところに武田家の安泰がある）

六

山本勘助の軍師たりし名声は、戦場にての采配の巧みさもだが、用間の裏づけがあったからである。

孫子の兵法が机上の学問に終らなかったのは諸国放浪の歳月が経験となって実戦を支えたからである。用間用兵は表裏だ。《黄金虫》以前の甲斐忍衆は《三ツ者》と呼ばれた。

見る、聴く、話す——あるいは、盗る、放つ、刺す——の三つの称ともいう。〝話す〟というのは細作である。後方攪乱のための、流言蜚語の類いであり、〝放つ〟とは、放火や吊橋を切り落したり、因人を救い出して城内を混乱せしめたりという、乱波透波の意味だ。

この甲斐忍衆に不足しているのを〝忍耐〟にあると見た勘助が金山の〝土竜〟とか〝穴熊〟とか侮蔑される鉱夫たちに見出したとき、新しい忍者組織が誕生したのだ。《黄金虫》の活躍には、当初、難色を示した老臣たちも、一言もなかった。

世に、勘助の作るところと伝えられる〝忍びノ七つ道具〟がある。他にもある。唐土の兵法にはかなり荒唐無稽なものが多いが、勘助は命じて、その一つ一つを作製し、実験した。シナ流に、白髪三千丈式の思いつき兵器忍具は捨て、実用になるものはとり、さらにその過程に於て、幾つもの忍具を発明している。

たとえば、浮沓。水蜘蛛、ともいう。

これなど、図解には、四片の湾曲した板をつなぎ、革を渡して、中央に足をのせるようになっていて、水上を歩けるという。

実際には不可能だ。大きさを按配して作ってみたが駄目だった。

この木の部分を、勘助は真空にすることを考えた。木を張り合わせて空洞にする。貼り合わせはソクイ糊でし、その上を膠でびっしりと貼った。これだと、軽捷な者なら、大きく作れば、乗れた。

が、忍具の第一条件は、携帯に至使であること、即ち、軽小なることだ。木製では、どうしても、大きくなる。勘助は海豹の皮をもって作り、成功した。

かれの知識は天文から漢方——薬草毒草の判別はもとより、外科もやれたし、火術には堪能であった。故実典礼にもふかい。

こうした万能さが、信玄を驚嘆させただけでなく忍びノ者たちをよく心服させ得たのである。その忍びノ《黄金虫》を総帥する勘助が、昨夜のようなぶざまな目にあおうとは。

裸で寝ていた。

それだけなら弁解できる。

着衣から具足から、一切が奪われていたのだ。醜態この上なかった。

「敵の忍びが入っていたのだ」

勘助は、せめてもにおのれの耳が——その〈影〉の忍び歩きを捕えたことを、慰めとした。

「虫どもは何をしていたのだ？」

一人は塀の上で死んでいた。夜七はあまりの素速さに、敵の顔も見ていない。

足軽小者が殺され、瞞着されたのは、しかたがない。戦勝の気のゆるみを、指弾されよう。が、忍びノ者のみか、総帥たる勘助まで翻弄されたとあっては、家中にもしめしがつかなかった。

非凡の軍師、智謀かぎりなし、と噂された勘助の面目は丸つぶれであった。

小山田備中や高坂弾正らは、表面では同情は寄せたが、腹中の愍笑が、痛いほどわかる。

勘助は厳命を発した。

「落武者狩りの手を弛めまいぞ。胡乱な者あれば斬れ、訴人には恩賞銀をはずむぞ」

それだけでは足りなかった。さらに付加えた。

「落武者一人につき、永代冥迦銭を免ずること。乱波者の類い同上」

強制寄附金の一切を免除するというのである。信玄の裁可を得ずにこうした布令を出すのは乱暴だったが、勘助としては是が非でも昨夜の下手人を捕えねば、威信が回復しない。

ムクロジの隠れ家は、この布令によって通報されたものである。密告者はこのあたりの木樵りだった。

足軽小頭はじめ、四ツ足縛りで嶮峻の山ひだを運びおろす連中は、ムクロジが「乱波者の類

い」に該当するかどうか知らぬ。が、「胡乱の者」であることは事実だった。

悪血

一

勘助の隻眼が、一瞬大きく瞠らかれた。

ムクロジを見た瞬間である。

もしも少し思慮のある者だったら、そのときの勘助の異相を動かした感情に気がついたはずである。

それは、あくまでもしかし、一瞬に過ぎなかった。

「何者だ、こやつは」

強いて、冷たく言い放った。

「はあ、実は、昨夜……」仮牢の見張りの任を受けた権藤某が冷汗をかきながら説明した。

村上義清夫人お千世ノ方を逃そうとしていた下人で、お千世とともに姿を消した。こやつが足軽を殺して逃げだすに際してお千世を伴ったにちがいない。あまりにムサイやつゆえ名前も調べなかったが……

「こやつを糾明いたせば、義清内室の儀は明らかになると存じまする。昨夜の失態を償うためにも、やつがれに糾明の役をお任せ下さいますよう」

「……」

「鼻を削ぎ、耳を引き抜き、眼をえぐり……」言いさして、口ごもったのは、勘助の隻眼に気づいたせいで、「いや、片腕おとしても、片足……」これもさし障りがある。

いかつい髭面に汗が吹きだして、大きなからだを小さくちぢめて恐縮している。

「その、とにかく、どがいな事してでん、お千世の行方を吐かして御覧に入れまするで」

「なぜ、昨夜、わしに報告せざったのじゃ」

「こやつのことをでござりまするか」

「まあよい。済んだことじゃ。糾明はわしがする。汝らは退っておれ」

なぜ、軍師様がそういうことを言いだしたのか一寸、不審だったが、何を考えているかわからぬ智謀そのものの偉い人だ。皮肉に考えた者でも、せいぜい、昨夜の憎しみのせいか、お千世を一人占めにする心算か、くらいの気の廻し様に過ぎなかった。

二人きりになっても、勘助は、縄を解いてやるでもなく、弓の折れをふるうでもなかった。

無言で、室内を行ったり来たりしている。

異相がますますひん曲り、大きくめくれた唇の、黄ろい犬歯が剝きだして隻眼だけが、野獣のように光っている。

歩きながら、咳をしたり、耳を掻いたり、獅子鼻をこすったり——いつも、考えごとをしているときは、そうなのだ。その癖が一層はげしい。ぶつぶつと何か呟やいていて時々、呻いたり、吐きだすように、声を奔らせたりした。

「こいつが、こいつが……」

と、その声は言っているようでもあり、

「畜生め、畜生め……」

と、呪咀じみて聞えた。

ムクロジのまわりを行ったり来たりしながら、その隻眼は、刺すようにかれを見、うとましげに見、憎々しげに見えるかと思えば、ふっと、憐れみのそれになった。

如何なる困難が襲ってきても、たじろぐことのない男が——必ず機略で切りぬけて来た男が、こうした懊悩にとらわれ、心中の動揺を隠せないのは、どうしたわけか。

もしも、板垣信形（のぶかた）が、生きていてそのさまを見たならば、

「さもあろう事よ」

と、したり顔に呟いたにちがいない。

信形は勘助を信玄に推挙した男である。勘助の才幹を認めはしたが、その素姓が心配だった。信玄が軍師として用いるというに至って、その心痛は大きく、極秘に調べた。これに忍衆《三ツ者》が暗躍したのである。

（ただの家来なればよい、才あればよい。強いだけでも、よい。が、君側に侍（はべ）るとなればこれは自ら別じゃ）

信形の信念はそこから出ている。

勘助の異相があまりに醜怪にすぎるところに、尋常ではない、〝血〟を見たようである。

その陰鬱なまでの性格も、その狙いを唆った。忍衆《三ツ者》は四方に散った。

なかの一人が奥三河のある山中に、勘助の生家を突きとめた。山峡の痩地の岩肌にへばりつくようにして蠢く人々の姿に勘助と同じ血の流れがあったという。

「犬神か……」

憮然として信形は呟いた。

その夜、手柄の忍びノ者が死んだ。何かの獣の牙に頸を噛み切られて、そのふぐりが無かった。信形は報告を受けて慄然とした。いまさらのように〝犬神使（いぬがみつかい）〟の恐ろしさにおぞ毛をふるった。

二

忍びノ者と犬神。

この奇妙な取合わせはよく云々されることだが、いまは山本勘助の身辺にのみ絞る。

〝犬神〟なるものは、由来、俗信の最たるもので、非科学的だ。が、この迷信の根強さは、

一朝一夕には払拭出来るものではなく、つい戦前までも、明大教授の藤沢衛彦氏によれば〔高知県の如き、一村中六、七戸は必ずこの筋の家があって、今日なお人から仲間はずれにされている〕とあるほどだ。

犬神憑というのは、一種の降霊術で、犬神ののりうつった狂者をいう。この降霊の法というのは、犬を頭のみ出して地中に埋め、食物を見せるだけで与えず、執念が嵩じて狂い死にせんとする際に首を斬る。首は飛んで食物に喰いつく。

その首を焼いて骨とし、箱に入れて土中に埋め往来の足に踏ませる。のち取り出して持ち帰り、酒饌を供えて祀る——この祈念によって、犬神憑となり、その欲するところのかなわざるはないという。

ところが、ひとたび犬神の憑いた（宿った）家は代々その衆の中に宿って離れぬ。したがって一般では婚姻によりその血の伝わるのを恐れて、後々まで系図調べ、と称して犬神の有無を穿鑿するのが常識とされてきたのである。

こう目堵された家では、自然、村八分になる。孤立し、婚姻も不自由になるから、近親姦になってしまう。二代三代と続くうちに、血族結婚の異常さが、嬰児の奇形となってあらわれてくる。

こうした人々が、世間からうとまれ、自然、世をすねて忍びノ者などになってゆくという俗説も、一半の真実はあるかもしれぬ。

山本勘助の家が、犬神の血を受けたかどうかは判然としない。野史野乗の無責任な、伝説の採取がつくりあげたものかもしれないにしても、その醜怪な容姿は、疑惑を抱かしめるに充分であったことも、また論を俟たない。北条氏康も今川義元もその醜さに顔をそむけたのだ。

忍衆《三ツ者》某が、野犬の牙に咽喉笛を噛み切られたようなむざんな死ざまを見せてから、信形は恐怖した。勘助との間に、冷たい溝が横たわり、それは、いつ兇暴な牙となって襲ってくるかもしれなかった。

信形が、他に口外しなかったのは、その故である。

が、ひとたび、〝知った〟罪は消しようはない。それを〝探った〟罪として甘受しなければならなかった。

天文十七年の二月十四日。上田の城の戦闘で信形が勘助の腹心による細作に暗殺されたことは、前に述べた。かれはこの間、何もしていない。が、数年前のサグリの派遣が、黒い手を引くように、誘ったことは疑いない。というのは、かれの出陣前にムクロジが甲斐にあらわれたのである。

金山に働いていた。勘助の耳に入れたのは《黄金虫》の夜三である。

「御軍師によく似た者が、土竜になっておるとの評判でござる」

その二日目。その〝よく似た者〟は姿を消した。突然の失踪であった。六九郎、と名乗っていたというが定かではない。土竜に名などたいして必要ではなかったのだ。

六九郎がムクロジを訛ったものであろうことは推測に難くない。

ムクロジが、戦場に姿をあらわしたのは、すでに読者の知る如く、死にかけた男のふぐりを啖うためであったろう。その以外の意味も、事情もあるまい。

だが、勘助にしてみれば、大事であった。かれが信形の抹殺を密命したのは、そのときである。

（迷惑をかけるやつだ……）

勘助は足を止め、ムクロジを見た。

「あれほど申したのに、わからぬのか」

押し殺した声で、勘助は言った。

「わしのまわりに出てくるなと！　山に帰れというたのを、忘れたのか」

「へ……山には、ふぐりがねいもの」

「よそへ行け、この信濃と甲斐でなければよい、よそへ行け」

「ああ……」

素直に頷く。

《三ツ者》が何のようなことを聞いたのか、甲斐にくることを促したのか、それはわからぬ。が、誘い水となったことは確かであった。無知な、思慮の足りないムクロジの動物的本能が、勘助に近づきたがっているのか。それとも、断ち切れぬ血のつながりが、お互いに呼び合い、

もとめ合うのか。

ムクロジはそれとは知らぬ。

それだけに、勘助の胸は痛むのだ。

（こいつを……この弟を、わしは殺せぬ！）

非情に生きているつもりでも、その刃だけは、おろせない。

ただに疎外された〝犬神〟の兄弟というだけではなかった。よく似た兄弟というせいでもなさそうだ。

勘助だけが知る秘密がある。ムクロジがまだ三つ四つのころであった。数人の落武者を一族で惨殺して引き剝いだことがある。

大人たちがそれぞれ、肌付金はいうまでもなく刀や具足や着衣を剝いでしまったあと、勘助とムクロジは死体にとりついた。

何か食べるものでも残っていないかと思った。あるはずがなかった。下帯まで引き剝がれて、生れたままの武士の死体は、幼な児の目に異様に見えた。

「ひひ、いいものがあら」

勘助は陰嚢を切りとった。うす皮をひらき玉をこそぐようにとって、

「啖え」

と、ムクロジにやった。

食べた。手も口も血だらけにして、しゃぶっているようだったが、小さな歯でこりこりと噛みはじめた。

「うめいか？」

にやっと嬉しそうに笑ったムクロジの幼な顔が、いまも勘助の目にある。

三

（わしのせいだ……）

その思いが、五十年もの間、勘助の胸を苛んでいた。出世のためには、どこまでも非情になれる男が、弟だけは殺せなかった。肉親の情というものか、そうは思いたくなかった。不憫なのだ。それだけだ。

（だが、わしの邪魔になってはならぬ……）

心に深く繰り返したとき、外で声がした。小山田備中からの使番であった。至急にお越し願いたいという。

「何用じゃ」

「村上義清の行方がわかりました」

密告しに来た男が坐っていた。牢人風である。具足はつけず、大小に袴を穿いただけの姿はありふれた渡り者だ。浅黒い顔は別段の特徴はない。小山田備中守と高坂弾正の質問に答えていたが、勘助が入ってくると、恐れ気もなく目をむけた。

「――そのほうか、義清を捕えたと？」

「いや、隠れておるところを存じて居るので、申し上げに……」

「申せ」

「申し上げられませぬ」

「何と！」

「いや、言葉が足りなかった。実は山中で見かけたのだが、どの辺りと口では言えぬ。そこへ行けばわかるのだが」

「ふむ……」

三人は顔を見合わせた。

「では案内せい」

若い高坂弾正が床几を蹴って立った。眉目秀麗、まだ唇も朱い。女性的な優美な顔立ちは信玄の寵童だったころの面かげを残しているが、ひと皮の眼にはするどいものがある。

「足軽どもを三十人ほどつけてやる。すぐ行け」

「かしこまりました」

と、一揖したが、腰をあげようとはしない。

「どうした」
「それがし、御当家には縁もゆかりもござらぬが……」
「それがどうした」と、弾正は焦立ちで、目尻をぴりぴりさせている。
「前々より武田家こそは天下を統一する大国、恐れながらお屋形さまひとたび京へ上って天下に号令なせば、諸州、威になびき、世はおさまるとこそ拝察して居りました」
「それで？」
「なろうことなら、お召抱え賜りたく、その手土産にもと、村上義清の居所を突きとめましたる次第」
「ふむ、仕官が望みか」
「お屋形さまに御推挙を……」
「してくれてもよいが」
と、弾正は、小山田備中の顔を見、山本勘助に視線を転じた。二人の意中を計る眼には疑惑の影がある。
「仕官したいとならば、わしが使うてやる。わしが主では不足か」
備中守が髭をひねりながら言った。
牢人者は微笑を含んだまま、決して、と軽くいなした。
「食邑に望みがござるゆえ」

「ふむ、いかほどじゃ」
「お屋形さまに申し上げまする」
信玄は甲斐にいる。村上義清を捕えても、甲斐に護送することは、まず無い。御威光に服して、所領を削られ、あるいは本領安堵で分国たることを承認されるには、時期がある。
それも、これだけ戦さを重ねた上では、栄光を保持している間に、第三者の扱いを入れて和議をするか、自ら降り御前に膝行して安堵を願うしかない。
支城を次々と失い、本城を陥されて、戦力の大部分を費消したあとでは、降人となっても、切腹を許されれば目つけものだ。いまの義清の立場では、斬罪の上、梟首というのが衆目の見るところだ。
況や、越後の長尾景虎の動向が、武田方には最大の関心事であり、村上氏の傘下の地豪たちにとっても、旱天に慈雨を待っているようなものだから、ここで、村上義清の首こそは、武田の勝利と威大さを誇示するに不可欠の〝見世物〟でなければならなかった。
その首を、
（幾らで買えというのか）
三人は、不遜なまでに、自信に充ちた牢人の顔を凝っと見た。

四

「まず……」
「……」
「二百貫！」
あっと諸将たちは、一瞬、呼気を洩らしただけで言葉が出ない。
二百貫といえば、山本勘助の知行だ。はじめ百貫という話を、勘助は奇略を弄して、二百貫にせり上げた。
当時、収穫量は石で数えない。田の段別、領地、知行の納租の高さもなべて貫で積る。これは銭の貫目から起ったもので、一文銭一千枚を一貫という。貫は緡の意味もあって古代支那では一千枚を一緡にして一貫というところから来たものだ。鎌倉の末から始まって室町時代、分米を銭で代納する分銭のならわしから、知行を貫で数えている。
その二百貫をくれというのだ。
「ふむ」
小山田備中は皮肉な笑みで、唇の端をまげ、また髭をひねった。
「二百貫とは大きく出たな。その知行、何に使う？　見れば小者一人居らぬ。馬一頭持たぬ？　一人身を養うには十貫にても過分であろうが、どうだの」

ねっとりと嫌味な調子である。
「必要となれば、小者でも家来でも、召抱えましょう。甘きにつく蟻のようなもの。されど、有能の士というものは、ざらにはいませぬでの」
この男のほうでも負けてはいない。天下に名の知られた武田の将星を前にして、毫もひるまぬ。むしろゆとりさえある。
「二百貫頂戴せねば、御奉公仕る気はない」
「奉公せよとは申さぬわ。義清の居所さえ吐けば、応分の金銀はくれてやる。布令の通りじゃ、違いはない」
「はした金は要らぬ」
かれは腰の革袋の口をあけると、ざらりとぶち撒けた。眩ゆいばかりの判金、粒金、ゆずり葉銀（丁銀）などが、みんなの目を射た。
「……」
その顔をじろりと眺めまわして、おもむろに革袋へさらいこむと、
「それがし、永年の望みは、明君にお仕えすること。一かどの武将たらんこと。されば御当家お屋形こそは、と見込みましたるもの、この儀如何でござろうか」
「推挙はする」
備中守は吼えるように言った。

「二百貫……」
「そのように申し上げよう」
「忝けなき……」
「待て、礼は早い。義清めをこの膝下に引き据えての上じゃ」
「いかにも」
自信あり気な牢人にかぶせるように、はじめて、勘助が、口をひらいた。
「念を押すようじゃが、義清は……生身であろうかな？」
「生身でござる」
同じ梟首するにしても、生身のほうが世間への効果は大きい。斬首にしても、磔刑にしても、見世場が派手で視聴を集め得る。
「生身で捕えおうせたならば、望み通りに、とり計らおう。われらが約定する」
「約定？……アテになりますかな」
「ぬ！」
ぱっとまた高坂弾正が立つのを勘助は押えて、
「わしらの約定がアテにならぬと思うか？　すりゃ、どうすればよい。どうすりゃ納得する」
「文書でお願いしたいな。お歴々の花押があれば、まず、アテになる」

「よかろう」と、これにも勘助は鷹揚にうなずいて、「義清を捕えてからだ」
さすがに、これ以上は、牢人も押しようはなかった。
「ところで、そちの名は聞いていなかったな」
「伊賀喰代の生れ、天堂耳介と申すもの」
「伊賀の……」
卒然として、勘助は昨夜の醜態を——巧緻な忍法を思いだした。
伊賀侍と伊賀忍びノ者は、必ずしも混考されることはない。伊賀といえば忍びの巣窟のように思うむきもあるが、この時代でも忍びを生業とする者、千人を出なかったろう。伊賀ときいて忍びノ者を聯想させるほどの人数ではないし、勘助にしても、昨夜のようなことがなかったら、あの屈辱を脳裡に再現させることはなかったにちがいない。
ムクロジが自力で脱け出して、お千世を連れ去った——とは、勘助も考えてはいない。
手練の甲賀忍衆《黄金虫》をあんなに巧みに仆した上に、勘助の意識を喪わせ、剝ぎとったものを、そっくりムクロジに着せて、厳重な三つの木戸を突破したのだ。
並々ならぬ忍法——それは幻妖とさえ呼べるものであった。
（こやつが？……）
凝っと見据える隻眼を、天堂耳介は笑みすら含んで見上げている。
（こんな奴が？）

という思いが、ちらと胸を掠めた。

あれほど大それたことをする漢とは思えない。俊敏、狡智、残忍、聡明——憎いほどの手並を、

（こやつが持っていようか？）

見るからに並の顔である。目も鼻も唇も。眉毛も普通だし、顔も瓜実型だ。どこといって特徴がない。

その特徴のなさこそ、

（伊賀忍びノ者か！……）

と感じたのは、この男が足軽五十人と高坂弾正に守られるようにして、村上義清を捕えに行った後である。

五

忍びに〝窶し〟ということがある。〝変化〟である。時に女になり、時に老人にもなる。愚鈍な農夫にもなれば、小才の利いた旅商人、あるいはいかつい武士。山伏、神官、傀儡師——さまざまに変化せねばならぬ。

あらゆる色をこき混ぜれば、灰色になるように、多勢の顔を集めて、その人数で割れば、平均値が出る。特徴がないからこそ、特徴を作れるのである。

（だが、なぜ二百貫にこだわるのか？）

疑問はそこだった。

仕官することで、武田家の内情をサグルのなら、二百貫取りの必要はない。

すると、ただの牢人か、その言葉通りに、漂泊の半生に嫌気がさして、このめぐり来た好機を、生涯の転機とすべく、大きく吹きかけて来たのか？

（おれと同じように……）

そうかもしれぬ、と思った。それなら納得がいく。ただ、二百貫で売り込むからには功が小さい。あとあと大手柄をたてるだけの自信があるのか。

勘助のときも、大勢は反対している。反対せぬ少数の者も、いい顔は見せなかった。かれの面目が立ったのは、仕官の翌天文十四年奇計を以って箕輪城を陥し、さらに翌年、佐久に入って志賀城を陥してからといっていい。

（ただのはったり屋であろう）

村上義清を足軽らが運んで来たときに、そう結論を出した。

義清は、全く無抵抗だった。

病気の身を横たえていて、山駕籠でなければ運びおろせなかったほどだ。もしも、この伊賀侍天堂耳介が、伊賀忍者ならば、足軽たちを必要とするわけがない。

「如何いたそうか」

小山田備中はとぼんとした顔を、勘助にむけた。それは、問いかけるというより、もう定まっている相談を、確認するという表情だった。

以心伝心というほどではなかったが、事実勘助の心にはあれこれと思案がゆき戻りしたのであったが、結局、二人の考えは同じところに逢着していた。

勘助は隻眼で応えた。

「心得て居ります」

「始末を……」

「仲々の者と見受ける。されば、一応、したためましょう。連署じゃ」

「ふむ……虫か」

「ま、そのようなところ」

異相が歪んだ。勘助の顔は、感情があらわれたとき、喜怒の区別がつかぬ。声音か態度で判別するしかない。

文章は勘助が書いた。達筆である。

右ノ者、伊賀喰代の天堂耳介と申し御奉公を申し出、格別の働にて、村上義清召捕の手柄……

意外なほどだった。讃辞を並べた推挙の文章は信玄を動かすにちがいない。二百貫という点も明確に申し出てある。疑う余地はない。

「義清を甲斐へ送る、おぬしも参るがよい」

勘助は足軽二十人をつけた。小頭は植村兵衛、多田久左衛門である。

一行はその日のうちに出発した。植村と多田と天堂は馬上で、義清は山駕籠で運ぶ。その夜は丸子城に泊った。

城主丸子平内は村上氏の息のかかった土豪だったが、武田氏の侵入により早くも降って、いまでは土屋右衛門尉が城将となっている。

千曲の支流依田川の上流で内村川を分ける小高い山頂に丸子城はある。

（何かある……素直に渡しすぎた）

天堂耳介の天耳は与えられた宿所に横になったまま、心眼を開いていた。

聞える。

夜の音だ。

深夜の山城は寂として、依田川の瀬の音が忍びやかに夜の底から這いのぼってくるくらいである。本丸は六百メートルから上だが、この辺はすでに五百メートル以上の高原だから、馬の背のような丘陵という感じしかない。

宿所にあてられたのは、いまの腰越の辺で三ノ丸であったという。

東南の麓が、依田川に面して平坦地になっていて、侍屋敷が並んでいた。日ごろはここに住んでいて戦さとなると、まず川を挟んで戦い、最後は本丸に籠る、というのが山城時代の戦法で

ある。ほかにも屋敷の址は辰ノ口、横辻などにもみとめられる。

この腰越のお長屋のまわりは篝火を焚き、夜番を立てた。万一、村上の遺臣が義清奪還を企てて、夜討して来ぬとも限らないからである。

むろん、義清護送の山駕籠というのは秘密だった。足軽らは弓に矢をつがえ、槍の鞘を抜き、刀をぎらつかせて道中して来た。

白昼には、異常がなかった。といって、夜陰にも危険がないといえるか。

(あの酒には痺れ薬が入っていたようだ)

灯を消したあとの闇の中に、心眼をひらいて、伊賀ノ天耳は、凝っと夜気に身を浸している。

くノ一狂い

一

(——忍者の足を洗うて……)

それが随分前からの望みだった。

喰代ノ天耳といえば、伊賀では知らぬ者はいない。忍びノ者としての名声と、それにふさわしいだけの、収入はあった。

が、天耳は夜に生き、闇を友としての生活が、つくづく嫌になっている。

如何に巧みにやり、仕事を完璧になしとげても、幾ばくかの鳥目にありつくだけで、そこには何も、残るものがない。

(誇り?)

それも、ある。常人には為しとげないことをやったという誇り。それも、しかし、闇から闇に葬られるだけのことだ。自分の胸を自ら慰めるだけのことだ。なかまも、褒めはしよう。だが……。

(それが何だというのだ、ただそれだけのことだ)

天耳は、若いころ、はじめは忍びとして一人前になることに熱中した。努力は惜しまない。人に負けることが嫌いで——天分もあったろうが、少しは名の知れる忍びのワザ師となった。

が、所詮、忍びノ世界にも、階級がある。伊賀四十九流という。伝統は上忍の家がらを定めている。下忍は所詮、下忍である。ワザがすぐれていても、上忍にはなれぬ。得た報酬も大半はカスリ取られる。

天耳は伊賀を離れた。そうした上下の階級に甘んじることが出来なかったのだ。

出奔するに就いても、一応の手続きは踏んだ。上忍である喰代ノ甚蔵が死に、後継者を子と甥が争っている隙に、出たのである。天耳は上忍を裏切ったことにはならなかった。

(武士になれば……)

名も揚る。出世も出来る。

若年のころ、斎藤道三の異常な、しかし魅力的な出世の次第を聞き、その親子の相剋も目の辺り見た。陰惨といえば陰惨だが、城を欲しがり、国を支配する喜び。

そこにこそ、男と生まれた生甲斐があるような気がした。

忍びノ者の金銀に昂奮する姿とは、又別の世界が——権勢欲といい支配欲というが、所詮、男の世界が争闘と無縁になれぬのがこの世ならば、力一ぱいに、武士の世界で延びるこそ、生甲斐というものではあるまいか。

そこには、闇はない。

白昼の光りがある。光りのもとで、武士は戦う。男の世界だ。負けても本望ではなかろうか。天耳の〝武士〟に対する憧れは、筆者が百万辺、繰りかえしても、常人の理解には遠い。闇に生きる忍者の哀しみを知らねば、わからない。

（村上義清の生身は、おれを二百貫の知行とりとして迎えるだけの価値はある）

なぜならば、かれは義清を越後に逃そうと思えば、出来た。それをせず、武田に引き渡したのだ。喰代ノ天耳の〝武士への夢〟への架け橋として義清のからだは、二百貫の価値はある。

お千世のことは考えぬ。

いや、考えまいとした。忍びノ者に情は禁物であった。それに、ムクロジが陰嚢を切りとってしまった以上、お千世には役立たぬ夫。男の価値はない、中性になっている。

（おれが二百貫とりの身分になるための、恰好の土台だ……）

そういう気持しかない。

はじめ、お千世を救いだしたのも、或は、義清の行方を知っているのではないか、と睨んだからにほかならぬ。

飼犬や愛馬が、主人のもとに走るように、お千世は義清の隠れ場所に行くかと思った。

お千世が、全く知らないとわかってから落武者詮議の手が延びていない山中を捜したのである。発見したとき、一足違いでムクロジが陰嚢を切り取った直後だったのも、不幸中の幸だった。

余人だったら、ああした適切な外科治療（荒療治ではあるが）はなし得なかったろう。

天耳が、天堂耳介になるためには、義清の生身が入用だったのだ。

同じ武士になるにも、下っ端にはなりたくない。武功次第で、足軽から大将へ出世できるというのも、甘い考えだ。

乱世は、力という。強者が正義という。

その一面をとらえて、誰でも手柄を立てれば出世できると思うのは間違いだ。朋輩同志の確執や、情誼の蔭のせり合い、姑息で狡猾な掛け引き、陰湿なものがある。

忍びの目は、それを、何度も目撃している。

勘助が信形の馬の腹帯を傷つけさせて、乱軍のうちに落馬を計ったなど、ありふれた手だ。

朋輩の刀の目釘を抜いておいたり、鍔元にヤスリをかけて、鎚を元通りにしておく。斬り合いになって、力が加わればぽきりと折れる。

乱軍のうちに背後から槍で刺すなど、ありふれたことだ。弓などは弦にちょっと傷をつけておけば満月に引き絞った刹那に、ぷつんと切れる。

こうした蔭の工作、朋輩間のねたみの行為を、闇に潜む眼が、どれくらい目撃したかしれぬ。戦場で手柄を樹てることだけが、武将への道であれば、他人の手柄を横奪りするのは、頭の良さということになる。拾い首、盗み首など日常茶飯事だ。一番乗りは槍先の武功第一とされるが、戦場横目と組んで一番二番の記帳を誤魔化すのも、事実あった。

そうした競い合いは愚かしい。なるのなら当初から武将の座に坐らねば。

二百貫は高くはない。武田の老臣には、千貫とりがざらにいる。天耳の智慧才覚と目くらましはいうまでもない忍びのワザがあれば、二百貫から千貫の座は夢ではない。

繰り返していうが、木下藤吉郎の昇進は、屈辱に耐え、侮蔑に甘んじたことと、偶然の積み重ねが、好い方に作用したので、誰でもあの努力だけでは同じコースを辿れるものではない。

（二百貫と聞いて、勘助の片目が急に憎悪を含んだように思ったが……）

信玄への推挙の文書を下賜したときは声音はにこやかであった。この矛盾はなぜか？

もう一度約定の文言を確かめてみよう、と、思ったとき、どこかで、音がした。

衣ずれの音であった。

二

（来た！）

深夜である。女が近寄る用はない。宿所の世話は下人の小者がした。

さやさやと、廊下を刷く絹の音は、深夜の静寂のなかでは、妖しい意味すら持つ。男の胸をときめかさずにはいない。

闇のなかで、しかし、天耳の天堂耳介は眼を閉じていた。六感はしきりと働く。

一ノ声アレバ二ノ声ヲ聴ク……と伊賀忍秘抄は教えている。甲賀では、一ノ影ヲ視テ二ノ影ヲコソ識レ、という。

一ノ声も、一ノ影も、それが《虚実雑俎》に説くところの、虚声、虚影であることが多いからである。〝虚〟あらわにして、〝実〟は背後に在る。忍法の初歩である。

いま。

心眼は、八方の闇に、〝実像〟をもとめ、天耳が、天耳の渾名を持つ所以たる〝六道衆生の言語及び一切の麁細の音をも能く聞く〟その地獄耳をとぎすまして、四辺に忍び寄る音を聞こうとしていた。

（女だけか？）

他に誰もいない。

衣ずれの音だけが近づいてくる他、闇に潜む者はいない。
「――もし」
衣ずれの音がとまり、女はそこに膝をついたようである。
「もし天堂さま……」
あたりを憚かりながら、戸の隙間から呼びかける声に、妖しい女の息づかいまで感じたのは、思いすごしか。
「……」
天耳はなおも、無言である。
迂闊な返事は、おのれの所在を明らかにしおのれの心中まで、相手に伝える。このとき天耳の姿は、すでに寝床に、ない。
一跳して、部屋の隅に踞っている。
夜衾(よぶすま)が、あたかも、かれのからだを抱いているようなふくらみを見せているのは、伊賀忍法《虚影百体》之五ノ三にある。〝空蟬衾(うつせみぶすま)〟というもの。
女人ひとりと雖も油断をしないのが忍びの者の心得である。板戸が閉じられていても、その僅かの隙間からでも、うす刃の手裡剣が飛来することがある。
室内は初秋の闇が籠り、常人の目には、衾の位置もわからない。が、忍びノ者の夜目には判然とする。もしも、板戸の外の目が忍びノ目を持つなら、空蟬衾にふくらんだ夜具は見えるはずであった。

「天堂さま……」と、また女は呼んだ。「夜分、お許し下さいまし……」
「誰か?」
一夜の仮宿に立ち寄った丸子城である。忍んでくる女の心当りは、ない。
「もし……お許しも乞わずに、夜分に忍んでまいりました、女の気持、お察し下さいまし」
闇のなかで天耳の顔が、ほやりと弛んだ。
わかった。あの姫だ。
天耳は戻っている。空蟬衾は解け、天耳の姿は、元のように寝姿になった。
(あの姫が? 何をしに……)
その疑問は胸に残っている。
「天堂さま、御返事を下さいまし、女のここまで思い詰めた気持を、嗤わないで……」
切々と訴える女の言葉には、赤い炎が燃えているような、烈しささえある。
おそらく、その白い肌は、情感のたぎった桃色に染まっていることであろう。
「天堂さま!」
「――どなただ」
はじめて天耳は応えている。
「天堂耳介の許に、夜陰、訪れてくる女人は知らぬが……申されよ。どなただ」

「わたくしまんでございまする」
「まん姫が……」と、意外な声で、天耳は言った、「まん姫か、真正……」
「はい。ここを、お開け下さいまし」
「はて、心得ぬ。まん姫どのに御来訪賜わる理由はないが……」
まん姫は、この丸子平内の娘だ。夕刻、城に着いたとき、出迎えた中にいた。伏目がちにしていたし、色の白い豊頬の温和しそうな娘だと思っただけである。常の天耳だったらいたずら心を出して、夜這いしたかもしれぬ。
忍びノ者の特権である。情欲を持てあますということは、かれらに、ない。したいときにする。姫であれ、人妻であれ、かれらは性欲を満足させることに於ては、将軍以上の権力者といえる。夜は、かれにとって、自在に活動出来る世界である。他の場合、忍耐を以って第一義とするだけに、女を犯す喜び、だけは自由であった。犯したいときに、犯す。
そのゆえにこそ、他の場合には、忍びに忍ぶ。忍者は常に、性欲に対して、おのれを冷静にしておかねばならぬ。動じることがあっては、目的は遂げられない。
そのいたずら心が、湧かなかったのは、やはり、
（二百貫の武将の座）
を得るかどうか。その緊張があったせいであろう。
その、まん姫が、自分の方から忍んで来たとは。

三

ちらりと見ただけで、女の恋心とは、これほど熾烈に燃えあがるものか。
（悪くない……）
遠慮はせぬ。遠慮する意味は、何もない。
この時代、男女の性の享楽は、茶飯時にちかい。況や、女に持ちかけられて、手を出さぬには、相当な理由がなければならぬ。
天耳は、言った。
「入られよ、戸は開いておる」
板戸は杉の厚板である。重く軋った。
はじめから、戸は開いていた。故意に戸閉りしはしない。開いていることは常人には無用心であるが、忍者や兵法者のような心得のある場合は、侵入者への用心がある。侵入者は、用意があると見る。
もとより、裏の裏をかかれることもある。そのときに、闇の礫を避けるだけのワザを持たねば、この手は用いぬ。
「御免なされませ」
姫は入ってきた。

挙措も楚々として、羞じらいを含んでいる。白綾の小袖が、ふとお千世を思いださせた。お千世のその姿を見たわけではない。お千世は男装していても、育ちの良さと気品が感じられる。

「灯を……」

「いいえ！」はげしく姫はうち消した。

「点けないで！」

「なぜだ？」

「羞しい……」

袖におもてを埋めるようにし、まん姫は肩をふるわせた。

「そなたは……」

「何も言わないで、抱いて下さいまし」

がばと身を投げて来た。薫香が夜気に強く漂った。

抱きながらも、しかし、天耳の六境は、女に溺れぬ。裾をひらき、帯をゆるめて、女体は衾のなかに入ってきた。脚をからめる。冷たい。その冷たさを補うように、はげしく身をもがき、その手はねばっこい執着を見せて男の下腹へおりてくる。

（この女は!?）

いささかの驚ろきはあった。

この楚々たる姫君が、これほど男をもとめる情念というものも意外だったし、これほど男に

狎れた仕草も意外すぎた。

その風情が如何に清げでも、処女だと信じたわけではない。

それをもとめるほど、飢えてはいない。欲しければ、いつでも随意に小娘の寝姿を襲える忍びノ者である。

だが、たとえ、男は知っていても、これほどの積極的な行為に出るとは思っていなかった。

その驚ろきには、望外の喜びも含まれている。男の性欲は一方的な行為に終始するよりは、反応の有無が喜びを深めることはいうまでもない。

女の柔らかい手が、指が、妖虫のように下腹部を這い、ふとももの毛の感触を愉しむように、まさぐっている。

その指が、わざと局部を避けているのも、遠慮や羞じらいではなく、男の感情を急速にそそりたてる技巧である。

手や下肢の動きが思いがけなかったようにその唇も、大胆に男の唇をもとめてきた。歯をカチカチ鳴らして、頬をすりよせてき何か囁きかける。

「天堂さま、天堂さま……」

うわごとめく、その声はもう淫らな息づかいに乱れている。

手はつかわなかった。女の手が、下腹部から腰にまわされ、ぴたりとふとももとふとももが合わさると、微妙な陰阜の草むらが、むぐらからみになって、ひくひくと動く。

まるで生きているような陰唇の動きであった。濡れていた。濡れた部分は、天耳のそこをしわしわと濡らし、官能を呼びさます。

忍びノ者が、女を犯すワザを識るのはうつつにする必要が間々あるからだ。

おのれを怒張させるのも、任意である。したがって誘いに対して、冷静を保つことも出来る。女が頻りに陰唇にものを言わせようとしているのに、天耳は、自ら、のった。たけだけしいまでに、いきりたつものを、待っていたように、陰口は咥え、容れた。

刹那、火のような息を洩らして、ひしとしがみついている。もう、姫御前の身分も忘れ、白い肌は、妖美な白蛇のようにうねり、まつわりつき、狂おしい動きに汗を噴いた。

「もっと、もっと、もっと！」

姫はあえぐ。

天耳もその狂瀾のなかに巻きこまれてゆく自分を感じていた。

これだけ燃え、これだけ狂う女の肌に、これ以上の警戒を抱けというのは、酷だ。他に影はない。気配はない。天耳も、溺れた。

まん姫の肌は柔らかく、かれを咥えて、しとどに濡れる肉ひだは、まるで、それ自身生きているもののように、緩急の巧緻な呼吸でかれを官能の淵に惹きこんでゆく。

俗に、仁王を討つは小便どき——という。仁王ほどの豪ノ者にも、隙が生じる時がある。小便をするときは、如何なる者も、日ごろのワザは働かぬ。

四

排泄作用には忍者と常人の差はない。伊賀忍者、天耳もまた例外ではない。

あられもない呻きを奔らせ、白蛇のようにまつわりついて、恍惚に狂う女体は、必然的に天耳の官能をあふり、情意は、潮のように盛り上った。

あの瞬間——

天耳は、声は洩らさぬ。射精の一瞬が女の狙いだったようである。

小便を中途で区切るくらいのことは、耐忍の一として、習練する。が、射精を中途で止めることは出来ない。

洩らした瞬間、さっと、姫の手が枕元を掠めた。

女体にも反応はあったのである。体液が温かく怒張したものをくるみこむように、二度、三度……湧き出るのを、確実に感じとっている。

そのかぎりに於て嘘はない。

女も洩らした。男のほとばしりを膣に感じとった刹那に、女の手は枕の下を捜っている。

常人にはわからぬ素早さである。

忍者にしても、射精の一瞬には、通常の感覚がぼけることはいうまでもない。その〝虚〟に、女の手は動いた。

それが当初からの狙いだったのか。

「姫！」

ムズと腕をつかんだ。

射精と恍惚と、余燼に身を浸す陶酔もまた女が狙っていたとしたら、失敗といえる。

唇がはなれ、唾液が粘く蜘蛛の糸のように引いたとき、口中から、何やらおちた。

丸い。

酸漿（ほおずき）の実のような。

口中に含んでいたのである。天耳の頬にすべった。

やはり、姫のほうも——いや、ここまでの行動から見ても、女忍ということはわかる。くノ一変化しながら、泉のように噴きあげる快感の温かい愛液には抗し難かったのかもしれない。

勘くとも、その行動は、〝まん姫〟に終始しなければならなかったはずであった。

口中から、こぼれた酸漿には、おそらく、痺れ薬でもこめられていたろう。口を契りながら、うつす。巧みにやらねば、おのれもまた、毒に痺れる。巧緻なくノ一は唇を合わせ、舌で相手の口腔や歯肉をねぶりまわしつつ、酸漿を嚙ませるように送りこむ。おのれは吸わず、急速に麻痺してゆくあいだ、唾液を嚥下しない。粘膜の吸収は早いから、迂闊に用いれば、おのれが先に仆れる。

この酸漿をすべり落したのも、天耳の逸物が巨大に怒張し、女体を歓喜させること、予測以上のものがあったからであろう。

女が涎れを垂らすのは、並々ではない。況や、その最も緊張すべき瞬間に、一部分でも弛緩したとは。

「姫ではないな」

天耳の射精は終った。

言下に、するりと女忍は抜けた。白い肉塊は衾を躍らせて、横に飛んでいる。

「やらぬ！」

冷気が走った。

抜き討ちに、天耳は女体を斬った。腕いっぱいに伸した脇差の鉄子は、なめらかな肌を裂いた。一糸まとわぬ肌がもんどりうつ。

だが、ふたたび床を蹴ったとき小袖を摑んでいる。

二転。黒髪が天耳の顔を蔽い、視野を昏くした。

ひたと、天井に貼りついている。

大ノ字になり、背を天井にあてて、健やかな四肢は大きくひらき、うず高い胸乳と下腹部の茂みを、天耳は頭上に仰いだ。

その左の胸に、スーッと、紅絹の糸を張るように、紅筆で線引きするように、ひとすじの紅が走った。

血の筋であった。

ななめに左の腕のつけねから乳房の隆みを裂いて一尺ばかり——その最後のところからぽたり、と血の滴がしたたった。

一滴……二滴……三滴……

皮膚の裂け目に滲み、スーッと流れて、さながら小雨を集めた雨樋の裏にしたたる滴のように、間を置いては、ぽつり、ぽつり、と落ちてくる。

血の花。

ぱっと、衾の上に散る。鮮血は真っ赤な花が咲いたようであった。その花びらは、ぽつり、と小さなものから、度ごとに大きく、ひろくなってゆく。

滴、滴、滴……

次第に間隔をちぢめてゆく。加速度がついたように、鮮血の花びらが大きくなるのは傷口が深かったのか。

手ごたえは、殆どなかった。

意外なほど〝くノ一〟の身ごなしが軽捷だったのである。

あの情炎に身を投げて、もだえ狂った肉の重さを感じさせない、一片の羽毛のような軽やかさだった。

銑子は、美しい皮膚を、僅かに掠るように裂いたにすぎないと思ったのだが——

潮時で出血がはげしいのか。咄嗟に思った。

それだけ、天耳の見方は甘かったようである。

次第に速度を増す血の花とその量に、はじめて不審をおぼえたときは遅かった。

「逃げたか！」

裸身は消え、ふわりと、小袖が舞い落ちてきた。

天井には一匹の大きな鼠が釘打ちされ、タラリタラリと血を流していたのである。

五

（甲州くノ一か!?）

丸子城のまん姫に変化して、深夜に天耳を襲った妖美のくノ一の目的は何か。

枕の下から、天耳の胴巻が奪われている。

「鮮やかだったな」

何故か、天耳は衝撃を受けた様子がない。

胴巻には幾らかの銀子のほか、れいの文書が入っていたはずである。小山田備中や山本勘助の連署になる、武田信玄への推挙のもの。二百貫文にてお召抱えのこと云々とあったのだ。

それを盗られて平然としているのは、何故か？

騒ぎ立てるどころか、一行に一言も洩らさず、朝を迎えた。

「天堂どの、昨夜は何やら女人が来たというが、羨ましい話だの」
植村が皮肉な笑いで、じろじろと見た。
「ほう、何故に御存知だ？」
「いや……小者が昨夜、ちらりと見たと申していたゆえ。で、首尾は如何でござったかな」
「楽しかった、と申しておこう」
あの肌は悪くない。たとえ、目的のために性の技巧を発揮したにしても、あの快楽はほんものだった。女も濡れた。濡れながらに、おのれを忘れず、目的に転じたのは〝くの一〟の心根である。
この女忍と再会したのは、翌日の昼すぎである。
丸子城を出て依田川を遡り、中山道へ出た。鍛冶足から大出の聚落を過ぎると道は急になる。村上義清の山駕籠が先にゆき、護送の足軽らが前後をはさんで和田峠にさしかかった。
三峰山と鷲ヶ峰の間の峠である。千百余メートル以上の高みで中山道一番の難所だ。ここを越えると、諏訪湖までは半里たらず。
その峠へかかったとき、空が曇ってきた。黒雲が奥鉢伏山の肩からひくひくと湧き出で見る見る袖を拡げるように空を蔽ってしまった。と、思うと、サーッと大粒の雨が落ちてきた。忽ち視界が霞み、棒のような雨が叩きつける。土砂降りだ。樹々がざわめき、風が頭上に渦巻き、唸った。

行列は乱れ、みんな、思い思いに樹の下に駈けこんでいる。
天耳も老杉の下に入った。豪雨はいつまでも続かない。だが、この雨は甚い。稲妻はなかったが、盆を覆えしたような凄まじさで、視界は一間先を閉してしまった。
そのとき、けたたましい嬌声がして、わらわらと女たちが駈けこんできた。
「まあ、ひどい雨」
「急に降ってくるんだからねえ」
「びしょ濡れになったよ、いつになったら止むのかしら」
若い女たち五、六人だ。華やかな小袖の文様や化粧の濃さから、浮かれ女とわかる。遊行女とも称われる、人の出盛る所をあてに歩きまわって、手当り次第に客をとる。
そうした女たちだ。雨気のなかに、蠱惑的な匂いと、蒸れたような甘肌の匂いがいり混って天耳を包みこんだ。
「あら、このひと……」
いまさらのように、女たちは天耳をふり仰いだ。
「お侍さま」
「いい男……」
五人の女たちは、目をきらきらさせ、玉虫の唇を濡れ濡れとさせて、天耳にまつわりついてきた。

十の眼が、五つの唇が、十の手が、天耳にすがりつき、抱きつき、からだを撫でまわす。

「おい、何をする！」

あっ、と思った。

老杉の幹を、突風が吹き上げるように、天耳の軀は駈け上っている。するすると追いすがって女の一人が、宙を飛んだ。横殴りの雨が渦巻き、二人の軀をさらったように見えた。

梢で悲鳴が起った。そして、その悲鳴は、あたかも強弓に射られた怪鳥のように、かん高い語尾を引いて落下してきた。

「殺られた！」

別の女が叫んだ。

その叫びは、すでにただの浮かれ女でないことを告白したようなものであった。

「逃がすな！」

その声は少し離れたところから聞えた。

五人のほかに、まだ居たのである。五人の女体は次の瞬間、宙にある。

沛然たる豪雨の中である。派手小袖が杉木立の中に跳々する姿は、灰色の飛沫のなかにまるで極楽鳥の群れが飛ぶにも似ていた。

幹から幹へ——、梢から梢へ——裾が風を孕み、羽を拡げたように甲州くノ一は飛ぶ。

六

「逃すな！」と、叫んだのは誰か。尠くともこのくノ一集団の首領であることは疑いない。

それが誰かを見究める余裕もなかったし、その閑を与えぬ執拗な攻撃だった。

天耳に、はじめ途惑いがあったのは、

（なんのために？……）

この女たち——甲州くノ一とおぼしき一団の目的が不明だった。

かれを刺殺するのが目的だったら、どっと駈け寄ったときに出来たはずである。

天耳を、手練れの忍者と知っているはず。ひとたび、機をはずしたら、二度と、先手はとれぬ。

いまも——

追いすがった一人が、羽を失った極楽鳥のように落下したあと、別の梢から梢へ飛んで逃足の前へ迫った女が、大胆なワザをふるった。

天耳の眼前にぱっと小袖を飛ばしたのだ。

脱ぐ、なげる——さながら、投網を拡げるようなワザである。裸身を眼前に曝す危険を敢て犯しての捨身のワザだ。ぱーっと眼前いっぱいになって、包みこもうとする。天耳はこれを避けた。この甲州くノ一忍法独自の捕獲術《彩雲くるみ》という、羽衣十種の内である。これを

《匂い網》とも称うのは、六香を罩めたときである。忍法には密教から伝わる秘法が尠くないが、灌頂の際の五香といい、沈香、白檀、紫檀、沙羅々天木をさすが、これに鹿角を加えて、馬酔木で燻すという。この六香を含んだ小袖は、男の六識を容易に奪う。

すなわち、眼、耳、鼻、舌、身、意。この六感を喪っては、ものの用に立たぬ。巧みな女忍は、この小袖を拡げるや、帯、襦袢、腰布それらを以って、風に流れんとする小袖を自在に操る。

したがって、全裸となっても、敵の目に、おのれの恥部を見られるどころか、指先一つ見せることがないという。

この妖艶甘美な匂いは、まるで猫に対するマタタビの利目よりも甚しいといわれる。

天耳がこれを避け得たのは、咄嗟に、呼気を止め、脱出をはかったからである。

忍者は潜水の鍛錬には殊に時間をかけている。したがって、常人の二倍も呼吸を静止しておくことが出来る。如何に強烈な痺れ薬や毒物をふりかけられても、これを脱けることが出来るのは、猛火の中を潜るにも似た強みであろう。

林間ではあったが、やはり、雨中ということが、くノ一の《匂い網》には不幸といえた。六香の効果は日ごろの半分も出なかったのである。

天耳は容易に、逃れている。

呼気をとめただけではない。一瞬に太枝を切り放して、これをおのれの影とした。小袖は、

〝かれ〟を包んだ。刹那、そのまま女の裸身に飛びかかっていたのである。

天耳が二間離れた別の樹に飛び移ったときには、身代りをくるんだ小袖にからまれるようにして、その白い女身が、落下していた。

普通に梢から落ちても柔軟な姿体は、容易に、猿や猫のように激突を免れるのだが、身代りの太枝と小袖と帯が逆に命とりになったと見えた。

女忍は、地に落ちた瞬間、けものめいた悲鳴をあげた。

天耳は、猛然と攻勢に出ている。なかまの悲鳴によって、生じる動揺を衝いたのである。

（敵）

と、見たうえは、容赦はなかった。

梢洩れて飛沫く雨の中で黒髪がおどろに舞いあがり、裾が翻える。残りは四人。

ひょうひょうと、手裡剣が影をもとめて飛び、幹を削り、葉を叩きおとす。

豪雨は、尚、やむとも見えず、囂々と吼えて、あたかも、この男一人女四人の凄絶な修羅場を蔽い隠さんとするかのようであった。

その中で、確実に断末魔の絶叫が、二度つんざいた。

忍びノ者は、通常、死の恐怖も苦痛に際しても、常人のような声は洩らさぬ。そのための鍛錬である。が、豪雨と、そして、敵はただ一人、という安心感が、最後の忍耐を解くのか。

天耳が懐中に秘めた《川霧》と呼ぶ、けむり玉を投じたのは、一人は手裡剣で、一人はかれ

の転瞬の飛翔によって生じた同志討ちの刀に斃れた、ふたつの絶叫を聞いた直後である。

濛ッと、煙りがあがった。

暗灰色の濁煙である。層の厚い煙りは、爆発音がないだけに、奇妙な動きでみるみる林間を浸した。

「逃げるよう」

一人が悲痛に叫んだのは、天耳の影が濃煙の下を潜って馳走りすると見えたからだ。

「あ、そっちへ！」

もう一人のなかまに声をかけた。それが最後である。

彼女が見たのは、影か、まぼろしか。突然樹上から蔓の輪がおちてきたように、何かが首を締めた。

「うっ!!」

抗うこともできぬ。それが最後だった。だらんと、太い枝に宙吊りになった。甲州くノ一ともあろう女が、おのれの黒髪でおのれの首を吊り、おのれの体重でもって息の音をとめていた……

七

煙りの玉の成分は何か。

目にしみた。晴天の場合、夜と昼と、それぞれに用いる物に違いがあるという。その用途によっても当然、違いがあろう。

いま。

天耳の投げた物は、雨中というハンデにあって、持続の時間を短縮されたのは、やむを得ない。この豪雨は予測できなかったし、あくまでも受身の闘いであった。

雨にあっては濃煙が黄味を帯び、臭気を発したのも、意外な効果になった。

まるで、この妖煙が命じたかのように雨は漸く勢いを弱めてき、そうして林の中は静かになっていた。

天耳は煙りに乗って逃走したのか。

あとに残されたのは、全裸や、半裸やの女忍の死体である。小袖を着たままのもいたが、裾がめくれ、下肢のつけ根まで、あらわになっていた。白い脚がいたいたしい。

空が明るくなってきていたが、まだ残りの雨はしきりに降りそそぎ、葉末の滴が、ぽたぽたと、いや、ざわざわというほうが適切であろう、それらの死体の上に降りそそいでいた。

煙りはまだ未練げに、たゆたい、幹に葉にからまりながら、渦を巻いて動いていたが、そのあたりに見るかぎり、死体は四つ——

浮かれた女と見えた女忍は五人だったはずであった。

そして、もう一人、女の指揮者がいた……

天耳の影は見えぬ。と、見究めつけたのであろうか、ばさっと、怪鳥の舞いおりるように、降り立った。

濡れた黒髪がべたっと額につき、顔の半ばを蔽っている。が、それは、天耳が見れば、あっと驚くだろう。

昨夜の〝まん姫〟――まん姫に扮して寝所を襲ったあの女忍に違いない。天井にべたりと貼りついて、天耳を睨んだ大胆不敵な甲州くノ一。

その頬から血が滴っているのは、手裡剣が掠めたか、木の枝で傷つけたか。

「殺られた、五人も……」

暗然と呟やく。

が、その表情も姿も、敗北に悄気ているのではない。むしろ、その〝敵〟に対する憎しみを、嚙みしめ、心を固くしているようであった。

濃い眉根が、きゅっと寄せられて、四辺を窺っている。

(いま一つは?……)

不審がこの才走った女忍をとらえた。

五つあるはずのなかまの死体が四つ。闘いは林間数間のうちで行われている。出でても十間である。その範囲にないとはどうしたことか。闘いながら、なかまが樹上から落下して首の骨を折り、あるいは手裡剣を急所に喰ったのを見ている。宙吊りになった死体は、彼女が黒髪を

切断して、地におろした。

非情の忍者にあっても、せめても女忍らしい心使いであった。

(由加がいない……)

由加は手練れ者である。最後のうちに残っていたように思う。

(あの男を追っていったのかしら……でも)

悲鳴を聞いた。由加も殺られた、とさっき感じたのだ。とすれば、傷を受けながら、必死に追っているのかもしれぬ。

そういう判断に、やはり甘さがあったと気づいたのは、二十間ほど林の奥に、濃い臙脂の地色に七色紫陽花をあしらった派手な小袖を見たからだった。

(あそこに……)

たしかに、由加の小袖。雨に打たれて、臙脂が一層、濃く林中の仄暗い中で、ひときわ華やかに見える。華やかなだけに、敗北の思いは強い。

逃走する天耳に追いすがって、力尽きたのであろう。そう思って近づいた。死体の上にうずくまったときである。

突然、死体がはねた。

「あっ!?」

小袖が翻えり、女忍の足は宙に浮いた。不覚。濡れた草が顔を打った。なかまへの同情と憐

憨は、嘗ってない隙をもたらし、その虚を衝かれての動顛は、女忍のワザのすべてを忘れさせたのである。

（由加が？……）

由加ではない。それが男の力だと知ったとき、彼女はうつ伏せに押えこまれていた。

「は、放して！」

その声には、力がなかった。

からだを捻られた際、相手は巧妙に、腕のつけねを、はずした。両腕である。

忍者は自ら、脱臼する。捕われ緊縛され、もしくは狭隘な個所をスリ抜ける際など、自由に五体をはずし、又、嵌める。人間の軀は訓練と習慣で、かなり異常なことも出来るがその代償に甘んじなければならない。

譬えば、臭気になれた嗅覚は、淡いそれには鈍く、仄かな香気を感じ、嗅ぎ分けることが出来ないように。

脱骨、嵌骨が自在だということは、一度もその経験のない骨組みよりも、外れ易くなっている。これは如何ともし難い。女忍が、その虚を衝かれて、両腕を肩から外されたのは転瞬の間のことである。

盤石の重みが、背骨を押し、平蛙のようになって呻いた。

「昨夜の復讐か」

こう囁いて、天耳は桜色の耳たぼを軽く咬んだ。愛の動作である。女忍のからだに何か動いた。昨夜の強烈な男の愛撫が——それは残忍なほどの激しいそれが、身内を熱くして甦った。

ぽっと耳たぼが、赧らんだのを、男は見た。

「ち、ちくしょう」

女忍は口走ったが、心とは裏腹な虚しい叫びであることを、若い女体の疼きがあらわにしていた。

「ちくしょう！　どうするか覚えておいで」

「こうしてやるさ」

言下に、するりと袴が脱げた。

八

脱げたのではない、脱がされたのだ。

冷やりと、雨滴がおちた。この女忍だけは小袖姿ではない。おそらく、丸子城出立のときから尾行していたのであろう。頭巾こそないが忍び装束である。その袴を、さっと脱がされて、まるい尻を白く剝きだしてしまった。

昨夜の思い出をとどめた臀部である。

女忍としての鍛錬は、肉質をしまらせて、贅肉の醜いだぶつきはない。処女の恥じらいと慎

ましささえ、その白桃の実のような可愛らしい臀部にある。

男の掌が、充分な余裕と、愛着をこめて、双つのふくらみを丹念に這いまわるのを、女忍はどうするすべもなかった。

なまじ、下半身は自由であるだけに、男の掌の執ねこい粘液質の動きが、鋭敏に感応するのだ。哀しい女の性か。

「……」

小さな声を洩らして、女体はうごめいた。

男の手は動きをやめない。双つの丘を、愛でて這いまわり、ときどき、きゅっと抓ったり、するりと谷間をすべりおりる。そのあたりにも美しく、神々しいまでの肉塊の谷間に、陰靡なその部分に、指が触れそうになる。

仏門など衆道の陰語では、そこを〝菊花〟又は菊ノ座と呼ぶ。けだし、括約筋の襞の形状から来た称であろう。

男の手は、その〝菊ノ座〟を嬲るが如く避けるが如くに、這いまわっては、官能を掻きたてゆくのだ。

そのたびに、ひくっ、ひくっと、菊ノ座は戦慄し、締まり、臀部ぜんたいの皮膚もまたおもしろいほどの一張一弛を見せるのである。

もとより、天耳の目はそこを観賞しているのではない。かれの掌は、さしたる技巧というのではない、その程度の愛撫で、意外な反応を示す女忍に意外の感を抱いたにすぎない。

（この女……うしろに弱点がある）

忍びの六識が、そう観じた。

人間の性感帯は、だいたいに於て同じ個所ではあるが、境遇や習慣で、それぞれに強弱がある。

（前は、強い……）

昨夜のあの愛撫の際に感じている。

並の女なら、天耳の指先にかかれば、早いものは三たび四たびのなずりのうちに、漏らすのさえいる。にせ〝まん姫〟はよく耐えたほうである。

それにくらべて、この臀部――菊ノ座の敏感さは、愚かしいほど、もろい。

「どうだ、まん姫どの」

諧謔で女心を解きながら、天耳は、また耳を咬んだ。

「あっ！」

まるで電気に触れたように、女はうなじをそらせる。蝮のかま首のように。白蛇のように女体はうねった。もはや情感を呼び醒まされて燃え沸った肌は、小雨のなかでも桜いろに火照り、時も、場所も――いや、使命すら忘れたようであった。

伊賀では古来、女忍を多く使わない。所詮女忍には限度がある。女が女でなくなったとき、

男の忍びと同等の働きも出来ようが、それはもはや〝くノ一〟ではない。

女忍が女であるところに、多くの利点は否めないが、その反面、欠点が尠くない。天与の性器は受動的であることに抗いようはない。

「まず聞こう……」

天耳の囁きには、淫らな匂いがある。

耳たぼを軽く咬みつつ、頸すじを、舌が優しく執拗に這いまわり、もみあげのあたりに唾液のあとを印しながら、耳へ入ってゆく。

「おまえの名は」

「……」

「おまえの名だ」

と、指頭が菊ノ座をなずった。

「あっ……お、お巾」

「おきん？　甲州くノ一だな」

念をおした。指は菊ノ座を通り越して、陰唇にせまっている。泉に近く、溝にはあえかな萠草がある。

「甲州だな？　申さぬか」

指頭は陰唇を強く捺した。

「あっ！……甲……」

「甲賀ではない。おれの目がそれほど節穴と思うか。甲州だ、甲斐だ、武田の軒猿であろうが。どうだ！」

「あっ……はい」

「よし。そこまで洩らしたら、全部はいてしまえ、山本勘助の命令か」

「……はい」

「目的は何じゃ、おれを、殺れというてか」

「……」

「吐け！」

ずぶりと指が入った。太い指二本。高指と食指である。女の膣は本能的にすぼまる。

「あ、あの……」

「殺れとか？」

「成らぬときは」

「成らぬ？　何がだ、その目的とは？」

「はい……」と、もう、女忍お巾は夢見心地になっている。白い双つの丘はくねくねと動き、それに合わせるように、二本の不逞な指は律動していた。指頭はすでに濡れている。

九

「あの……お屋形さまに宛てた文書を」

お巾は遂に吐いた。

いのちに代えて守らねばならぬ秘密を、戒を破って洩らしたことすら、しかしこの敗れたくノ一忍者は意識していないようであった。

ひたひたと盛りあがる、言いしれぬ性の喜悦で、殆ど無我の境地にある。

男の指はさながら尤物と変らぬ逞しさで、女のいのちを責めている。あるいは激しく、あるいは緩やかに、膣壁をさぐり、愛撫し、陰核を敲き、陰唇に戯れる。それは上手とか巧緻とかいう程度のものではない。いうなれば、神技。

（――あたしとしたことが）

お巾は、陶酔のあとで、ぼんやりと考えていた。

何やら言い遺して、天耳が去ったあとも、お巾はそのままの姿態だった。

身うごきするのすら億劫になっていた。

何が起ったのか。何があったのか、お巾は思いだすのさえ、もの憂い。陶酔の余炎がまだ下肢の末端まで浸している。

宙にけむる絹糸のような小雨も、雨滴にも、むしろ気持いい。

両腕はだらりとして、知覚がなかった。

（負けた……）

否定しようもない敗北である。命があったのは、むしろ憐愍であろう。指先だけであれほど狂わせられたのか。

両腕の関節を外され、背骨を膝で押えられていては、どうするすべもなかった。男の掌と指を恣に活躍させてしまったのである。

まるで背後から犯されたように。女忍としての、性には耐える用意はあったつもりが、まるきり駄目だった。こうなってからも、まだお巾は、天耳の指先だけで狂ったとは思いたくなかった。それほど、もろいとは、認めたくない、くノ一の矜持である。

お巾が漸く、正気にかえったのは、天耳の言葉を思いだしたからである。

（それほど、欲しいのなら持ってゆけ、そのかわり……）

何と言ったろう。

そのかわり……それから先は記憶になかった。だが、山本勘助が与えた〝二百貫の知行を望み候、如何にも申し出し知行分の大功に御座候由、備中殿も歎賞仕れば、云々〟と、認めてある書状は、油紙に包んで、お巾の胸もとに差しこまれてあったのである。

（なぜ……）

天耳の心情が理解できなかった。

（私を憐れんでのことか）

屈辱だった。女忍として敵に憐みを受ける、これほどの屈辱があろうか。昨夜の情交が尾を引いていないとは、言いきれぬ。

疑問が尾を曳いていたが、

（とにかく、これをお届けしなければ……）

使命感が先に立った。

義清を捕えたのは有難いが、それだけで二百貫の知行とりとは、納得いかない。勘助のようにおのれの才覚を恃むことの強い者は、他人を認めようとしない。せいぜい二十貫どまりの端武者よ、と小山田備中守に洩らしている。

甲州女忍お巾に命じて、その文書を盗ませようとしたのは、古府中の信玄の前で恥をかかせる肚づもりだった。勘助には、そういう陰険なところがある。

のろのろと、お巾は立ち上った。両腕の知覚はない。まず右腕を木ノ股にはさむようにして、関節を嵌めた。片手が自由になれば残る一方は楽である。まるで嵌めこみ細工のように、容易に入れた。

だが、葛尾城に馳せ帰ったお巾のほうが、恥をかく結果になったのである。

「なんと、こりゃ贋物ではないか！」

勘助が喚いた。小山田備中守も、のぞきこんで呻いた。

「わしの字とても、似て非なるものじゃ、一体、如何して」

お巾は言葉もなく首垂れた。

なんという恥辱！　憐愍どころではない。

（よくも、こんな赤っ恥をかかせて！　ちくしょう）

ぎりぎりと奥歯を噛んで、お巾は膝を起した。

「直ぐにでも、取り返して参ります。まだ諏訪あたりにいるはず、甲斐に入らぬうちに、必ず……」

「ふむ、無駄であろう」

と、山本勘助は隻眼をむけた。その濁った黄ろい眼の奥に、侮蔑と諦めが泛んでいた。

「くノ一たるそちに、偽物を摑ませたほどの男、歯は立つまい」

「でも……」

「六人でかかって、このざまではないか。一人で何とする」

痛い、これほど辛辣な言葉はない。

事実、お巾がひきかえす意味はなかった。宰領の植村が馬を走らせて戻って来たのである。

「なんとした」

「あ、あの男が、天堂耳介が居なくなりました」

「どうせ、そうであろうと思うていた。あんな奴など、どうでもよいわ。それより村上義清

をお屋形に運べばよいのだ。きさまがわざわざ立ち戻ることはない」

「そ、その義清も、居なくなったので」

「たわけな！」

不倫の城

一

上杉謙信、という名はまだなかった。

本姓は長尾である。幼名を虎千代という。元服して景虎と呼んだ。その幼少時の波瀾は、戦国時代の豪族の典型であった。

七歳の時に、父為景を喪い、群小豪族との戦いに十四歳の時から日夜、気の休まる閑がなかった。かれの戦さ巧者は、こうした歴戦の経験が生かされている。その闘争は肉親宿老の間にも行われた。血で血を洗う凄惨な争いの後に景虎が越後の名流長尾氏を継いだのは、十九歳の時である。養父晴景の嗣をついで立った景虎に、北信濃の豪族たちが信頼を寄せたのは、そのさっくりとした気質が、勢力にまかせて近隣を簒奪する時代の群雄とはいささか趣を異にしていたからである。

春日山城は、いまの信越線高田駅と直江津駅の中間にある。春日山駅の西方一キロに悠然たる山城の址を残している。

標高約百八十メートル、高田平野の西北端で日本海を北に望み、西南に山岳地帯を擁して、城郭の縄張りは独立山塊をそっくり包みこみ、天然の要害を誇っている。

この山城の存在価値は北陸路を扼しているだけでなく、真南に下れば信濃へ出る、荒川下流に近く、広大な高田平野——すなわち頸城平野を見おろしていて、穀倉地帯にめぐまれていることだ。

この山城のはじめは、現在の直江津が越後府中として守護職の屋形があった中世、戦さの場合の施設として、縄張りされて以来で、南北朝の乱戦に備えて山城として充実されてきたのが、守護職となった上杉氏により拡張された。

藤原氏の流れである上杉憲顕が関東管領となったころから、上杉の名が重きをなすようになっていたが、上杉家にも度々相克があり、憲政の代になって、とうとう北条氏康に逐われて越後へ流れてきた。昨天文二十一年の正月である。

憲政はかねがね、景虎の勇猛と義将たることを頼みに思っていたから、管領職と、錦旗、系図などを贈って猶子の約定まで取交した。

四月には従五位下に叙され、弾正少弼に任じられている。景虎は上杉憲政の乞いを容れて度々関東へ兵を出し、上野を奪還して憲政の手に戻してやったりしている。こうしたことが、

村上義清をはじめとして、北信諸豪族を頼らせることになったのである。

さて、その越後春日山城内。

昼間、行列が着いた。山駕籠を守って弓、槍など物々しい一行三十人ばかり。山駕籠は二挺で、先のから降り立ったのは、二十歳前後とおぼしい御寮人である。

「お着きでございまする」

番卒が大声を張りあげた。

着到はすでに先触れが来ている。この夫人の来駕は恒例であった。中魚沼郡の上田郷の坂戸城（現在六日町）の長尾政景の内室である。景虎の腹違いの姉でお珊という。姉といっても半歳ほどしか違わない。

お珊は毎月十日と二十三日にくる。一昨年政景のもとへ輿入れてから、ずっとつづいている。十一日は母の命日であり、二十四日は父の命日に当る。信仰心厚い景虎は春日山城内に供養塔を建て、持仏堂を建てて両親と先祖を祀っている。それぞれ、一夜のお籠りをするという。

坂戸城の政景は十五、六も年長で、豪快単純な越後武士である。政景は長尾氏の庶族で備中守定景の後裔だが度々、若年の景虎をあなどって戦さを仕掛けていた。景虎はその武勇に舌を巻いて和睦し、姉のお珊を輿入れさせたのだが、越後一の美貌をうたわれたお珊を得て、政景はすっかり気をゆるし、いまでは景虎の右腕をもって任じている。

政景が単純にそうした心境であることは、以来死ぬまで叛旗を翻えさなかったことでもわかるが、毎月、二度もお珊の里帰りを許していることでも知れる。

春日山城までは二十数里。大半が険阻な山路だ。先触れで着到の時刻がわかるから湯殿ではすでに湯が沸いている。

蒸風呂もあるが、お珊は湯槽を好んだ。

「こちらへまいると、ほんに伸び伸びとします」

ゆたかな湯のなかで手足を伸して、心から寛ろぎをおぼえる。

むりもない。お珊は、ここで産湯をつかい育った。檜の香りも荒削りの梁の太さ、手斧のあとまで懐しい。

侍女が美しいからだの隅々まで洗ってくれる。お珊は何もしない。手足を投げだして、洗うにまかせている。傲慢というのではない。こうして育ったのだから、不自然はない。

父の為景は、なぜか景虎をうとんじていてお珊と、長姉ばかりを可愛がった。

すっかり旅の垢を落すと、別間で休む。

とろとろしたとき、お珊は夜具が動くのを知った。

「――姉上」

笑顔がかぶさっていた。

二

精悍な顔である。濃く長い眉、切れの長い眼は二重で、黒瞳が大きい。強い意志を秘めて光る眼である。坐りのよい高い鼻も頼母しい感じであった。濃い髭は、丁寧に剃ったあとでも、女の肌にこころよいくすぐりを与えるのだ。

「こたびは、いつもより長う感じましたぞ」

その唇が、何も言わせずに、お珊の唇を吸った。景虎は巨きなからだを横たえ、その太い根瘤のような腕を、女の頸の下へ入れる。

「長いって？……」

漸く、唇を離して、お珊は言った。

「いつもと同じではありませぬか」

「何故であろうか」

「何故でしょう」

艶然と微笑する。いたずらっぽく、瞳が動いている。したたるばかりの色香である。お珊の美貌は、上田に嫁して、ひときわ冴えたようである。

（まさか、政景に……）

心を奪われているのではないか、と思う。

その思いが、一層、思慕の情を深く、烈しくするのに、景虎は気がつかなかった。

女を美しくするのは、悖徳の悦びだという。

現代風に言うなれば、スリルであろう。お珊には、二つのそれがある。一つは異母弟を愛するそれであり、一つは夫の目をかすめる愉しみである。

二人が、こうした仲になったのは、前に述べたような政略の輿入れを、景虎が言いだしたときだった。

父にうとまれて、栃尾山や三条の城で幼少期を過した景虎は、春日山城の主となるに際して再会したお珊の美しく成長した姿に目を瞠った。

これまで戦場を馳駆して、女色を省ることのなかった景虎は、その白芙蓉のような嫩妍優美な美しさに、開眼したのである。

むろん、性に無知だったわけではない。当時の風潮でもあり、武門では常態であった男色の道には一応の経験はあった。

寵童に、しかし溺れることがなかったのはかれの心を摑むほどの、美少年にめぐりあわなかったせいであろうか。あるいは、生得、かれには翫童（がんどう）の素質がなかったのか。

そしてその風習は、あくまでも兵馬倥傯の間にあっての、必要悪だという程度の関心しかなかったのだ。

お珊と再会してから、

（この人が…）

と、感じたとき、すでに景虎は不倫の道へ踏みこんでいたといえる。

（血がつながっていなかったら）

妻に、と思った。

女体を知らぬ若者の、思いをこめた視線の熱度は、おとめにもまた、敏感に反応するものだ。お珊もまた、景虎を見たときから、男を感じていた。

何かの拍子で手が触れたときなど、びりっと痺れるほどの衝撃がある。そうしたお互いの思いを、お互いが感得していたのが、垣を越えさせてしまったのか。

きっかけは、輿入れの話を切りだしたときであった。

中条玄蕃允、本庄新左衛門等股肱の臣が坂戸城への輿入れを強く奨めたので、景虎は断腸の思いでお珊に申し込んだのである。

「弟として、申しにくいことだが……」

てっきり、断わると思った。

断わられたら、乾坤一擲、勝敗を争うしかない。その決意が肚にあったが、思いがけなく、お珊は涼やかな眼を庭の一点に投げたまま、

「あたくし、参ります」

うつろな声で言った。

「そのほうが、お家のためによろしいのでしたら」

「そうか、嫁ってくれるか」

「参ります」

そこまで言うのが精一杯だったのか、こらえていた堰がどっと切り崩されたように、双の眼から泪があふれ出た。

「宥せ」

と、景虎は抱いた。

あふれる哀しみに耐えきれず、お珊がゆらりと倒れかけたのである。抱きとめたつもりだったが、熱い女のからだは、男の胸に崩れ、しがみついてきた。

「参ります、景虎どのの申し様なら、どこへでも参ります。だから、だから……」

喘いで、玉虫の唇はわななき、何かを訴えていた。その熱い息吹きと、濡れ濡れと輝やく瞳のなかに、黒い炎のような情炎を見て、景虎の男のいのちがいきりたった。

「私も、そもじを遣りたくはない！」

どちらからとなく倒れたとき、もはや異母姉弟ということは、念頭になかった。ただ、男と、女があった。本能が二人を結びつけたというしかない。悖徳というならば、お互いに異性との交接が無かったことだ。

二

激情が不倫の道に踏みこませた。

一度はあやまちといえるが、二度目からは罪になる。その罪悪感もしかし、後世ほどは強いものではない。家族といっても、一国を支配する大名である。景虎は守護代であって家臣も多く、城も大きく、庶民感情の小さな単位ではない。腹ちがい、ということだけでも道義的な制約はうすれた。

お珊が、異母弟の凛々しさ、逞しさ、若さに惹かれたのも不思議ではない。殊に女心にとって何よりも感動的であるのは、

（あたしは、はじめての女！）

ということだった。

景虎が女色を知らず、通り一辺の衆道で過してきたことは、彼女の感情に何の翳も与えない。我々が感じるほどの不潔感は持たない。当時は、むしろすがすがしい男の世界とさえいえた。

「仰せの通りに、上田へ参ります」

お珊は弱々しげに微笑して、

「それが、お家のため、お前さまのためなら喜んで……でも、見も知らぬ男にこの肌を、最初のものを奪われたくないの」

弱さのなかに、不逞なほどの意志がある。

せめてもの夢であった。戦国の世に、大名の娘に生れた以上、夢を持つことは許されない。生れながらにして、政略の具にされることは定っていた。

（それだからこそ、せめては……）

好き、という感情には忠実でありたい。

「抱いて、平三さま」

お珊は親しげに通り名を呼んだ。ぐっと感情が盛り上り、平三景虎の腕に力がこもった。

「姉さま！」

感激があふれた。

やはり、血の通った姉弟が、お互いに最初の異性としての交接を持つという異常さだ。昂奮を盛り上げたことは否めない。

恋愛感情というものは、悖徳的であるほど感激は高く、喜びは大きい。

お珊の小柱（こうちぎ）をひき剝ぐ手もふるえていた。

処女が、はじめて、〝おんな〟になろうとして花開く——その女体の本能的な香り。甘い肌の匂いと、衣裳にこめられた伽羅の香とがまざって、得もいえぬ嬌めかしさで若者をとらえた。

戦場に馳駆して、三軍を叱咤するときは、勇猛な〝越後の虎〟も、はじめて知る女体の前には、ひこばえの稚なさと、母の乳房に戯れる幼児の清らかさしかない。

はげしく口を契り、ひしと抱きしめてから、そのことに至るまでに、かなりの時間があった。何という柔らかな肌であろう。何という悩ましい香りであろう。その紅唇のぬめりと厚く柔らかく、男の唇を受けたあと、歯をかちかちと鳴らせて、漸増する快感に身を顫わせるお珊の姿態は、

（こ、これが女だ！）

と、思わせずにはいない。

どうしたことか。この感激の潮が、耐えきれぬばかりに盛り上りながら、景虎の下腹部は萎えたように、昂ぶりを知らなかった。

なべて、感激の大きさは、屢々逆作用をもたらすことがある。姣童の肌しか知らなかった景虎には、女体の扱いに対する不安がある。

それが萎縮させているのかもしれなかった。

巨きなからだを、赫っ赫っと燃やしながらそれ以上に出ないのだ。

女体も燃えていた。受身の側の焦れったさは、口中の契りだけではなく、おんなのいのちも、舌や唇のような戦きと期待で、おぞましいうごめきを伝えているというのに。

男の手にこそ触れられたことはなかったが、お珊はそのほうの目ざめは早い。自ら慰めることを知っていた。

「ああ、もう……」

唇が離れると、唾液の糸をひいて、切ない声を洩らしている。

構造的に受け身だということが、焦れったくさせる。

（早く！）

大胆にも、手をのばしていた。

景虎はきゃしゃな女体を抱きしめたまま、何もしようとはしないのだ。女のほうで——姉のほうから誘わねばならない。

その繊細な指が股間にのびてきたのを知ると、景虎はしかし、ますます萎縮してしまう。触れた。瞬間、びくっと手が離れたのは、あまりの腑甲斐なさに、驚いてのことである。

触れたことこそないが、お珊は識っている。

男のそれが、平常と昂奮状態にあるときの違いを。盗み見もし、聞きもした。

これだけ燃えながら、なお、平常の状態にある〝おとこ〟のいのちに、処女が途惑うのも無理はない。

侍女や、乳母がこれらの知識の供給者であった。荒川の畔りで夏陽に戯れる悪童らも、十二、三になるまで、下帯を締めない子が多い。

それらを見る機会は常にあった。小さいのは胡椒みたいのから、結構、松茸を思わせるほどのものもある。

それがどういう過程を経て、大になり、あるいは小に戻るか、いくら乳母の説明を聞いても

わからなかった。

河原の小供らばかりではない。下人たちのだらしなく、ゆるんだ下帯から見るもの、小用をたしているところを、ふとしたときに目撃することもある。

二十年の間には、いろいろと見聞するものだ。絵も見た。鳥羽僧正とやらが書いたものという露骨なものを見たし、病草紙などという醜悪で、哀しい滑稽味を帯びたものからも知識は得られた。

それらに描かれたものが、幾分の、あるいは意識的に誇張されていることはあっても、未知のものへの、恐怖や、好奇心や、期待などという感情を計算にいれれば、客観性としての妥当な表現かもしれない。

どちらにしても、この時、こうした小さな状態にあるのは、思いがけなかった。

が、一面、救われたような気持も事実である。はじめて触れるものへの処女の恐怖は、したがって、無い。

（可愛いい……）

それが実感だった。

何が、彼女を動かしたろう。母親が愛児に乳房を含ませる気持か、姉が弟の洟を拭いてやるこまやかな情愛か。

もっと熾烈な男女の、本能の衝動もある。それらが錯綜し、圧え難い情念となってお珊をも

狂わした。

お珊は、しどけなく前をひらいたまま、身をこごめて、景虎の股間に顔を埋めた。

四

「姉上！　それだけは……」

景虎を拒ませたのは、羞恥ではない。

むしろ惧れであった。衆道を識る男のからだは口淫に馴れている。寵童のつとめは菊ノ座で奉公するばかりではない。それよりももっと手軽く、場所をとらず、戦陣にあって行える口唇の技巧が重宝された。掌を用いるのは意味がない。

いま、お珊の清らかな唇が、唾液に濡れて情痴におののきながら、おのれの股間におちてきたとたん、景虎は思わず、はねのけようとした。

その行為が嫌いというのではない。これまで十数人の寵童がいたが、いずれもその技巧に闌けていた。あまりにも、それに馴れていた。そのことが、はじめての女体に接しようとする青年武将の気持に、忸怩たるものを覚えさせたのである。

女の唇が、亀頭の先端に触れたのは、したがって、一弾指の間に過ぎぬ。

「止して下され」

と、男の力で引き離されながら、

「させて！」

紅唇はあえいだ。その紅いふるえは、事実かれのそれを欲しがっていた。口をつけたとき、洩らした涎れが、すーっと粘っこい蜘蛛の糸を引いて、淫らに光った。お珊の眼は情欲に濡れている。

「させて、お前さまを男にしてあげたいの」

訴えるような女の言葉には真情があふれている。

はげしい感動が景虎をとらえ、巨きなからだを烈しく転じさせて、逆に、女の下肢をつかんでいた。

大きく左右におしひらいた下肢のつけねには、淡いかげりが一刷毛、彩られているだけで、そのこんもりした丘も、まだ少女の稚なさを残している。

燭の火あかりのもとに、丹念にたしかめてみたい欲望を圧えたのは、お珊への敬愛である。淡い明りのもとでは、丘の中腹から切れこんだ秘密の渓谷も泉も、判然としない。そこに唇を寄せるとき、景虎はあえかな名香を嗅いだ。沈香か？　この夜のために、焚きこめていたのか。それが姫御前の風習であろうか。

景虎とこうした関係になるなぞとは、予測が出来ないはずだ。とすれば、日頃から、腰のものに焚きこめて不浄を払うだけの、心づかいをしているのであろうか。

その昔、足利将軍義政の権勢を笠に被て贅沢の限りを尽くしたといわれる日野富子は香料を

溶かした、湯槽で磨いてたという。

それほど越後守護代は富貴ではない。父の為景も許さなかったはずだ。おそらく、日常のからだの手入れが丹念で、香のつかいかたが、こまめに、正しかったのであろう。

もっとも大名の姫には、ほかにすることはない。侍女や老女の姫の世話は、実に念入りなもので、用便のあと、揉み紙や布を使って、襞の一つ一つまで拭い浄めるという。

姫という存在が、戦国の世の大名豪族にあっては、政略のための貴重な品物であれば、それも当然だろう。粗末な贈り物は喜ばないし、場合によっては侮辱になる。

そういう意味では、坂戸城の政景への贈り物である珊姫の処女を犯すことは、姉弟という血縁上の問題以上に、春日山城の長尾氏にとって、得な面はない。むしろ、マイナスになる。

処女膜の有無が倫理的にどうかということは一まずおいて、誰でも、生新なものを喜ぶのは当然である。手垢にまみれた女を好む人々もいるが、それはやはり文明の倦怠がもたらした変態心か、そうでなければ妥協であろう。腐れ鰯は蒲鉾にもなるまい。果実のもっとも美味なのは腐る一歩手前というが、一歩間違うと腸炎の危険性がある。そのスリルを味うのなら、話は別である。

贈り物に手をつける。

非常識な行為にも、反省するゆとりはない。

もしも珊姫が、少しでも抵抗を示したら、激情も冷めたかもしれぬ。

姫の汚れのない手と唇が、かれの逸物への興味と、恋着をあらわにしたのだ。景虎の激情はつのった。

嘗つて、そんな行為のためしもなく、夢にも思わなかった行動に、景虎が没入したのはただ、慕情というしかない。

弱々しい声を洩らした。

景虎の唇がそこを捺した瞬間である。下半身が抗うがごとく、羞恥に耐えられないごとく、うねった。

巨きな手が両脚をしっかりと圧えているのだ。

ふとももから腰と上半身だけの悶えであった。

景虎の唇も舌も、まるで主人の意を体したように、ぬめぬめとよく動き、生れてからまだ一度も男に視られたことも触れられたこともない、文字通りの秘所を這いまわるのである。そのことによって、景虎の下腹部は充実感を甦えらせた。熱い勃起を、女の手は識った。ひとたび勢いを得た男のいのちは、猛々しいまでにそそり立ち、唇によって拓かれた門へ浸入してきた。これが女のいのちの初の開眼だと思うと珊姫はただ、羞恥と喜びだけがあった。

(あたしは女になる。景虎どのが、あたしを女にする!)

濡れた双眸は、宙に虹を見ていた。

五

自分が女になるとき、弟も又、男になる。

この喜悦は、他にはわからない。

人は異常というだろう。だが、本人たちの悦びは大きい。恋という感情の前には、血のつながりも自分たちの置かれた地位も、すべては虚仮に過ぎない。

お互いの唇と唾液による洗礼ののち、二人は一つになって、夜の更けるのも知らず愛をたしかめあった。

異母姉弟のまぐわしい次の夜も、その次の夜も——夜毎に短檠の灯をまどわせて、輿入れの前日までつづいた。

「月に、二度、戻ってまいります」爽やかな微笑すら浮べて、お珊は言ったのである、「父母の供養と申せば、政景どのも拒みはなさらないでしょうから」

大胆な女の態度には、景虎は二ノ句がつげなかった。

おれの知る寵童たちにも、それぞれ屈折した性格の者が多くいたが、あらためて女の魔性に驚ろかされた思いである。

恋のためには、どこまでも女は強くなれるのだ。

政略と割り切っているだけに、お珊は平気だった。

はじめから愛をもとめようとしなければ、苦しむことはない。政景は単純な武将だからお珊の心の中を見ぬけない。美貌たぐいない春日山城の姫を得ただけで、もう喜んでいた。

「春日山の御事なれば、如何ようにも、働き参らせる」

と言い、事実、強幹勇猛な魚沼勢を率いて尖兵となった。

政景は、単純粗豪な性格だけに、色も好きである。侍妾が五人もいるし、寵童も身辺にまつわりついている。

かれにしてみれば、一応政略と心得ていながら、ちゃんと輿入れしてきた珊姫は粗略に扱えないし、眩しくわずらわしさを懸念していたのだが、珊姫が淡々としているので、むしろ、ほっとした。

近ごろでは、

「北国一の美形じゃが、飾りものでな。おれの好みは、汝らのようなワザ巧者よ」

などと女たちを嬉しがらせている。

そんな言葉が、侍女などから耳に入ってきても、珊姫はおっとりしていて、

「そうですか、政景どのが、それで御満足ならば、よろしいではありませぬか」

と、気を昂ぶらせる容子もない。

政景との閨は、慎ましく応えるにとどめた。

からだをまかせたまま、想いは、春日山城の奥殿に飛んでいる。

独り心を遊ばせて、愉しんでいるのだ。たまたま、政景の愛撫が烈しく、長びいて、珊姫も思わず、喜悦の声をあげることがある。

（いけない！）

心中を見抜かれはしまいかと、はっとするのだが、そうした振舞いが、かえって、政景を喜ばせた。思いがけないだけに、ひどく儲け物をしたように、感じるらしかった。

半月に一度の春日山詣では、戦雲の動きに無関心な女にとって、何よりの慰みだった。その慰みが、景虎との秘められた夜にあるとは、誰も知らない。小さいときからの侍女と、乳母くらいのものだった。政景のほうの侍女も従ってくるが、これはうまく瞞して遠いへやで眠らせてしまう。

二十数里の山路は、急坂あり峠ありで山駕籠とはいえ、楽ではない。その行程をおかしての春日山詣りは恋しい心をより強くそそるのかもしれなかった。

だから、この夜の情炎はすさまじい。

十五日ぶりの痼(しこ)りを一時にほぐすかのように、白い淫婦となって、褥(しとね)をよじり、濡らす。時には夜具の布をひき裂くほどだった。

そんな女身の溺れかたが、また景虎をも堪能させる。

行為の最中にお珊は、景虎の名を呼ぶ。

「平三さま」

と、言ったり、

「景虎さま」

と、うつつけに叫ぶ。

弾正少弼になり、お屋形さまと呼ばれるのにも馴れたこのごろでは、平三などと呼んでくれるのは、この姉しかいない。

それが景虎には無性に嬉しかった。

「姉さま」

と、呼ぶかと思えば、

「お珊！」

と、呼び捨てる。

「わしの女は、そなた一人だ、あとにも先にも、そなた一人」

自分の心に言い聞かせるような、そんなうつつの叫びも、しかし、平静にかえっても、変ることはなかった。

平常はそんな口調にはならないし、人目があるから、武張った表情ではあるが、戯れたお珊が妻帯を奨めても、

「存じて居るはずだ、わしの気持は」

と、怒ったように答えるのだ。

「生涯、わしは娶らぬ」

「まあ、そのようなことを仰せられて」

「冗談ではない。わしは要らぬ。女は……要らぬ」

六

家臣たちの前であるだけに、お珊は困ってしまう。

「それでは、お世嗣が困りまする」

「貰えばよい。養子でよい。たとえば……越前どのの子でもよい」

「それは……」

お珊はどきりとした。

景虎は真剣だ。凝と見つめる眼には、強い意志がある。越後の長尾家のゆくすえをおもう眼だ。

「でも、男の子が出来るかどうかも、わからぬものを」

「できたらの話じゃ。もっとも越前殿（政景）の考えが奈辺にあるか。ははは、いまから左様な夢のようなことを思っては、鬼に笑われるかの」

豪快な哄笑を吹きあげる。家臣たちの眼には屈托のない笑いに聞え、ますます頼母しく見えた。

「ほほほほ、鬼よりも強い弾正少弼どの、笑えば笑いかえしておやりなされ」
「なんの、笑うなれば、首っ骨折って取りひしいでくれようわさ」
「おうおう、勇ましいお話は、まことに心強いかぎりでございます。なれど、たとえお世嗣のことはそうなされようとも、二十歳までは、お育てなされねば、なりますまい。されば、この上ともに、御軀に気をつけて下さりましょう」
「案じることはない、わしには、毘沙門天の御加護がある」
景虎は七歳の時、為景の厳命で、城下の曹洞禅院林泉精舎（しょうじゃ）に入り、住職の天室によって学文を修めた。当時の禅林は規矩最も厳粛を極めたものだ。
この幼時の修業が、長じても仏縁と終生離れ難い機縁になったのは想像に難くない。
仏に帰し、禅に通じたゆえに文政武略の上に縦横の禅機を発露できた。さらに真言密教の不可思議を得て大日如来の信仰となったのだが、それにとどまらない。
春日明神も奉じて、大小神祇、八幡大菩薩など神道もおろそかにしなかったのは、武人としての本心だが、とにかく、かれの場合、宗教の真美を探らんとする意慾が旺盛であったことだ。仏教といい神道といい、多岐多様、深く入れば入るほど、錯綜してわからなくなる。これをわかろうとする努力を尊しとするのだが、禅理を究め、真言密教に心惹かれつつ、天台の顕密にも法縁を持ったのは、この四月座主二品尭尊法親王から大講堂造営の資金をもとめられるや、欣然として黄金二百枚を献じたことでも知れる。

信仰の話が出てくると、お珊は尻をもじもじさせる。
父母の命日供養に名を借りての里帰りが、異母弟との密通のためなのだから、どうにも工合が悪い。
「なにやら、空が暗くなって来たようだけれど、降らねばよいが」と、外を見て言った。
「山路は降られると、難儀いたしまする」
「供を増やしてくれようか、山駕籠の柄を長うして肩を増やせばよいであろう」
そう景虎が言ったとき、取次の近習が渡殿を通って下の座に入ってくるのが見えた。
「何事だ」
「申し上げまする。ただいま、信濃葛尾城の村上義清どのが……」
「村上が！」
予期したことではあったが、さすがに景虎はきっとなった。
「参ったか」
「は、鮫ヶ尾の砦より大塚源信斎殿の使番山室伝十郎、早馬にて注進にござりまする。五日市の木戸にて左様に名乗り候由。お小屋に留め置きしも、如何仕るべきや、御下知仰ぎ度しと」
「よし、わかった」
と、景虎は大きく頷いて、家臣に顎をしゃくった。

「琵琶よ、迎えの人数を支度せい。早々に迎えに参れ、村上殿は信濃の名流じゃ、疎略にしてはならんぞ」

「かしこまりました」

琵琶島孫七郎が拝揖する。

「そうじゃ、医者を連れてまいれ。落城の際にどのような傷を負うているかもしれぬ。玄庵にな直ちに診させい」

てきぱきと指図する声は若々しく、張りに満ちてくる。

昨夜の淫猥な汗にまみれたときの男ではない。これが血をわけた異母弟とは思えぬばかりの、凛乎たる青年武将である。青年ながら越後一国の大守である。関東管領上杉憲政が猶子の約定まで申して援を乞いに来たのも、さてこそと頷かれる姿であった。

この異母弟に愛される喜びは、しかし、明日の不安をひそませているのであった。

昂揚してくると、景虎の眼は輝やき、ときどき、頬のあたりが、ひくっひくっと動く。

胸中に盛りあがる情熱を制馭しきれないのだ。若さだ。若い血のたけりである。戦場がかれを招いている。その魔神の招きに応えるように、若い血が沸りはじめているのであろう。

お珊はそんな弟を凝っと見つめながら、

(ああ、又……)

と、歎息したいほどの気持になる。

(戦さがはじまる……弾正どのは戦さ場へ。こうしたことはいつまでつづくのか)

男を愛することを知った女は、その出陣のたびに、身を切られるような辛さを味わねばならぬ。凱旋するまでは、夜も眠れない。

長尾家に生まれた女の宿命は、所詮、この不安の繰り返しから逃がれられないのだ。

お珊は昨夜の今日とも思えぬ元気さで、晴れ晴れとした顔の景虎を怨めしげに眺めやって、悄然として立ち上った。帰りの支度を命じるのだった。

忍び卍

一

天堂耳介こと、伊賀喰代の放れ忍び天耳が、敗残の村上義清を伴って春日山城を目ざして来たのは、昨夜のことである。

ふぐりの傷がまだ完治していない。

信越の国ざかいを越えてから、地獄谷に暫くひそんでいた。

ムクロジに陰嚢を切り裂かれた傷を治療するためであった。落城につづく不運の連続に村上義清はすっかり憔悴していた。

一命をとりとめたのも奇蹟的だったが、

「ふぐりを失うては、男の生甲斐はない。腹を切らしてくれぬか」

と、義清は死を願った。

天耳のことは知らぬ。耳介が葛尾城に売り渡したことも、知らぬ。

山駕籠の外から縄をかけられて、中山道を下る間、ほとんど、生死の間を彷徨い、悪夢のようなものだったらしい。

だから、和田峠から救けられての以後のことしか、判然としていない。

気がついたときは、義清は砂の中にいた。

腰から股間を砂の中に埋めていた。石を集めて焼き、砂をかける。この焼砂をもって患部を温めていた。温めるというより、焼くに近い。傷口の化膿しかけたのをそうやって治した。耳介が何かの葉を嚙み砕き、蝮蛇の生胆と蛭を潰し混じたものをべったりとつけては、この焼砂をかけるという、奇怪な治療であった。

北信濃ではゆっくりと治療できない。そこら中が武田の軍兵か、かれらに媚を示す民衆かで埋まっている。

耳介は半日と一か所にいなかった。こうして越後に入ると、地獄谷で軀を休めた。

ここには、延命湯と呼ばれる出湯がある。岩石の隙間、二寸ばかりの孔より噴出している。終日轟雷の如く晴日は蒸気を騰上すること四、五丈、烟霧となって飛散している。近在の者が

湯を浴びに来ているが、中には甲州の忍び《黄金虫》がまぎれこんでいないとも限らぬ。

耳介も義清も名を変えただけでなく、義清は薙髪してにわか入道になっていた。その上憔悴しているので、かなり人相は変っている。

旧臣と会っても、誤魔化せるかもしれない。

「重ね重ね、御恩を蒙った。何と礼を申してよいやら知れぬ」

どうやら、おのれの足で山路も歩けるほど恢復した義清は、繰り返し礼を述べる。

「いや、左様に申されると、痛みいる」

実際、天耳は面映ゆい。

「牢人の身の気まぐれと思うて頂こう」

山本勘助に二百貫で売った、つぐないの気持ではない。

（武田が駄目なら、長尾だ）

乗り換えるのだ。

仕官は武田信玄であらねばならぬわけはない。大所ならどこでもよかった。

美濃の斎藤道三は老獪だし、東海の今川義元は白粉塗って眉を剃り、天眉打って公卿を気取っている柔弱さがあるし、関東の北条家も、氏康の代で、初代早雲に比べると粒が小さい。

中央では三好一党と細川晴元が一進一退をくりかえして予断を許さない。尾張の麒麟児織田信長は海のものとも山のものともつかぬ暴れ者で、老臣の平手なにがしが、皺腹かっさばいて

諫死したほどだ。

見渡したところ、武田か、長尾景虎しかいない。

（武田に仕官出来ないならば……）

越後の春日山城。

天耳の胸中には、すでに図式が出来上っている。やり損なったことに、拘泥しない。目的はひとかどの武将の地位である。長尾景虎なら、若いが名声は、すでに四隣に響いている。すでにこの四月、入洛して将軍足利義輝に拝謁し、叡山とも好みを結んだところといい、上杉家とのことといい、着々と歩を固めている姿からは、越後から西南東へ浸潤の下地が出来ている感じだ。近い将来の版図の構築が、そつなく出来ている。

（若いにも似気ない、大器だ）

信仰厚く、女色を絶っているという噂だけでも、救いのないこの時代では偶像になれる。

さらに戦さ巧者なこと、歴戦連勝、いまや越後の豪族一人として叛旗を翻えす者なく、威服しているという。

（初めから、越後を目指すべきだったかもしれぬ）

土産なしで行っても、重くは見られぬ。

村上義清ほど、この場合、恰好な土産物はない。

かれが前途に悲観して、何度死のうとしたのをひき止めたのも、

（土産物が死んでいては、三文の値打ちもない）

義清を勇気づけるのに、天耳はお千世の名をもってした。

「お千世？」

と、義清ははじめ信じなかった。

「乱軍の中でとっくに討死しているはずじゃ」

「生きてござった。足に傷は負うていたが」

「まことか」

「この目で見た」

「嘘ではあるまいな？」

「自分で申すのも、恩を売るようでいやだが実は、この天堂耳介がお救けした。尼飾の城に居られる。安心するがよい」

義清は、すぐにも、行きたがったが、馬場信幸や小山田備中の軍勢が取り巻いている。

「長尾景虎が大軍をもって、信濃へ入れば、尼飾城は陥ちぬ。天然の要害だ。一刻も早く景虎を動かすのが先決」

という天堂の忠告で、思いを断ち、北上したのである。

二

義清の哀訴によって、景虎がふるいたち、川中島の合戦になったというのが、歴史の定説である。

「信玄は多年信濃を脅かし、遂には城も領民も奪われて、身一つ入れるところもござりませぬ。何卒、春日山城の御威光を得て、村上家を旧に復さんこと、願い奉る」

こう言ったとき、さすがの義清も、泪をおさえることが出来なかったろう。落涙したにちがいない。

大剛の者ほど、こうした泪には弱い。義清の過去の名声を聞いているだけに、同情は禁じ得なかったろう。

「信玄の暴戻はかねて仄聞していたが、聞きしにまさる不埒な所業だ。信濃の村上氏ともあろう方が、この若輩を頼ってこられるとはまことに冥利至極。武辺の義よりしても、無下にはなり申さぬ。よろしい、出陣いたす、信濃は貴殿には墳墓の地。必ずや取返して進ぜましょうぞ」

胸をたたいて豪語したにちがいない。

景虎の若さ、純粋さ、自信、義侠心……いろいろ称されるが、たしかにそれもある。

が、その気持の底には、

（北信まで、武田の領地になっては、いつ越後に侵寇されるかわからぬ）

という不安も作用していたのは否めない。

数年前に小諸まで武田の色に塗り潰されてしまったが、まだ上田以西、千曲川の流域を中心として、村上一族の勢力が安定していた。

北信の豪族ではあるが、長尾氏が南方へ欲望を起さぬかぎり、村上のほうから北へ手を伸ばす惧れはなかった。

だから両者は均衡を保ってきた。長尾武田の両大勢力の間にあって、村上氏の存在は適当な緩衝地帯だったのである。

これが破られた。

こうなっては、いつ風林火山の大旗が、北風に翻えって、大軍が雪崩れこんでくるかしれない。うかうかして居られない。

（出鼻を叩き潰さねば）

そのためには、村上義清の乞いは、願ってもない口実であった。

「義のために蹶つ！」

半ば、本心であった。

景虎の場合、そう言える。若いというだけでも、老人よりは純粋なことは確かだし、

「義」

の一字に昂奮する情熱がある。

理想家肌で、感激家で、自信に満ちていれば、これだけの条件で、ふるい立たねば嘘か。

尠くとも、信玄の信濃経営よりは、純粋性が高いと見てよい。

「ただちに戦さの準備にかかろうぞ」

義清は感泣した。

その窶れた姿を見て景虎は、医者の手当を受けて暫く養生するように言い、小国刑部少輔を世話役に定めた。その屋敷を宿所に充てしめたのである。

景虎が、天堂耳介に興味を示したのは、その後であった。

「其の方が、村上どのを助けたのか」

「いささかの合力、仕ったのみにござる」

謙虚な答えが、好ましい。

「兵法、軍法にも蘊蓄少なからぬとの」

義清が恩義を感じて、精一杯に吹いたのである。天耳は微笑した。ずらりと居並んだ諸将の眼には、疑いが濃い。

天耳は充分、それを察知しながら、低く付け加えた。

「村上どの御寮人を助け参らせるのに、いささか心おぼえの忍びのワザを用いましたが」

山本勘助は軍師にして二百貫の知行で仕官し、甲斐の忍び《黄金虫》の総帥になっている。

天耳もそうしたかたちで、長尾家の地歩を占めることが出来れば、と思ったのだ。

「伊賀の郷侍とあれば、なるほど、忍びのワザが達者か。当家にも、達者が揃うておるぞ」

「殿！」

と、斎藤下野守が、あわてて、遮った。

忍びノ者の存在は、いわば隠し武者、秘匿すべきものだ。豪快でおおらかな景虎は言わせておけば、忍者の数から警備状況まで、饒舌ってしまいかねない。

「わかっておる」

景虎はうるさげに一蹴した。

「仕官の望みあらば、抱えてもよい」

「忝けの存じまする」

「村上どのの内室を救い出したことといい、武士の根性と忍びのワザを持つこと、それで充分と見る。が、さて天堂」

「……」

「常人にないワザとあれば、この目で見たい」

「御意」

「披露せい」

しかし、天耳は一寸ためらった。満座の中である。猜疑の視線に集中されては、目くらまし

にも限度がある。やりにくい。

「どうした？」

「恐れながら、長柄を拝借しとうございます」

「長槍を？」

と、眉根をよせたが、

「いいか」

と、斎藤下野守に訊ねた。下野守は、萱で切ったような細い目で答えた。

「大事ござりませぬな」

その言葉の意味は後にわかる。持って来させた長槍は青貝摺り三間柄のもので春日槍と称している。

「拝借仕る」

押しいただいてから、坐ったまま、びゅっとしごいた。

二

（何を為る気か？……）

景虎はじめ、固唾をのんで見まもるなかで天耳はその槍の中ほどをつかんで、片手でぐるぐる廻しはじめた。

みんなひやひやしている。手がすべって飛んできたら、さっと身を躱すつもりでいる。

ひゅっひゅっと、槍の唸り声が次第に高まり、それにつれて、少しずつ手の位置がずれ、石突のほうに下ってきた。

しまいには石突のあたりを摑んで、ふり廻している。いや、摑んでいるのではなく、つまんでいるではないか。拇指と食指と二本の指でつまんでいるのだ。

（危ない！）

みんな蒼くなった。指先がちょっと滑ったら、槍が飛んでくる。

景虎も、きっと瞠目したまま、脇息をつかんだ指先が、緊張で固くなっていた。

と――

ぱっと、離れた。

数人の口から悲鳴とも、呻きともつかぬ声が洩れた。恐怖の声である。

が、槍は飛んでこなかった。さながら、竹トンボのように、上昇気流に乗じたかの如く、ひゅっと、頭上へ飛び、花鳥を描いた格天井にばりっッと、突き刺さったではないか。

同時に。

天耳のからだもはねた。

坐ったままから、一瞬に飛び上った。

天井に突き刺さった槍は、千段巻のあたりまで隠れている。石突から床まで三尺ほど空間が

ある。垂直に突き刺さって、ぶら下ったのである。

天耳のからだは、さながら、こま鼠のような素早さで、この宙吊りになった槍を駈け上った——

と、多くの者は見た。

目くらまされてのことか。天耳は槍を突き刺すと同時に、反動を利用して、跳び上ったのである。

ひた、天井に貼りついた。

天井の高さは二丈はある。この男にとっては、上も下も同じに使えるようであった。貼りついたまま、つつーッと滑るように這って槍のところへ来たと思うと、身軽く滑りおりてくる。音も立てぬ。羽毛の軽やかさである。

「ふむ、鮮やかだな」

と、景虎は感じたように言ったが、言葉の底には、まだ何か割り切れぬものがある。物足りなさが、顔に出ている。

天耳は槍を引き抜き、斎藤下野守に渡しながら言った。

「御用仰せの三人の〝影〟の衆、これへお呼び下さりませぬか」

あっ、と下野守は舌を巻いた。

「し、知っていたのか」

「手練れの衆にござりまするな。ちと、用を思いだしましたので」

下野守は、合点がゆかぬ面持ちのまま、何やら合図を送った。

庭の茂みのなかから、三人の影があらわれた。紫蘇黒の頭巾、装束、忍び刀を帯びている。影のようにあらわれたのである。

一定の距離を置いて、三人は片膝をつき、頭を垂れ、片拳（かたこぶし）を地に突いて、次の命令を待っている。

これは越後忍者〝かまいたち〟に違いなかった。春日山の黒羽、とも呼ばれ、いまでは下野守のもとに《黒羽組》なる名称を与えられている。為景の代から、存在していてその北国の烈風のなかで鍛えられた忍法は、甲賀伊賀の忍びの及びもつかないワザを持つといわれる。

常に景虎の身辺を警護し、下野守の指向のままに自在に動く。黒羽とは、その忍び装束がよく見れば普通の筒袖とは違う。両手を高くあげれば、腋腹から、蝙蝠のように張っていて、高みから舞い降りる際、翼の役目をする。おそろしく合理的に出来ている。

「用とは何じゃ」

下野守が不審をあらわにして、

「その方は、当地へ参ったばかり、この者どもを知るはずはあるまいに」

「いや、存じて居りまする」

「……」

「小柄を預けました」
「なんと!?」
「三人の衆の襟を御覧ぜられよ」
仰天したのは下野守だけではない。三人の黒羽組の者が、ぜんぶ襟に小柄が刺し止められていた。
三人の表情といったらない。なんという不覚、いつ縫われたとも知らぬ。小柄はきれいに三人の襟に縫い止めてあったのだ。忍者ともあろう者が、気がつかなかったのか。

四

三人が面てをあげ得ずに去ろうとしたのを天耳は静かにおし止めた。
「恥じ入ることはない。おてまえ方より、われらの方が、少しばかりワザが上であっただけのこと」
「いつの間に……」
「天井に貼りついたのは、影じゃ」
「……」
「皆の衆が、旋回する槍に気をとられて、廻している本身を忘れた。その刹那に、天井に刺し、着物を飛ばせた。この本身は庭を走っていたのじゃ」

あまりにも鮮やかなワザであった。
かれは三人をそのままに押えてから、座に戻った。
「就きましては、今一つ、御覧に入れたく存じまする」
「何じゃ、こんどは」
と、下野は自分の襟をさわってみた。
「盥に水を八分目、願い申す」
「盥に水を？　変なものを……まあよい」
景虎は興が乗ったように、早速用意させた。径二尺ばかりの盥で、深さは七、八寸もあろうか。
それが来ると、天耳は、柱の陰に坐った若侍に、ここへ来て捧げ持つように、と言った。
若侍は、ちょっと逡巡した。
「これ、藤崎、どうした？　持てばよいのだ」
琵琶島孫七郎が、焦立って促した。
「こやつ新参者で気が利かぬ」
「なるほど」
天耳は微笑を消さない。
藤崎は途惑った様子ながら、水盥を持ち上げた。

その左横に立って天耳は、微笑したまま、言った。
「何をするか、おわかりか」
「いや、何も」
「その水の中に、首が浮く」
「え？」
「ははは、驚かれることはない。これが忍法じゃ、さあ、置くがよい」
藤崎は両手で持ち上げた水盥を、そっとおろした。
刹那——
ばっと血が飛沫いた。
目にも止まらぬ早さである。鍔音がした。刀は鞘におさまっていた。ころり、と重く藤崎の首が水の中へ落ちたのは、そのあとである。
「やあ、何をする」
「気が狂ったか」
わっと、一時に総立ちになった。
膝を起しざまに、鯉口を切っている者もいた。数人が、ばらばらっと景虎の前に人屏風を作った。
「乱心したか」

「方々、御用心」
「包み捕れ、逃すでないぞ」
狼狽はしても、さすがは戦雲に馴れた武辺者たちだ。早くも円陣を作った。
その中にあって、天耳は悠然と坐っている。
「乱心したのではございませぬ」
「すりゃ、何として。おのれの居合い討ちを自慢せんがためか」
「下野様へ申し上げる。忍びノ衆にお訊ねあれば明らかになりましょう」
意外なことを言いだしたものだ。
三人の黒羽組は、天耳の言葉を肯定したのである。
「その新参者。そぶりに怪しい節が見えましたゆえ、前から見張っていた者でござる」
「怪しいとは」
「いずかたよりかの透破ではないかと」
景虎の片眉が、きりりっと吊り上った。
「調べてみよ」
首のない死体を裸にしてみると、紙包みが出て来た。散薬らしきものが入っている。医者の玄庵はただちに砒石の粉末と証明した。
「やはり、こやつ！……若いに似ず能筆ゆえ、抱えてくれたが」

景虎はいまいましげに、

「早々と浄めい。首は梟せ、胴は逆さ磔刑じゃ。席を代えるぞ」

そして、天耳には、楼上へ来い、と促して先へ立った。

春日山城の本丸はさして広くはない。ほぼ楕円で長径南北が二十間ほどのところに高楼がある。

楼上からは一望のもとに頸城平野が見わたせるし、頭をめぐらせば、重畳たる山塊だ。すでに黄ばみ、あるいは紅味を点綴させた裂帛が涼風を送り、さらに眼を転じれば広漠たる海原が控えている。

ここへ招かれることは、近臣たることを意味する。

「それにしても、よく気がついたの」

盃を含んで景虎は言った。

「どこで見破った？」

「それがしが槍をまわしておるとき、彼奴はお屋形の隙を狙うておりましたゆえ」

そう説明しながら、天耳は二百貫をどこで切りだしたものかと迷っていた。

（忍者から足が洗える。ひとかどの武士になる。おれは、もはや、人外の化性の身ではない！）

五

――此者不レ守千番にも害意の上潜入之段難レ成二御寛宥一、逆磔而梟首仰付候也。

立札が建った。城下小峯ヶ原の乾の隅である。足軽町に近い原っぱで戦さのときは勢揃いをする所だ。断罪場は対島谷をおりた谷峡にあるが、そこは人通りが少ないから、庶人見せしめの曝しにはここを使う。

孟宗の太いやつが磔刑柱の傍に立っている。五本一組みである。四本が囲むようにして、中の一本を支えて、風などで倒れないように作られている。中芯の一本だけが六尺ほどの高さで、首が突き刺してある。

無惨な曝し首である。傍の磔刑柱には、胴体が逆さまに縛りつけられ、胸には数度の突き傷がある。

蠅が血を慕って飛んで来て、首も胴も、斬り口も見えないほどたかっている。

見張り番の下人が二人いるが、荒莚に坐りこんで蠅を追おうともしない。

錆槍を持っているので、若い娘や女房などが恐いもの見たさで近よると、股のあたりに石突をふいに突き出したりして、

「こんだら血と、おめらの月のものと、どっちがくさいべ？」

などと揶揄っている。

どうせ、透破などの首を奪いにくる酔狂者は居ないからだ。
だが、その群集のなかに、粘い光りを放った眼があった。
〈——殺られたの〉
その眼が言った。
〈焦ったのかもしれないよ〉
別の眼が応えた。髪を桂包みにした若い女である。
〈あたしたちを待っていればいいのに〉
〈愚痴じゃ〉
〈でも、一人、減った〉
〈やむをえぬわな〉
〈これで、仕事がやりにくくなる〉
〈しかたがない。気をつけることだ。すぐには動くな〉
〈帰りたいよ〉
〈弱音を吐くな〉
〈だって……〉
女は歩きだした。
頬に泥がついているのは、農家の女に見せるつもりであろう。が、腰はきりっと緊って、下

肢が長い。この女、くノ一とすれば、よく一日に四十里は走るにちがいない。
女が先に立ち、男は二間ほどななめうしろから歩いてゆく。
〈木戸のお改めも厳しくなるよ〉
〈覚悟の前だ〉
〈忍びノ仕事は、お侍とはちがうよ。無理なときは、しないほうが……〉
〈臆病風だ、真砂〉
〈そうじゃないよ……〉
〈誤魔化すな〉
〈——そうかもしれない。曝し首なんて、いやなこった〉
〈上手にやれば、滅多にばれぬ〉
〈でも……〉
人が来た。
二人の会話は、他人には聞かれぬ。風が吹いているようにしか、聞えないはずだ。ぼんやりした土地の者には。
〈お巾がくるのだろ〉
〈うむ……〉
〈なら、あたしは帰るよ〉

〈くノ一は二人要る。二人でやれば、三人四人の働きをする。帰ってはならぬ〉
〈そんなおまえ、くノ一がいっぺんこんな気持になってしまったら、もう取りかえしはつかないよぅ〉
〈叩き直してやる〉
また人が来た。これを避けて、男は道を変えようとし、はっとなったように、また前の歩調でゆきながら、
〈尾けられている〉
と言った。
〈まさか〉
〈確かだ。見ろ、きさまのせいだ〉
〈お前が恐い顔をしているからだよ〉
女は——くノ一の真砂は、男を振りかえって素朴な村の娘らしく、艶めいた身ごなしでたるんだ笑いを見せた。いかにも、行商人の手管に嬉しがっているふうに。
〈そうだ、うまいぞ〉
と、男もぞっくり歯ぐきを見せて、下卑た笑い声をたてた。
「どうかね、おめえ、お天道さまが照ったところで抱き合うても、何が悪いもんけ」
「あらいやーだ、馬や牛じゃねだ」

「なに、府内では始終のこったわな」
〈まだ尾いてくる。その先を右へ曲れ〉
うしろから男は女の尻を撫でた。あれ、と嬌声で身をくねらせながら、女は小走りに小径へ走りこむ。
このあたりに寺が多い。土塀があるのはいいほうで、まるきり境内との境いがわからないような小寺が多い。
その一つ、ちょっと小高くなった墓地に二人はもつれるように入っていった。

六

気のせいではない。尾行者はいた。
藁編笠をかぶった武士である。土塀のところまで来て、ちょっとこちらを見たようだがそのまま行き過ぎた。
が、《黄金虫》には、それが忍法でいうところの雲煙過眼の《ソレ足》であることがわかる。
〈用心せい、執こいぞ、これは〉
と、男は女を抱きよせて言った。
〈ソレ足で過ぎた〉
〈北へ……とすると、東から現われるよ、きっと〉

〈それだけ睨まれている。危ないぞ〉
〈逃げようよ〉
〈莫迦ッ、いま走ったら鮫ヶ尾の木戸に着かぬうちに命はない〉
〈じゃあ……どうすればよいのサ、あたし、死にたくない〉
「呆れたやつだ」
と、男は落胆したように言い、
〈まぐわえ！〉
言いざまに抱き寄せ、唇を吸った。
墓石の向うに、ちらりと影を見たのである。予測した通り、その影は東の土手をのぼってきたようである。そこは投げ棄てになっていて、犬や猫の骨と、人間の骨が、ごっちゃになっていい、雨のあとなど、にゅっと突き出ていたりした。
もとより、役目にはそんなことはものの数ではあるまい。
むしろ、そこから来る者がいるはずがないという安心感の裏をかける。
黄金虫の男女は、その影の又裏をかいて、
〈早く……〉
〈いやだよ、お前とは〉
〈そんなことを言うとる閑があるもんけ〉

唇と唇を合わせたままの語りであった。こればかりは、他の忍びノ者の目耳があっても洩れようはない。舌と舌が語り、舌が舌を拒み、息苦しいまでの忍びノ者同志の抱擁であった。石塔と卒塔婆のかげの、僅かの土の上に、二人はもつれて倒れた。
拒みながらも、口の契りは、若い女の肌を刺戟せずにはいない。裾が割れ、白い脚が宙を蹴った。肘までめくれた女の腕が剝きだされて、男の背をひしと抱きしめるのを尾行者の狼眼は凝っと見まもっている。
どんな場に出合っても、たじろぐことのない眼であった。
女体が男の激情に応えてゆくのに嘘はない。
拒むと見えた女の肌に火が点いたようであった。
大きく広げた下肢が膝をまげて男の脚にからむ。男の手が裾をかき広げて、ためらいもなく、女のなかへ入ってゆくのも、狼眼は見逃さぬ。
忍法の心得とされる〝虚姿〟の主目には、己レトナルヲ忘ル、是本位也。己レ虚ヲ識ルモ影ヲ捨ツルコソ肝要ナレ……と教えている。
いま、くノ一の真砂を抱いている黄金虫なにがしは、半ば本気だったようである。醜く下品なこの男を真砂は嫌っていたようだ。くノ一としては若すぎるほどの未経験が、なかまの梟首を見て萎縮し恐怖した。
役目を捨て、甲州へ逃げ帰りたいと願う心には、この男と別れたいおもいも要素となってい

たのだ。

この黄金虫にとっては、北越かまいたちらしい尾行者は、時にとっての幸いでもあった。真砂とても、処女ではない。嫌いながら、この男の逞しく熱したいのちが、柔襞を侵入したとたん、理性は霧散し、抵抗し難い官能の喜びが、温かい潮をあふれさせて受け入れてしまったのだ。

そこには、忍者ということも、敵国だということも、尾行者の眼があることすら忘れさせてしまう、強烈な、いのちの燃焼があった。

男は少し違う。

(見られている!)

と、いうことが、(見せてやる)ことによって変質的な快感をあふっていたし、

(いまこそ、真砂を)

古府中を発足するときからの願望が、爆発したのだ。

腑甲斐ない。忍者としての資格には欠ける二人といえる。

が、これが、期せずして、〃虚〃の実、になっていたようである。情欲に溺れた男女の姿には、嘘がなかった。

藁編笠の武士は、二人が歓喜の呻きを憚かりなく洩らして、のたうちまわる姿を、そしてひいーっと恍惚の極まった声を出すのまで見とどけている。

二人が、余炎から睨めて、身を起こしたときには、その影は見えなくなっていた。

「よかった……」

と、黄金虫は言った。

それが、どちらの意味か、両方を意味するのか、真砂もほつれ毛をかき上げて、くノ一らしからぬ微笑を洩らしている。

血どろ風

一

(透波者ではなかったのか?)

多少の疑いが、まだ残ってはいた。が、この男の狼眼にも、あの情痴に狂った男女が、甲斐の黄金虫だとは信じられない。

忍びノ者は、多く初印象を大切にする。甲賀忍法雑俎に曰く、〃一瞥即ち千仞を覗くに似たり〃と。

一瞥の重さがわかる。瞥見の眼を養うというまでもないが、相手に演技させる前に見た印象というものは、おおむね間違いが少ない。

北越忍法なにがしが、曝し場でふと見かけた男女への疑惑は正しかったのである。

いかに〝窶し〟を巧みに行おうとしても、人間には性根を隠せぬものがある。それは、眼だ。盲人を装うか、病ン目、だれ目などを装うしかない以上、並のままでは、性根が双眸に出る。

行商人と農婦を装っていても、いかに顔に泥をなすりつけ、卑しい皺を描いても、眼だけは、〝別の人間〟たることを露わにしていた。

農婦や行商人が忍者にくらべてどうというのではない。常の社会に生きる人々には立場の相違というだけで公約数的な常識の範疇の中での生活がある。

忍びノ者にはそれがない。

かれらは夜に生き、日蔭に生きる。野伏し夜盗と区別するところは僅かに、ワザの誇りである。

大名の家臣たる忍びは、下人並であった。武士が、嫌った。同じ主君を戴いているということまで、武士にとってはけがらわしいことのようであった。

それだけ卑しめられながら、かれらは僅かにワザを誇り、

（武士がなんだ）

気慨だけは、誰もが持っていた。

というのも、〝忍びノ目〟を自認しているからだ。自分たちの持つワザは不断の鍛錬と克己心で養われ、常人では及びもつかない、という事実の上に立っている。

むろん、日蔭や夜に生きることの陰湿な喜びを喜びとして、半生を過して来た者もいる。そうした要素は、誰もが少しずつは持っていても大半は、もしも武将の地位を与えるといわれれば、古草履のように、〝忍びノ者〟の肩書きを捨てさる者たちだ。

この藁編笠の男が、まんまと甲斐黄金虫の男女に、痴態でもって瞞されたのも、あるいは、天堂耳介のことが禍していたのかもしれない。

かれは春日山城を囲繞する、谷の小径を上った。林泉寺とは逆の坂をまがりくねって上ったところにお花畑がある。

そこの崖下にお部屋が並んでいた。

殆んど小屋というに近い。鍛冶の音がしていたし、ごりごりと石臼をまわすような音が聞える。お花畑には、毒々しい色の花や、奇妙な草が見えた。また長屋の軒には何かの木の根が、からからになってぶら下っていたりした。

畑で仕事をしていた男が顔をあげて、

「毛内か」

と、言った。

老人である。これがお花畑ノと呼ばれる人々の頭領、ササメの弥十である。北越忍者かまいたちの黒羽組はこの長屋に皆住んでいる。いうなれば忍びノ屋敷であった。

ここは本丸、二ノ丸、三ノ丸とも離れて、普通では人目にたたない崖下になっている。崖の

上は毘沙門堂があって、お屋形さまがお籠りになる。
お花畑は毒草薬草の栽培のためであり、毘沙門堂の弥十との密談は、老臣重臣たちの耳に入ることがない。
「遅かったな」
老人は顎をしゃくった。
「集まっておる」
無言で頷いて、毛内は長屋の一軒に入っていった。そこは軒に鼠が五、六匹、干してあった。いや、正確には、鼠の皮というべきであろう。中味はそっくりえぐりとり、手足や尻尾を損せずに残しているのは、目くらましに使う道具なのか。
すでに十人ばかりの男たちが、仄暗いなかで、陰鬱な目を光らして坐っていた。誰もが怒っているようにむっつりとしていた。
「どう、決まった?」
毛内は藁編笠を脱いだ。
「どうもこうもない」中年の反っ歯の男が、みんなの意見を代表するように答えた、「殺る!」
「殺る?……」
毛内が、語尾を嚙んで、ちょっと首をかしげたのが、それまでの重苦しい空気に耐えきれな

くなっていた人々を、ざわっと、動かした。
「きさま、不足か」
「そうではないが……」
「考えても見ろ、御当家には、われわれ黒羽組という、れっきとした〝かまいたち〟が居る。いまさら、伊賀の郷侍などをお抱えなされるとは」
「郷侍だ。忍びの仕事をお任せなさるはずもない」
「わかるものか。御前で、神妙のワザを示したというぞ、そうだな、小六」
「うむ」
「そうだな、与作」
「おれも見た。お屋形はじめ、御年寄方、感じざるなしじゃ」
これは三寸と呼ばれる、小兵な男である。
「聞けば、二百貫下されるというぞ」
「ま、まことか!」
「らしい」と、毛内はそちらを振りかえりもせずに、言った、「弥十おやじにしてたかだか二十貫。われらは糊扶持ではないか。二百貫と申せば、お旗奉行とも肩が並べよう、われらとは無縁の話よ」
「左様に安心してよいものか。おりゃ、どうでもよい。誰が采配とろうと、こっちの身は所

詮、かまいたちよ、どういうことはない、死ぬときは、死ぬさ」

「……」

「弥十おやじの身じゃ、案じられるのは。それと、黒羽組としての誇りよ。こりゃ捨てられぬ。伊賀の忍法が如何に卓抜であるにせよ、越後には伝来のものがある」

「……」

「伊賀でも甲賀でも、巧みなワザあらば盗んで、われらに生かすことはよい。何も、伊賀侍を召抱えなど……」

「お屋形さまに文句を言うのかい」

毛内は、うすく笑った。

「われらよりも、ワザ人をお召抱えなさるまじく、か。ははは、てまえの至らなさを触れ歩くようなものだ」

「じゃとて！」

「もうよい」毛内はうるさそうに遮った。

「殺るのか、殺らんのか、どっちかに決めろ」

ごろりと横になって、

「おれはどっちでもよい。多いほうに加わる。どっちにしても、大したことではないわさ」

二

翌日、夜に入ってのことである。

意外な報告が景虎にもたらされた。

武田信玄の股肱であり軍師として名高い、山本勘助入道道鬼が、篠ノ井辺の郷士に捕われたという。

「まさか！」

誰もが疑った。

武田軍の敗亡は聞いていない。屋代の郷士など寝返りをうったくらいで、尼飾城はいまでも村上一族の牙城を支えていて、孤立しているという。

そうした情勢にあって、山本勘助が捕まるとはおかしい。

「郷士どもが逃散の手土産にしたのかもしれぬ」と、景虎は言った。「ともあれ、そちが参って、首実検して来よ。勘助を見知っておると申していたな」

「あの顔、姿。一度でも見た者は忘れますまい」

「そうじゃ護送の宰領を命じておく、花畑の者両三名ほど連れてまいれ」

その必要はないと思ったが、主命である。ただちに黒羽組の者が来た。毛内、与作、三寸である。

四人は闇の中を走った。初秋の高原には陽が落ちると寒気が忍びよっている。
走るというワザでは忍びノ者同志さしたるひらきはない。天耳は三人に合わせた。
（速い！）
いささか意外だった。
北越忍者が速いということは聞いていたがこれほどとは思わなかった。
（かまいたちとは、これか）
後世の著書だが、橘南谿の東遊記に、――鎌鼬ということあり、是は越後の国中に、いずれの所にも折節は有る事也。老少男女の差別なく、面部、又手足杯を太刀にて切りたる如くおのれときるの事なり。疵の大小定まらず、或はタテ、或はヨコ見事にきるなり、されど骨の切ることなし。又格別血の出るというにもあらず。只寒熱強く発し、時疫傷寒の如し……
とある。北越忍者の飛翔、疾走、その逡敏ぶりをかくも、みごとに表現した言葉はあるまい。
三人は一言も口を利かぬ。
黒風が四人をくるみ、前後して走る、走る。右手に連山を見ての北国街道は、南北に通っている。ほとんど真っ直ぐだ。さながら、疾走を競うが如くであった。
しかし、三人はむやみに走ったのではない。一里ほど走っては暫く速度を弛め、また一里を風に乗る、というふうであった。
（かまいたちの、息つぎか）

笑おうとしたが、ふと妙なことに気がついた。
五里と走らぬうちに、三人いたかまいたちが、四人になっている。
「はて、一人増えたぞ」
走りながら言うと、
「応援じゃ」
毛内が、こともなげに答える。
景虎が追加したのか。
一人だけのうちは、単純にそう思ったが、また暫くすると、一人増えた。五人だ。鮫ヶ尾城の木戸を過ぎたときは、六人になっていた。
「増えるな？」
「忍法孕み影」
三寸がせせら笑うように言う。
それでもまだ、天耳はかれらの気持が、そこまで憎悪が盛り上っているとまでは思わぬ。
かれらが、北越忍法を誇示しているのであろう、くらいにしか思わなかったのも、天耳にしては抜かっていた。
望み通り、二百貫の侍になれたという喜びが、目を曇らせていたのか。
山本勘助は関山の砦に押しこめてあるという。

その関山まで、あと数町というところまで来たときである。

突然、前後を走っていた六人が、足を止めた。

流れの岸である。街道は川で断ち切られていた。渡し舟がある。六人がとまったので、天耳だけが風を切って、抜け出た。

河岸であった。

天耳は、潺々たる流れの囁きのほかに、ぴいん！　と、弦の音を聞いている。ついで矢羽根の闇を引き裂く音を。

刹那、かれの軀は横へ飛んだ。

鋭い鏃が頬を掠めた。

三

闇の礫は避け難し、という。如何なる名人も、その風を切る音で、反射的に身をひねるのは、よほどの修練がなければ出来るものではない。

それは一種の動物感覚に属する。聞く、躱す——この関連は柔軟な姿体と、運動神経の連絡に僅少の齟齬もあってはならないのだ。

かまいたちの態度に一点の不審を感じていなかったら、その胸は黒羽の矢に貫ぬかれていたろう。

かれらの足が止まったことが、反射的に、

（敵！）

と感じた。

四面、みな敵。越後の闇は、北国街道の夜気は、身を裂くかまいたちに変じていたのだ。

ひゅっ！　ひゅっ！　前後左右から矢が飛んできた。

脇差で切り払いながら、天耳の軀は、飛び、伏し、転じ、さらに地面を滑るように走った。

（誰が、何故？）

そうした疑問を解くよりも、ただ、危険から遠去かることしかない。

夜目は利く。近いあたりに一木もなく一屋もなかった。

襲撃者が常人なら、目くらましする手だてもあれ、かまいたち忍者に取巻かれては、忍法のワザも発揮できぬ。一人や二人ではない。

六人のほかにも、闇はそのなかまを潜ませていた。

天耳が肘に一矢を受けながら、川へ跳込んだのは正しい。潜った。さして深くもなく、巾もせまい。真っ直ぐに泳ぎ渡ろうとはしない。時に流れにまかせ、ななめに進み、また流れのままにゆく。

〝雷の光るが如く〟屈折することは伊賀忍法〝水遁〟之参、——道に道ナク水に道アリ、足跡コレヲ水脈と謂フ……とある。水中にて追跡を目くらます方法の一つである。が、繰り返し

ていう、一人の忍びの方策が、多勢の忍びの目をくらますことが出来るか？

肘の矢を抜きとったのは、漸く、川下の向う岸に近づいたからである。水中で追跡者を感じなかったのは何故だろう。一矢を与えたことで、諦めたのか？

川の上大きく枝を張りだした松らしい影が見えた。水面すれすれである。颶風に倒木したのが、そのまま奇妙な寝松となって生えている。その陰に入って、はじめて、ふーっと、大きく息をついた。

（救かった……）

同時に、かまいたちに襲われたことの疑問が甦った。

（なぜ、おれを憎む？　一度は甲斐に仕えようとしたことを見抜いたのか？　知っていたのか？）

そんなはずはなかった。一歩を譲って、かまいたちが信濃へ潜入してきていて、それを見たとしても、かれの心が武田から離れてしまったことも又、知っているはずだ。

ただ、古参の者が新参者に対する態度にしては異常ではないか。

（身分か？）

かまいたち忍者は、春日山城に於て、下人でしかない。足軽以下だ。いかに功を樹てても出世はない。所詮、日蔭の身である。

そこに伊賀者が、知行二百貫の武士として召抱えられる。

（憎むのは当然かも知れぬ……）

伊賀忍者の出でなければ、憎まれることはなかったろう。天耳は、闇のなかで哀しく自嘲した。望みもこれで終りか。忍びノ者という日蔭の身から、太陽の下へ出ようとしたおのれを、嗤うしかない。かれは再び夜の闇が持つ非情で陰湿な〝蛆の群れ〟に地の底に引きこまれるような恐怖をおぼえた。

闇は、しかし眼を持っていた。冷酷な眼は天耳が、忍びノ者としての緊張感を、何の感情にてもあれ、弛緩する隙を狙っていたようである。

水から出ようとして、松の幹に手をかけた瞬間、

しゅっ！　しゅっ！　松葉が哭いた。凄まじい力が天耳の両手を幹に張りつけた。ぼくっと、骨が折れた。十字手裡剣であった。二箇の十字は、狂いもなく、天耳の両の手を松の幹に打ちつけてしまった。

（不覚！……）

鋭い痛みが指先をわななかせ、だらりと天耳は吊された。水から飛び出る力は、無かった。

「――どうじゃ、お侍」

皮肉な声が聞えた。

頭上である。その影は、松の幹を音もなく歩いてきた。手の上でしゃがんで、もがくさまを冷たく見おろした。

「それで二百貫の御奉公が出来ると思うてかい」
頭巾から目だけが出ていた。蛇のような眼の光りであった。

四

手裡剣は地上から投げたものではない。川中からである。いつか水面には黒い冬瓜を浮べたように、幾つもの頭が浮いていた。
その数を、算えることも、もはや天耳には出来ぬ。
「何をする」
激痛に耐えながら、かれは頭上の影に抗議した。
「おれが何をした？　何故こんな……」
「身のほど知らず……」呟やくような返事である。その男が、かなりの老齢だとは思ったが、ササメの弥十という名は、知らぬ。
「ムササビが居た。身のほど知らずのムササビがな……」
こう言った直後、激痛が指に走った。
右手である。ザクッと指が斬られた。食指。
「うわっ……きさま、卑劣な……」
食指は幹をすべり、ふり仰いだ天耳の顔の上に鮮烈な血の臭いを放って落ちてきた。

「あるムササビのことだ」と、弥十の語調は変らない。
「鷹になろうと思った……ムササビは下には飛べるが、上には飛べぬ」
「そんなことはわかっておる。指を……」
「これか」
サクリ、と中指が斬られた。
「うぬ！」
「やつは鷹になろうと思った。梢から、上へ飛んだ……」
サクリ、とこんどは拇指が斬られ、だらだら流れる血は、天耳の額におち、目鼻を濡らして滴る。凄惨なそのさまにも関わらず、弥十の声には、昂揚するところがない。
「飛べぬさ。落ちた。が、あきらめぬ。また飛んだ……」
淡々とした話ぶりは、まるで炉端で老爺が昔語りするにも似ていた。
「落ちるわさ、のう……梢が高ければよいと思うた。が、高ければ高い分だけ、ムササビは傷ついた……」
「……」
「ムササビの翼は、所詮、ゆるやかに滑降を助けるものにすぎぬ。翼とはいえぬ膜じゃ。それを翼と思うた愚かさじゃ」
サクリ、とこんどは左手の拇指が斬られた。

「それくらいのことで、おれが憎いか、憎むのか！」
「ムササビは飛膜を傷つけたわ。忍びノ者が指を失うのと同じよ……」
左の食指が、また落ちた。
「飛膜は裂けた。破れた。千切れた……そして、脚を折った……」
小指はその小ささにくらべて、斬る力が強かったのか、宙にはねて、水面に小さな飛沫をあげた。
弥十は、鋭利な、短かい刃物を指のつけねにあてて、峰を拇指の腹で押すようにして押し切りにしている。
その手つきも、目の光りも、樹枝の剪定でもしているような。
「ムササビは、鷹になり損ねただけと思うかの、お侍」
指は殆ど失われ、僅かに右の小指一本を残すきりとなっていた。
丸坊主にされた手の、九指の切口からあふれる血は、だらだらと流れて手から手頸から肩、そして、天耳の頭も顔も朱にまみれさせていたが、両手の甲を刺した松の幹に釘付けにした十字手裡剣を抜いてやろうともせず、幾人もの忍者たちは、水中に円陣をつくり頭だけを出してこの凄惨な私刑を見まもっているだけであった。
「返事がないが、どうしたかの。これしきで死ぬるはずもあるまいが。ムササビのことを聞いておる」

「ム、ムササビなぞ、どうでもよい、おれを殺すのなら、早く、殺れ」
天耳の声は嗄れ、もう力がない。
「ムササビは傷ついた……鷹になろうと思い上った報いでのう、ムササビは飛膜まで失い梢から飛び降りることも出来なくなってな。地を這うていたわ」
ザクッと最後の一刀が押しあてられた。
老忍は、ことを終えると腰をあげた。そのまま立ち去ってゆくのである。
「ぬ！　待て！　いっそ殺せ、こんな、こんな……」
奄々（えんえん）たる気息で呼び止めようとする声も、しだいに細まり、地虫の呻きのように細まってゆく。
ササメの弥十の姿が見えなくなると、水面に円陣をつくっていた黒い影も、冬瓜が沈んでしまったように、消えていた。

五

関山の砦では、山本勘助入道道鬼が両手を縛られ、篝火の明りに、てらてらと凸凹の多い頭を光らしていた。
不逞くされたように、ものを言わぬ。
隻眼を光らせ、むっと唇を噤んでいる。

ササメの弥十をはじめ、毛内、三寸などが門柵に着いたとき、この砦の大将、安原源太左衛門は、刀の鑑定の目を持つ袁斎という男に勘助の脇差を診させていた。

「おう、もはやお着きか。さすがにのう、早馬も及ばぬ足じゃ」

「その刀は？」

にこりともせず、弥十は言った。

「勘助の帯びていたもの。こやつが武田の軍師かどうか、しらべていたところじゃ」

「で、答えは」

「無銘でございますが」と、袁斎がしたり顔に答えた、「鎌倉の名のある鍛冶の手に成りしもの。まず大名道具かと存じます」

「道具は拾えばそれまでじゃ」

弥十は勘助を見た。

北越かまいたちは、誰もまだ勘助を知らぬ。名はすでに響いている。その名声の高いほどその容姿の奇怪さも、誇張されて伝えられている。

初老の年配といい、隻眼といい、その頭でっかちの奇体な容姿はなるほど、噂の通りだ。

「立て」

と、弥十は言った。

勘助は傲慢な顔で、そっぽを向いている。

「歩かせろ」

と、目を放さずに言った。

三寸が、忍び刀を鞘ごとぬいて、股の間に差しこもうとした。この男、さっきから落着かない。まだ私刑の昂奮を残しているようである。

「あいや、それがしが」

と、背後に控えた男が縄尻をとって立った。

「武田の軍師どの」と、おごそかな調子で言った、「立って歩め」

これが篠井の郷士らであろうか、全部で七人である。小具足をつけている者もいたし、平服の者も交っている。

「歩け！」

三寸が怒鳴った。

無言で立った勘助は歩きだした。縄尻をとられていて、矮軀で足が不自由で隻眼の、これは猿廻しの猿という恰好だ。

圧えきれぬように、砦の足軽は、げらげら笑いだした。

「猿じゃ、猿じゃ、を踊らせろ、ホイ、お猿の尻は真っ赤じゃほどに……」

「やかましいわい！」

安原源太左衛門はこれを一喝で鎮めると、

「汝らは木戸の見張りを怠るまいぞ、琵琶島には武田の軍勢が押寄せておるというぞ、しっかりと仕寄の篝火を焚いておけ」

追い払ってから、弥十をふりかえって、

「すぐに連れて行って下さるか。なにせ、かような預り物は気骨が折れる」

「真正、武田の軍師とあらば、直ちに送りとどけるが……」

七人の郷士はそれを聞いて、顔を見あわせた。

「恐れながら」と、頭(かしら)だった者が口をだした。

「何やらお口ぶりでは、この軍師どのが、ニセ者であるかのようでござるな。憚かりながら篠井の者に明き盲は居申さぬ」

「加兵衛どん、そう昂ぶっちゃ話が出来んで」

と、実直そうな男が遮って、

「へえ、わっしらみたような者が、どうして偉い御軍師をとっ摑めいたか、御不審でござりましょう。実は、尼飾のお城が囲まれていての。海津から、清野なんどの山裾、川中島のほうまで、御陣が出来ましての、わしらの嬶ァや娘っ子まで、炊ぎや兵糧運びにこき使われ、わしらは雑木の切り出し、竹切り、柵作り、土掘り、いや難儀でございまするで、なんせ、甲斐の奴らときたら、そりゃもう」

「吾助。肝腎なことをお話しせぬかい」

と、別の男が、べらべら饒舌りだした。

「久造の娘というのが、美しい女でござりましてな。村の衆は弁天と言うとるだが、その噂を聞いだか、この片目の軍師が来よっただ」

「そン通りで。家来衆は十人もいたが、酒ン中へ兜菊(かぶとぎく)の根の煮出し汁をウントコさ入れた上に、酒ン肴に毒茸を食わしてやっただで、へべへっ、みんな七転八倒でころころ死による。目ェ白く剝いて、歯ァ剝き出いてよぅ」

「ほいで、みんなして、この軍師さまをぶ喰わして縛り上げたちゅう次第で」

兜菊とは烏頭である。猛毒がある。

聞けばなるほどと思われた。が、念を入れた。ササメの弥十は、醜く潰れた勘助の上瞼をむしるようにあけてみた。瞳孔は青白く、すでに死んでいる。

「馬の用意を」

と、安原を振りかえって弥十は言った。

「おぬしらも恩賞にありつけるであろうが」

と、一人一人を見まわしながら、

「あまり、欲は出さぬことだな」

「へい、そりゃあ、もう……春日山のお城でお屋形さまに、一言おほめの言葉を頂きゃあ孫子の代までの宝でございまさ」

「足軽になら、お取立て下さるであろう」
と、さらに弥十はつけ加えた。
山本勘助は凝っと隻眼を光らせて、そんな弥十の股間のあたりを見つめている。その唇が、何やらぶつぶつ呟いているが、唇を読める毛内にも、意味がわからないでいた。
（屈辱と不安で、気がおかしくなっているのではないか）
と、単純に思った。
手をくくられたまま、勘助は裸馬に乗せられた。両足も縛られてその縄を馬腹をくぐらせて左右で結ばれたのは、落ちることもないが、逃げ出すことはまず絶望であった。

秋風川中島

一

「血祭りにせい」
と、景虎は言った。
「武田の軍師山本勘助を血祭りにあげることは、とりもなおさず、武田信玄の右腕を斬ることじゃ、士気がふるい立とうぞ」

「御発案、げにも道理にございます」と、重臣の宇佐美定行はやんわりとさとした。「さりながら、せっかくの獲物、ムザと斬るのも勿体のうござる。蜂の巣は蜜がたまったのちに奪れと申しまする」
「ふん。それはそうだ。ではどうしろというのだ」
「まず、御城下を引き廻しまする。御出陣の血祭りには、片腕斬るなり、鼻を削ぐなりして、血を供えるもよろしゅうございましょう」
「それから？」
「磔刑（はたもの）にかけまする」
「それでは同じことではないか」
「すぐには殺しませぬ。生身のまま、御陣の先頭に立て、信濃へ押し出でまする」
「なるほどな」
「地形より見ても、まず戦場は川中島となりましょう」
「善光寺の向うじゃな。川にはさまれた平らなところだ、大軍を動かすには恰好じゃ」
「片目の勘助が磔刑柱で泣き喚けば、武田方が萎縮するのは火を見るよりも明らか、そこを攻めたて攻めたて、叩き潰しまする」
「萎縮するかせんか、わからんが、やって損はないな。ただ、おれが、左様な手を用いる大名じゃと、天下のもの笑いにならねばよいが」

「戦さは勝たねば嘘でござる。勝ちさえすればなんとでもなりまする。政治に御仁徳のほどを示せば、民は従ってくるもの」

景虎は血祭りをやめた。

かれとしては、すぐにも出陣したかったがあくまでも義戦の旗をおろしたくはない。そのためには村上義清を看板にしなければならないが、義清は漸く春日山で保護されてほっとしたのであろうか、熱を発して、頭が上らない。

医師玄庵の診たてでは、

「ふぐりの傷口が悪化しておりまする。簡単には治りませぬ」

という。

なぜ陰嚢を切りとられたのか、ちょっと理解できなかったが、乱軍の間では、そうしたこともあろう。陰茎に矢を受けたので、化膿を恐れてそっくり切りとり、排尿には細竹を管にして尿道に差しこんでいる武士もいた。

「睾丸が無くば、アノほうはどうなるのじゃ」

「ふぐりは男の精を作り、溜まりおるところにござります。女恋しやと思う情も、いうなれば、この働きにて、出ずるもの。されば、睾丸が無くば、淫欲の心、全く起きませぬ」

「ほう……女がいらぬ？」

「女若の道は、全く失れまする」

こういったのは玄庵、景虎が寵童との衆道の深さを知っている。お珊と不倫の道にあることもうすうす感づいてはいるが、これは知らぬふりをせねばならぬ。

「それもいっそ、さっぱりするかもしれんな」

半ば本心。お珊の欲情はますます強くなっていて、近ごろでは景虎のほうが辟易することがある。

寝所へ戻ってからも、稚小姓を遠ざけた。かれはそういう意味では若い。ある種の潔癖症でもある。戦さのことを考えると女若のことは忘れる。

戦さ好き、ということは、若さの代名詞になるかもしれない。しかし、三軍を叱咤し、精強の兵が手足の如くに動いてくれるならば、男ならたいていのものが、女若をかえりみないでも済むのではないか。

男、という言葉の持つ響きには、闘争心が大いに幅を利かしている。利己心や名誉心もあるが、これは女にだってある。闘争本能こそは、男の生得のものだ。

テレビや映画でハリウッド製の戦争映画が大いに当っているが、どうかすると、日本兵の姿を醜く描き出すことがある。いささか腹の立つこともあるが、それでも戦争の昂奮の中に惹きずりこまれずにはいない。アメリカ軍の行動の正邪を論じる前に昂奮が男の気持をつかむのだ。西部劇だって、インデアンの立場は日本人は理解できるのに、騎兵隊の活躍に昂奮する。正邪を超越した闘争本能が感応するのだ。

この遅しさが、男から失われたら、社会生活では落伍者になる。

長尾景虎（後の上杉謙信）の場合、あまりにも、男性的であったのだ。大名の子に生れたときから宿命づけられた好戦家であった。

武田信玄も同じように父からうとまれて成長しているが、両者にはかなり違った面がある。その大きな違いは、女色だ。信玄は次々と侵略した大名の娘や若妻に手を出している。謙信にはそれがない。

何故、なかったか？

その理由は、この夜の景虎の身の上に起った奇怪な時間を見ればわかる。

二

景虎は眠れなかった。

武田信玄との戦さは、思うだけでも、ぞくぞくするような嬉しさだ。おのれの力を充分に発揮出来る場が、そこにある。凛々たる武者顫いである。

これまでの戦さが思い出される。六韜三略の兵法と照応して、あれこれ考えていると、短檠の灯が、はげしくまたたき、すーっと細くなった。

（はて？……）

戸が開いたような。景虎は枕元の鈴に手をのばそうとしたが、半身を起してみた。唐紙は閉

っていた。

（気のせいか）

枕に頭をおとした。

変だと、思うと、ますますおかしい。室内に籠った夜気に何か妙な臭いがする。

（忍びノ者が？……）

ふっと、思った。が、すぐに打消した。

（そんなはずはない。たとえ、奴が叛心したとしても……）

天堂耳介のことだ。ササメの弥十の報告では、関山へ着くまでに姿を消したという。やはり敵方よりの透波でござったろう、と重臣たちのなかには言う者もあった。病中ながら村上義清は頻りに否定したが、誰も耳をかそうとしなかった。こんな時代では、行動だけがすべてだ。内面の是非は誰にも信じられない。現象で判断するしかない。

二百貫で召抱えようという、破格の厚遇を蹴るほどの何かが、天堂耳介にあったとは考えられなかった。

ここは山上の高楼ではない。山下にある屋敷である。日ごろはこの屋敷で起居している。山城の機能はもともと戦時設備で、籠城のためのものだ。生活に不便だから、日常は山下を使う。どこの山城でも、したがって山麓に屋敷がある。

妙な夜気が生温く感じられたのは、昂奮しているせいであろうか。水を飲もうと、と思った。

が、枕元にいつも置いてあるギャマンの鶴首の水差しが、さっきあたりを見まわしたときは、無かったような気がした。

（忘れたのか）

夜具の支度をするとき、小姓が忘れたのだと思った。

が、半身を起してみた。

ある。

なんだ、どうかしている。何やら意識が朦朧としているようだ。中途半端に眠り損なうと、眠るも起きるもない、うつつになっている。

景虎は水を飲んだ。

それから程なくである。するすると枕元の金屏風の陰から黒い影があらわれたのは。

その影は頭が大きく、矮軀で片足を曳いていた。が、その足で、ぴょんぴょんはねて、夜具のまわりを踊りはじめたのである。

へホーイホイ、ホーイホイ
痺れたか、痺れたろ
ふぐりさまだけ、痺れンな
お殿さまでも下人でも
どうせ同じことじゃんけ

ああ食いていな、食いていな……

灯は細くなっている。その奇妙な、自由に闊達に、足をあげ、手を振り、ぴょんぴょん飛び跳ねて、景虎のまわりに迫る影はいうまでもない。ムクロジに違いない。

だが、ムクロジは足も不自由な様子はないし、隻眼でもなかった。髪もばさばさと赤茶けてこそいたが、とにかく、あった。このムクロジはつるつる入道頭なのだ。

入道頭で、隻眼で、足が悪いなら山本勘助ではないか。勘助が、こんな〝ふぐりの唄〟を歌うだろうか。

捕われの身の山本勘助は、断罪場の上のカニ沢の岩牢に入れられていたはずだ。

その岩牢が、怪力で格子丸太をひん曲げられて、矮軀が逃げだしたことを、あと小半刻もすれば見廻りが来て発見するだろう。

奇妙な唄。ふぐりの唄と歓喜悦楽の奇怪な独り踊りは、うつつのうちに、景虎の眼を瞠らせた。

（夢か？……）

夢か、うつつか。天下の雄将として、弱冠十九歳で越後守護代、実質的に大守となった長尾弾正少弼の寝所に侵入することすら、不可能なはずなのに、就寝している夜具のまわりを唄い踊って、狂喜乱舞している者がいようとは。

景虎自身が、信じかねる現象なのだ。

（夢だ、悪夢だ、これは……）

と、思ったのも当然であろう。

夢にちがいない。なぜなら、景虎は身を起そうとしたが、動けない。手足が動かないのだ。こんなことがあるはずがない。夢を見ているのだ、しかし、なんと奇妙な夢であろう。いままでこんなおかしな、気味の悪い、夢は見たことがない。

だが、なんと、その妖奇の踊り影が、山本勘助入道道鬼にそっくりなのは、何故か。いやな夢だ。何故こんな夢を見ねばならんのだ。

（そうか、あいつに酒をぶっかけたからか）

思いだした。

庭先に引き据えた勘助入道を訊問したのに何一つ答えようとしない。弓の折れで殴らせた。それでも口を開こうとしない。いや、ぶつぶつと何か呟やいているのだ。小莫迦にされたようで、かっとなって盃を投げつけた。

それを怨んで、迷って出たのか。

二

奇妙な、あまりに奇妙な……

天下高名の武田の軍師、といえば高僧にも比すべき智者である。刀技、槍術の巧拙は一まずおくとしても、知性は疑えない。その勘助が、こんな痴呆の唄や、踊りをするか。

（――夢だからだ、夢は五臓六腑の疲れという、変なこともある……）

納得しようとした。

そのとき、唄がやんだ。踊りをやめた〝勘助〟は、けたけたと笑うと、涎れを白く流しながら夜具をはねのけ、景虎の下肢をつかんだではないか。

その手は、いつの間にか、小さな刃を閃めかしている。

（夢か、これが夢か！）

豪毅の景虎が、生れてはじめて、恐怖を感じたのである。

ねっとりと汗が吹きだし、眼に流れてきた。腋の下も背中も、内腿も、全身、汗だ。

隣室に控えの宿直の小番衆を呼ぼうとした。が、声は出ない。手足も動かぬ。

それをいいことに、この〝勘助〟は景虎の下肢をおしひろげ、下帯を切り離して――それはまるで、藪柑子の実をとるために邪魔な小枝を切り払うように――景虎の陰部を露わにしてしまった。

（な、なにをしようというのか、この狂人は）

夢だ。夢であってくれ！

だが、その願いも虚しかった。〝勘助〟は、いや、もはやこの男が勘助でないことは明白だ。ムクロジだ。ムクロジでなくて、誰が人の睾丸にこれほどの喜悦を示そう。

ササメの弥十が調べたとき、たしかに、片眼は死んでいた。そうだ、瞳は死んだのである。この命令を下したとき、勘助入道道鬼は、手ずから、針でムクロジの瞳を刺したのだ。

「春日山城に行ってこい。景虎を殺って来い、そうすれば許してやる」

この〝義兄〟は言った。ムクロジは唯々として従うしかなかった。片足を不自由なものにしたのも勘助である。勘助でなければ、春日山城まで連れてゆかれることがない。髪は剃っても生える。眼と脚は、二度ともとへ戻らぬが、ムクロジは、この兄の逆鱗に触れるくらいなら、眼玉の一つや片足曳きずるくらいなんでもない。それに、言われた通りにさえすれば大好きなふぐりにありつけるのだ。

たしかに、勘助の狙いは当った。

いましも、ムクロジは嘗ってないほどの高貴の身のふぐりを切り取ろうとしているのだ。

それも戦場で死にかけた、それではない。若く、そして生身の。全身を痺れさせたのは勘助に渡された薬、いや毒を枕元の水に入れたからである。その痺れ薬は何から採ったものか。

《黄金虫》が敵地へ潜入してよく使うものであった。

切った。一瞬、さすがに激痛が景虎を襲ったらしい。びびびッと動いた。痺れ薬がはや、睚めかけているのか。

切ってしまえば、もうこっちのものだ。ムクロジはほたほたしながら、くるりと皮を剝く。藪柑子の赤い実。赤い汁がぽたりと滴るのを惜しそうにべろりと舐めて、口の中を潤してから、

漸く、願望の珍味を、ゆっくりと味わいながら食べるのである。

景虎は動かない。

大きく瞠目したまま、失神していた。

近習がそのさまを発見するのが遅れたら出血で死んでいたろう。その意味では何が幸いになるかわからない。

その少し前から、山上の高楼では、かまいたちの黒羽組と甲斐忍衆黄金虫の凄絶な死闘が、血を噴き、火花を散らして行われていたのである。

黄金虫たちが、どうしてここまで潜入し得たか。賢明な読者はすでにわかっていよう。

あの篠井の郷士と名乗る者たち。かれらが黄金虫の寨しであることを。

春日山城まで潜入することを得たが、しかし、複雑な城内外の機構と生活の仕様を完全に把握するには、あまりに時間が短かかった。いうまでもなく、あの先に入っていた女忍の真砂などから、城内のあらましを聞いたくらいで、景虎の身辺の委細はわからぬ。その知識の不足が、この失敗を招いたのである。

すなわち、景虎はおのれの影武者を数人、あちこちに散らばしている。高楼に今夜、寝んだ影武者が黄金虫らの犠牲になったにすぎない。

その影武者が、ササメの弥十の支配下に属し、暗殺剣迫ると感じるや、かまいたちを呼んだことも、いうまでもない。

ムクロジだけは違う。

かれの動物的嗅覚、異常に鋭敏なそれは、取調べの際、充分に景虎を嗅いだことで、影武者に惑わされることがなかった。影武者は所詮、外貌だけの酷似である。

急のお召しですっ飛んで来た医師玄庵は、血まみれの景虎の股間を一瞥するなり、

「これは……」

と、叫んだきり、言葉が出ない。あまりにも村上義清の傷と同じではないか。

四

村上義清が長尾景虎を頼って、越後へ走り、援を乞うたことを、かなり長い間、甲斐では知らなかったようである。

妙法寺記には、「此年、信州村上殿、八月堅田の要害を引のけ、行方不レ知なり候。一日の内に要害十六落申候。分取高名足弱いけ取申候事。後代に有間敷候云々」と、ある。

信州の豪族たちには、義清のことが伝ったと見えて、麾下の高梨政頼、須田満親、島津規久、井上清政などが陸続として投じてきた。

だが、景虎が、実際に兵を動かして、川中島に武田信玄と相見えたのは弘治元年七月のことである。

甲陽軍鑑によると、天文二十二年十一月に川中島の戦いが始まったとあり、戦陣二十八日に

及ぶとなっているが、これは信じることが出来ない。これは偽書の上杉輝虎注進状なるものを信じたための間違いで当時、景虎は上洛中だったのである。

この九月、景虎は二千人の家来を引具して京へ上った。先に前年四月、後奈良天皇愛寵を給わり従五位下、弾正少弼に任じられた礼のためであった。まず神保親綱を先発させて剣及び黄金、巻絹を朝廷に献上し、その寵恩を拝謝し、斡旋の労をとった大覚寺門主義俊に青銅千疋、津崎光勝、渡辺盛綱に各二百疋、その他公卿たちにも金品を贈っている。

京に行くといっても楽ではない。北陸路は有名な加賀一向一揆が蟠居している。

ここを通るために大層な金をつかった。

加賀越中の豪族らを懐柔し、小山の本誓寺住職を諭して越後移籍堂宇寄進を約するなどしてその上加・能・越三州の門徒には、北陸路上洛を、ただ天朝への御礼の為と言明して、漸く通過することが出来た。

こうして参内するや、拝顔に浴した上、天盃と御剣を賜わり、さらに、禍乱戡定の勅諚を受けた。

これは父兄の先蹤に慣ったもので、信州へ出陣する口実が出来たわけだ。

将軍義輝に謁し、大徳寺に参って戒を受けて、紀州高野山まで足をのばしている。

さらに、川中島合戦二度目を翌二十三年八月十六日とあるのも誤りだ。畠山、宇佐美二家の伝説に由ったもので、世に伝わる感状なるものが偽物なのだ。

だが信玄は出ている。先の妙法寺記によると、「天文二十三年七月二十四日、武田晴信様信州へ御馬を被」出候云々」とある。

史書の真偽を一々註解していても始まらないが、このとき、信玄方は猛威をふるって、一夜に九塞を屠り、佐久郡を蹂躙したので、景虎は軍兵を押し出して信濃へ入った。が、そのときは、信玄が軍を引き返したので、戦うことなく終っている。

こうして、実際に川中島で干戈を交えるに至ったのは、弘治元年七月のことである。この歳は十月二十三日が政元だからそれまでは天文二十四年になる。

おもうに、景虎が義清の乞いに応じて直ちに出兵しなかったのは、ムクロジにふぐりを抜きとられたことに、あるのではなかろうか。

思わぬ傷病を得て、場所が場所だけに景虎の懊悩は尠なからぬものがあったろう。

そして、その救いを信仰に求めるや、切なるものがあったと思われる。天朝への謝礼もさりながら眼目は、ふぐりを失った痛手から立ち直る再生の力を得んためではなかったろうか。

臨済の巨刹、大徳寺を訪れたのは極寒師走の八日であった。大徳寺には九十一世普応大満国師徹岫宗九が在り、参禅して尋究するや、豁然として目醒めた。在俗の儘、三帰五戒を授かり、法号を宗心とした。

長尾入道宗心と称したが、まだ有髪のままである。帰国して半歳の間、戒行を保ち、読誦写経に懈怠なく善根菩提のために寺塔を建立し、遍く喜捨供養を行ったというが、股間の痛手が、

まだ時折、再発していたのではあるまいか。

禅門に学んだ景虎が、真言密教に惹かれた気持も、普通では解し難い。密教は俗世の俗人の生活からは縁遠いものだ。男としての生殖機能、性の快楽から永遠に突き放された景虎にして、密教の真諦を探らんとした気持は理解できるのである。高野山に行ったときのかれは、頭に黒漆の陣笠を頂き、右の手には備前長光仕込の戒杖を曳き、左の腕には百八の珠数を掛け、軽装飄然として金剛峯寺に登ったという。

こうして煩悩解脱を得た、というより、戦さにこそ、おのれの生きる道を見つけた景虎の第二の人生が始まるのであった。

起てば疾風迅雷の如く、神速猛烈之を避くるに暇なく、之を防ぐに道なき、と称われた景虎入道宗心の川中島に於ける戦は、弘治元年七月十九日である。

毘沙門天の加護を信じた景虎は、毘の一字を書き、刀八毘沙門の旗と称した。この旗の行くところ、正しく武神を戴した降魔軍である。

春日山を発した大軍は、真っ直ぐ南下して信濃に入り、琵琶島城、葛山城を後陣として善光寺平に布陣した。

一方、甲斐の古府中を出た信玄は、諏訪から和田峠を越え、上田に出て千曲川を下る。この間、風林火山の旗を遠望した豪族たちが家ノ子郎党を引具して参集し、屋代まで来たとき数万にふくれあがっていた。

勢いの強い方に加わりたいのは人情だ。村上義清の麾下だった善光寺の別当栗田寛明は叛いて武田氏に応じ、水上郷の旭城に拠った。

越後軍を二分するためである。信玄はこれに配する精兵三千、強弓八百及び鉄砲二百挺を以ってせり、という。

信玄の——というより山本勘助の軍師たる謀略の手は、信濃の諸将はもとより、越後内部にまでのびていた。越後国内での叛乱を策している。たとえば刈羽郡の北条城の謀叛がそれである。北条高広はひそかに軍勢を集め、留守の春日山城を奪わんとした。景虎は急を聞いて軍勢を山越えさせ、逆落しに攻めかかって討ち滅した。前年冬のことである。

さて、両軍激突の朝——七月十九日の陽がのぼる前、暁闇を衝いて走る影があった。

五

景虎の越後勢は善光寺の境内を背後にして布陣し、信玄の甲信勢は更級郡の大塚の段落に、主力を置き、左右両翼を数町張り出して鉄炮隊を配置するという巧妙な布陣で、両者の間を犀川の急湍が、轟々と吼えて流れている。相距ること三十町を出でぬ。

越後勢の鹿柴の隙間からこぼれた影が、一つ、二つ……滑りでた。

篝火と篝火の間の暗いところである。影は物蔭から物蔭へ、逡敏に転々して、犀川に至ると、するりと水へ入る。音も立てぬ。

急流は、夜目にも白く、波頭をたてて、流れている。影は没した。一つではない。次の影も又、それにならった。又、一つ……

信濃の高原はすでに秋の風が立っている。暁闇の川は冷たい。

四人目の影が川に入ったときである。目の前に泳いでゆく影が見えた。等間隔を置いたはずなのに、どうして遅れたのか。

「おい、急げ」

その声を待っていたように、その影は振りむいた。泳ぎながらである。ほやりと笑った。歯が皓い。あっ、と思った刹那、かれの左胸部は冷たく細いものが、貫ぬかれていた。

「う……」

「憶えているか、二年前のおれを」

その顔を見定めるには、鋭利な刃物は、あまりにも正確に急所を貫ぬいていたのである。影は——かまいたちの小六だったが、そのまま波に呑まれた。

刺した刃物を引き抜いて、男は流れよりも早く水中を走った。その両の手は異様である。片手は大きな釣針のような手鉤がついていて、片手は鋭い両刃の剣、六寸ほどのものである。

その両方とも手からそのままでていた。手の先を革でくるみ、手鉤も剣も革の中央から突き出しているのである。

三人目のかまいたちは。この鉤で、ぐいと背後から引きとめられている。

「う、何やつ」
「おれだ」
言下に、剣が咽喉笛を刺していた。これはかっと瞠目した眼の前で、男の顔が笑った。
「おれだ、見忘れはすまい」
「あ……」
言葉はなかった。ほそい笛のような声を洩らしたままである。剣を抜き、鉤を離してやると、波がこれをさらった。たしか、与作というかまいたちであった。
二番目の男は、少し下流で向う岸に泳ぎついたところであった。目印の柳が朝風に揺れている。昇ったところを、がっと鉤が引き止めた。手鉤が脛に食い込んだのである。
「うぬは……」
驚愕の顔を目の前に持ってくるように、引きおろした。かまいたちの手は赤土を掻いた。
「よく見ろ！」
「あ……天堂……」
「天堂耳介ではない、天耳じゃ。この二年間うぬらへの復讐のために、おれは生きた。この手を見ろ」
一指もない両手は、きっちりと革で蔽われ、剣と鉤になっているのだ。その手鉤が、毛内を地獄へ追おうとしている。

「ぬ！　迷うて出たか」
上半身をひねった。その手はしかし、手裡剣を投げるには近すぎたのである。背に負った忍び刀を抜きかけた腋から胸へ、音もなく刃は通っていた。
先発したのは、かまいたちの首領ササメの弥十。信玄の本陣に火を放つべく、臭水（石油）の樽を背負っていた。
（どうしたのか？）
遅れた三人に不審を感じて、凝っと段落の闇の底に忍んでいた。夜気が動き、湿った影が近寄った。
鋭敏な鼻は瞬間、血の臭いを嗅いだ。
忍び刀がその腰から滑り出るのと、かっと受けた手鉤が火花を散らしたのは始と同時だった。ぐいと、手鉤をひねって近よったとたん、弥十は水月を冷たいものが通ったのをおぼえた。
「二年間、おれは待った」
近々と顔を寄せて天耳は言った。
「この手を、この手で汝らを殺るためにな。伊賀者は、やられた分は返さずには目をつぶらぬのじゃ」
水月を貫ぬいた刃は、ひき抜くと同時に、弥十の手に走っている。ばらりと数本、指が落ちた。弥十は喘ぎ、咳きこんだ。口から黒い血が奔った。天耳の刀はさらに残りの指を、するり

と撫ぎ落している。手鉤をこじると、もう力を失った弥十はぼろりと忍び刀を落してしまった。

天耳が右手の指を丁寧に、ゆっくりと時間をかけて切り落す間、弥十は息があった。かれの復讐に甘んじるために、必死に生きて、苦しみに耐えているようであった。

天耳の復讐が成ったとき、老いた頬に、ちらりと法悦にも似た笑みが掠めた。

「伊賀ノ者よ」色のない唇が、わなないて、微かな声を洩らした、「わしらは、忍びじゃ…

…日蔭に生きた。かまいたちも、地虫の如くに死なねばならぬか」

天耳の凱歌にとって、あまりにも冷たくむごい言葉ではなかったろうか。

霧が渦巻いて流れるなかに、りょうりょうと法螺貝の音が聞え、太鼓の音が期せずして両陣に起った。風林火山の大旗が朝風になびき、毘沙門天の旗もこれに応じて、颯々と鳴った。

両陣であげる潮騒のような鯨波は、高原を吹く爽やかな風に不吉な前兆のように無気味に流れる。犀川も千曲の流れも、旭光がさしそめるころはおびただしい血を流すにちがいない。太鼓の音が激しくなったかと思うと、どどっと前線の鉄炮が一せいに火蓋を切った。川中島の戦いはこうして始まったのである。

解説

早乙女貢は自らの経歴や体験について語ることの少ない作家である。その長いキャリアからすれば、私生活などに触れた身辺雑記風のエッセイが数多くあっても不思議はないのに、これが意外と少ない。その点に関して、彼に不躾ながら聞いてみたことがある。すると、即座に「想像を逞しゅうして創作するのが作家というもので、第一、自分の身のまわりのことを書く暇があったら、一篇でも多く小説を書くよ」という旨の答えが返ってきた。なるほど、と感心させられるものがあった。彼は多作タイプに属する作家であるが、こうした旺盛な創作意欲をその根源のところで持続していく力がなければ、とてもあれだけ膨大な量の作品群は生み出しえないと納得したことだった。

だが、私生活など身辺雑事について触れることの少ない早乙女貢も、曾祖父につながる父祖の血についてはこれまでに何度か語っている。それは早乙女貢の人と作品を理解する上で見落とせない最も重要なファクターでもある。彼は作家になった動機を、「私のヒーロー」と題したエッセイの中で綴っている。

「私は私の人生を、私の書きたいものを書くための存在感として受けとめているから、金を儲けるための職業として作家を選んだのではない。私は、私の裡なる怨念を発表するために作家を選んだ」

彼が言う「私の裡なる怨念」は、自らの血を父祖の代にさかのぼることで日本の近代史の流れを見つめ、それを自分なりに体系化することで歴史の法則を見いだしていくというプロセスの中から生まれてきたものである。

あまり発表されることのない早乙女貢の自己史は彼の家の歴史とまぎれもなく連鎖し、さらには近代日本の歩みがあちこちに刻み込んだ歴史の傷痕の一つと重なった一筋の流れが浮かび上がってくる。その一つらなりの歴史とそこから生じる歴史意識のありようは、まことに興味深いものがあるのだが、彼にとっては「〝歴史〟という言葉は、あまりに重い」ものとしてある。「宿怨未だ消えず」という小文の中に見られる一節だが、この小文は、次のような言葉で結ばれている。

「私も兄も満州で生れるに至ったこの我が家の歴史は、敗戦後の悲惨さとともに、軽々に語れない流亡の宿命につきまとわれている。私が作家になった動機も、この歴史が胚胎したといえるのである」

早乙女貢は、大正十五年一月一日、旧満州（中国の東北部）のハルビン市ポレッヤ街十号三番地の四で生まれた。本名は鐘ヶ江秀吉である。敗戦後、一家と共に日本へ引揚げてくるまで、彼はハルビンで育つ。鐘ヶ江家は、祖父以来三代にわたる大陸生活者であった。

祖父の八郎は、明治二十年頃に日本を飛び出してアメリカに渡った人である。苦労して成功をおさめ、帰国すると妻を娶って横浜で商売を始めた。早乙女貢の父茂一が生まれ、一家はアメリカへ移った。経済恐慌に見舞われて破産し、一時横浜へ戻った。その後、八郎は妻子を残して一人渡米し、数年後に戻ってきて成金のような暮らしを送ったのち、一家挙げて上海に渡り、フランス租界で洋酒商の店を開いて成功した。洋酒を浴びるほど飲み、ハイカラ趣味に生きて放縦な

生活をした八郎は、五十そこそこで上海で亡くなった。

父の茂一は根っからの自由人で、八郎の意志に背いて許されない結婚に走った。避暑地であった青島で、早乙女貢の母と恋愛して結婚し、中国大陸を転々として、ハルビンで早乙女貢が生まれるのである。父の結婚は、第一次大戦後、ドイツ租借地であった青島を日本が権利を継承していた時期のことであったらしい。

早乙女貢が生まれたハルビン市には、一九一七年のロシア革命後、白系ロシア人たちが亡命して来て乞食のようにさまよっていた。彼は革命の非情さを目の当たりにして育つ。

この父祖三代にわたる漂泊的な大陸暮らしについて、早乙女貢は次のように書いている。

「我が家の三代は、近代日本の苦悩をそのまま、もろに受けてきている。誰しも時代の波と無縁ではあり得ないが、その影響はそれぞれ違いがある。地理的にも、異郷にまたがっているという点が、その非運の波をもろにかぶることになったのだ」（「宿怨未だ消えず」）

「私が私自身を異質と考えるのは、父祖三代にわたる海外生活の影響がいい意味でも、悪い意味でも作用していることに由来する。／いい意味では、外国への理解があり、悪い意味では、日本人意識が、日本回帰の強烈すぎる点にある。（中略）私に日本への郷愁があったとすれば、祖母からの影響で、祖父も父も、最も明治人のある意味の典型ともいえる日本回帰を拒否するものがあった」（「わが家三代　漂泊の会津魂」）

三代にわたる海外漂泊は、八郎の日本脱出と日本回帰拒否に始まる。早乙女貢は祖父や父の日本拒否の心底に、「会津武士の頑迷さに裏打ちされた動かし難い信念の姿」（「わが家三代　漂泊の会津魂」）を見ているのだが、この信念は彼の曾祖父為親によってもたらされたものである。

為親は代々の会津藩士であった。明治維新の戊辰戦争では敗走につぐ敗走で辛酸を舐め、維新後に東京へ出て警察の剣道教師などをしながら細々と暮らしていた。そんな生活の中でも会津武士の誇りと反骨を貫き、息子の八郎に会津士魂を徹底的に叩き込んだ。頑迷な父親に反抗しながらも、反骨精神を受け継いだ八郎は、不平士族への反発と薩長の天下に対する抵抗感もあって、日本を脱出し、上海で客死するまで日本を拒否し続けた。一方、茂一にも為親以来の反骨精神が流れていたが、骨の髄まで自由人の血が波打っていたと、早乙女貢は回想している。その早乙女貢に為親の事歴や気質、武士の誇りと信念を吹き込んだのは、祖母のはまである。

「祖父は自分の生涯がどこまでいっても、会津武士の苦悩の影を曳いていることの自覚から、敢て、父に自由社会の空気を満喫させたかったのではないか。／祖母にしてみれば、むしろ、それが残念でならなかったらしい」（「わが家三代　漂泊の会津魂」）

この祖母の薫陶を受けた早乙女貢は、曾祖父以来の反骨精神をも受け継いで、維新史を別角度から照射する独特の歴史認識を持つことになるのだ。

中国から引揚げてきてからは、焼跡闇市の喧噪の中で無頼な青春の日々を過ごし、学校や職業をいくつか転々としたようだが、この頃のことについてはほとんど語られていない。彼の自筆年譜にも「昭和二十九年、二十八歳ごろより、山本周五郎の知遇を得て、創作に専念」とあるだけだ。昭和三十年代にはすでに、当時盛んだった倶楽部雑誌の有力な書き手として活躍し、新聞の連載も手がけるようになっていた。

早乙女貢が倶楽部雑誌の書き手から脱皮して、より広い発表舞台に飛び出していくスプリングボードとなったのは、昭和四十三年十一月に書き下ろした長篇歴史小説『僑人の檻』であった。

明治五年に起こったマリア・ルーズ号事件を素材にしたこの作品で、彼は第六十回（昭和四十三年下半期）直木賞を受賞した。彼にとっては、第五十六回の「鬼の骨」、第五十八回の「叛臣伝」に続く三度目のノミネートであった。

この時の直木賞選考委員の選評で印象深いのは、源氏鶏太の「長い間、懸命に茨の道を歩こうと努力して来て、それが見事に花を開いた感がある」や、事件を文学化しようとした畑眼をほめた海音寺潮五郎の「絶えず勉強してはめずらしい材料を発掘して来るので、審査員一同いつも感心していたのだが、処理の方法と文体とが新鮮さを欠いていたので、いい線まで行きながら、逸していたのである。しかし、こんどはそれを相当程度克服した」など、早乙女貢のたゆまぬ努力と精進を認めた評価がなされていることだ。とくに海音寺評は、第五十六回と第五十八回の候補作をも念頭に入れたもので、第五十八回の選評では「いつもめずらしい材料を発掘して来る作者の努力に先ず敬意を払う」と記していた。

倶楽部雑誌の書き手からの脱皮をはかった彼の地道な努力が実を結んだわけなのだが、受賞に至るまでの努力のあとは、例えば同人誌「小説会議」に発表した諸作からもうかがえる。「小説会議」は、倶楽部雑誌の懸賞小説で世に出た作家たちが中心となって組織した「泉の会」の機関誌で、昭和三十一年十一月に創刊された。第一回講談倶楽部賞を受賞し、落語や浪曲に明るく、芸道小説に定評があった池上信一を世話人に、早乙女貢や生田直親、伊藤桂一、童門冬二、白石一郎、尾崎秀樹などが加わっていた。「鬼の骨」「叛臣伝」はこの「小説会議」に掲載されたものであり、直木賞受賞作は、同誌に分載した「野鶏路（ヤケイロ）」を七年ばかりあたため、手を加えて完成させたものである。

受賞後、早乙女貢はその発表舞台を急速に広げ、現在に至るまで毎年のように、新聞と雑誌の連載物をそれぞれ二、三本ずつ抱え、そのかたわら数多くの中、短篇を発表して精力的な活躍を示している。その膨大な作品群は、時代背景をとってみても、室町・戦国期から幕末・明治期と広範囲に及ぶ。扱う素材も、「赤い渦潮」「城之介非情剣」「死神は黒衣をまとう」「海の琴」などの伝奇小説、「忍法かげろう斬り」「忍法川中島」などの忍法小説、「秘剣鱗返し」などの剣豪小説、「南海に叫ぶ」などの海洋冒険小説、「血槍三代」「北条早雲」「権謀」などの戦国武将小説、「維新の旗風」「おけい」「会津士魂」などの本格歴史小説と、まことに多彩なものがある。

「忍法川中島」は、上杉謙信と武田信玄の両雄が激突する川中島の戦いを目前にひかえて、武田方の甲斐忍衆と上杉方の北越かまいたちが繰り広げる暗闘を興趣たっぷりの仕掛けを凝らして描いた長篇忍法小説である。

その仕掛けの一つが、忍びの世界から足を洗って武士の世界に移ろうとする伊賀の下忍天耳だ。この天耳は本篇の主人公でもあるが、武田方と上杉方の間を往き来して、自分をどちらかに高く売り込もうとする。こうした天耳の行動に刺激されて、武田と上杉両陣営の忍者部隊の動きも活発となり、歴史の裏側に生きる忍者たちの冷酷非情な忍法の数々が、天耳がらみでさまざまに展開されていく。忍法小説には欠かすことのできない女忍者くの一も登場する。

だが、忍者たちの奇妙壮絶な術以上に冷酷で非情なものは、歴史の流れである。明治維新を別角度からとらえる早乙女貢の独特の歴史観は、ここでも歴史の非情さを十分に暴き出している。

清原康正

時代小説文庫　100
忍法川中島
昭和五十九年八月　一日　初版発行
平成　三　年二月二十日　三版発行
著　者　早乙女貢
発行者　中井茂雄
発行所　株式会社富士見書房
東京都千代田区富士見一―十二―十四
電話東京三二六一―五三七五（代表）
〒一〇二　振替東京⑦八六〇四四
印刷所　暁印刷　製本所　本間製本
装幀者　熊谷博人
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
Printed in Japan
ISBN4-8291-1100-3　C0193

早乙女　貢

甲賀くノ一

上巻　下巻

18—6,7

美濃の守護土岐政房の嫡男盛親は父や弟の頼芸にとり入る西村勘九郎（斎藤道三）に疑惑をもち甲賀くノ一・木ノ実を使って過去を探らせる。一介の油売りから身をおこし冷酷残忍な手口で美濃国を手中に収めていく乱世の姦雄・道三と技の限りをつくし死闘する女忍者の運命を浮彫りにしたエロティシズムあふれる長篇力作！（権田萬治）

早乙女　貢

死神伝奇

18—8

「生みたい……、ああ、もっと！」〈狼のような子が生まれるぞ〉お戯れを、あ、あ……」異様に感じた広沢の局は顔をあげた。朝鮮出兵、呂宋遠征の野望に燃えた秀吉は九州名護屋城に兵を進めていた。威嚇された呂宋の大守ゴメス・ペレスは秀吉暗殺を図らんと南蛮妖術者を送り込む。エロチシズムあふれる怪奇幻妖巨篇。（磯貝勝太郎）

早乙女　貢

かげろう伝奇

18—9

関ケ原の戦いで西軍に属した土佐藩主・長曾我部盛親は家康によって所領没収という厳しい処分を受けた。徹底抗戦か恭順かで藩論が真二つに割れる中、抗戦派の前衛となった一領具足の郷士の中に〝影野の鷹〟と呼ばれる剽悍気鋭の若者・神谷新八郎がいた。彼の情熱にあふれる戦いと恋を描いた秀逸伝奇小説。（藤田昌司）

早乙女　貢

花笛伝奇

18—10

大川の花火見物の夜、青江弦四郎は奇妙な笛の音を聞いた。川に浮かぶ屋形船で殺された芸者きよ香の心臓を、一寸の狂いもなく貫いた十方手裏剣！　江戸の夜気を裂いて飛ぶ手裏剣の正体は？　次々と起る殺人事件。被害者は何故か笛を持つ美女達。死を招く笛に秘められた謎とは!?　暴れん坊・弦四郎の剣が冴える。（武蔵野次郎）

早乙女　貢

緋牡丹伝奇

18—11

蛇ケ谷で拾われ、養父母に育てられていたお国の踊りの素質と天性の美貌を見込んでお国を引き取って仕込んでいたおりくが、いまわの際に言った言葉と一ふりの懐剣は何を意味するのか？　阿国歌舞伎の創始者として名高い出雲の阿国の悲恋と出生の秘密を通し、時代のビッグ・スターの誕生を描いた傑作長篇。（清原康正）

林　不忘

丹下左膳

全五冊

乾雲坤竜の巻(一)・(二)

19—1,2

片眼片腕の剣士丹下左膳は、刀剣蒐集狂の主君の命をうけ、小野塚道場伝来の名刀、乾雲丸、坤竜丸を狙う。左膳に奪われた乾雲丸を求めて、小野塚道場の高弟諏訪栄三郎は坤竜丸を腰に巷をさ迷う。栄三郎を助ける蒲生泰軒。左膳に味方する鈴川源一郎、櫛巻お藤らも加わり、二刀の争奪をめぐって江戸の巷に血の雨が降る。（尾崎秀樹）

林　不忘

丹下左膳

こけ猿の壺の巻(三)・(四)

19—3,4

伊賀の暴れん坊柳生源三郎が司馬道場に婿入りの引出物として持参した〝こけ猿の壺〟には莫大な埋蔵金が秘められていた。日光修復の費用に苦しむ柳生対馬守は壺を求めるが、壺は丹下左膳の手に。司馬道場の乗取りを企む峰丹波も壺を奪おうと謀る。壺をめぐって三者入り乱れて斬り合い、更に蒲生泰軒も加わる。壺はいずこに！